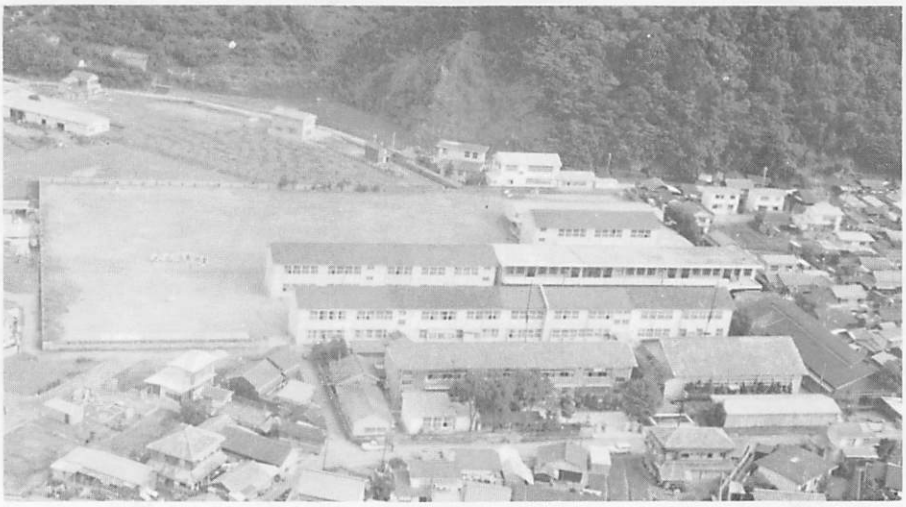
創立三十周年記念誌

高知県立須崎工業高等学校

須崎工業高校の
教の庭に身と心
新天新地光明の
輝くもとに勇ましく
日々鍛いぬく健児団

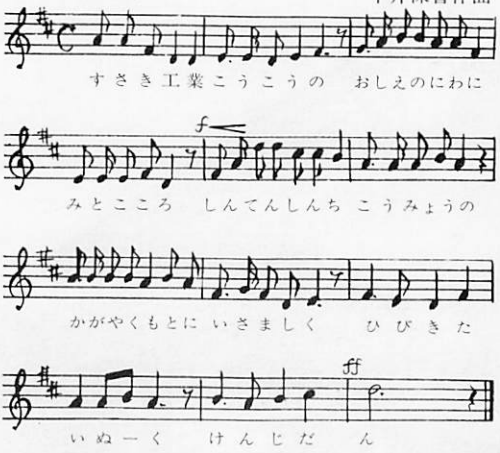
校　舎　前　影



現校舎全景

校歌

土井晩翠作詞
平井保喜作曲



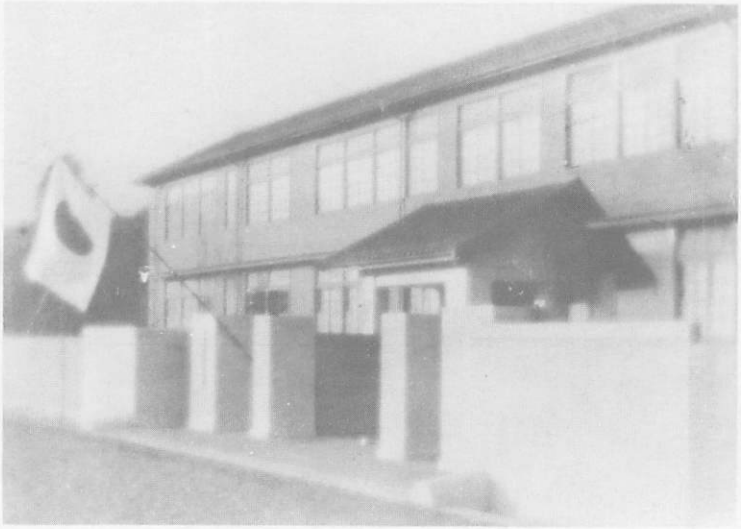
一、須崎工業高校の
教の庭に身と心
新天新地光明の
輝やくもとに勇ましく
日々鍛いぬく健児団

二、自然の暗示わが教
太平洋の荒波は
わが人生の活動か
さらに心の平穏は
波静かなる錦浦

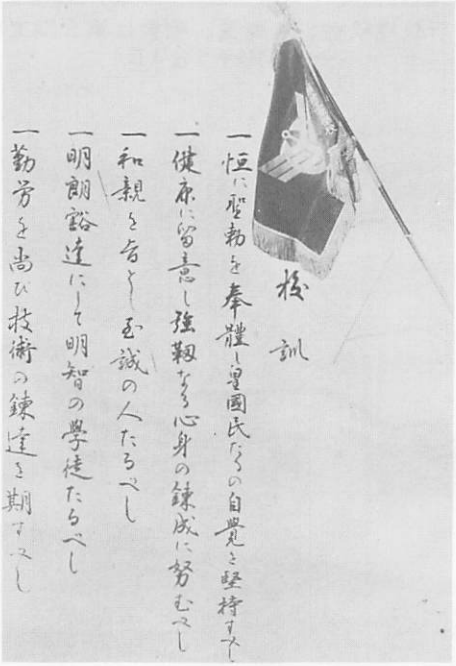
三、工業報国理想とし
自主独立の精神を
いだき責務を怠らず
真理と正義重んじて
わが向上の道を逐う

新校地校舎、鳥瞰景、校舎は第３期工事中
（昭和46年９月３日）

新　校　舎　東　面
（昭和46年９月）



創立当時の正門
（昭和18年 5 月25日）



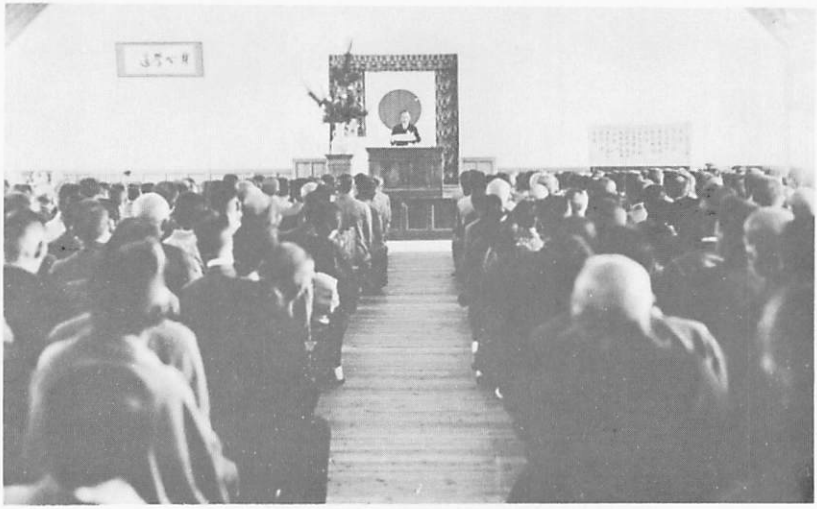
校訓

一恒に聖勅を奉戴し皇國民たるの自覚を堅持すべし
一健康に留意し強靭なる心身の錬成に努むべし
一和親を旨とし忠誠の人たるべし
一明朗豁達にして明智の學徒たるべし
一勤労を尚び技術の錬達を期すべし

創立当時の校訓

創立功労者　寺　尾　豊先生

初代校長　中　内　知　章　先生
（昭和16年 4 月～昭和20年12月）



校 舎 落 成 式 典　（昭和18年 5 月25日）
（壇上は上原後援会長）

第３代校長　小　林　秀　雄先生
（昭和22年３月～昭和26年４月）

第２代校長　西　森　威稜穂先生
（昭和20年12月～昭和22年３月）

第５代校長　森　岡　貞　篤先生
（昭和27年４月～昭和34年３月）

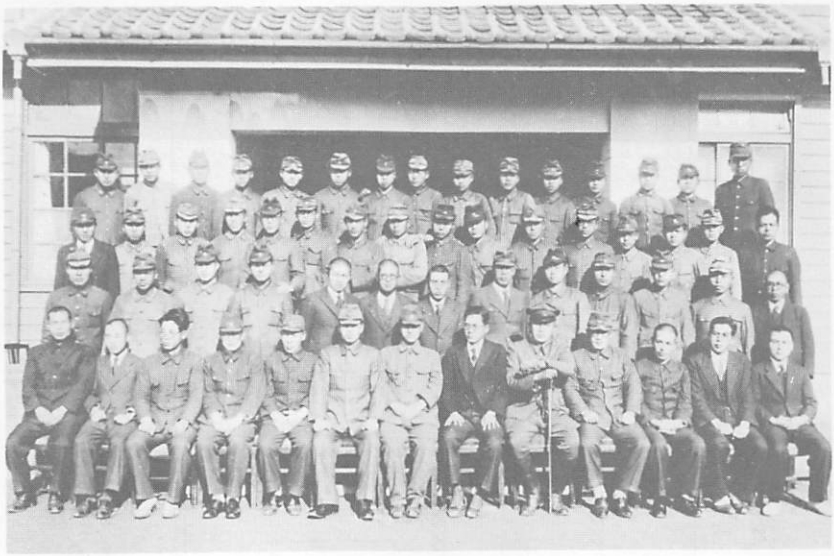
第４代校長　前　田　健　造先生
（昭和26年４月～昭和27年３月）

第７代校長　小　松　一　夫先生
（昭和36年４月～昭和39年３月）

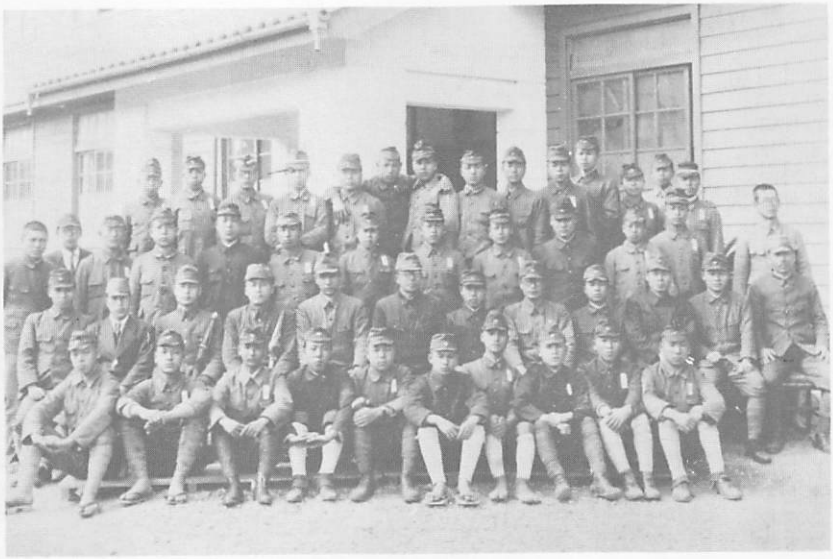
第６代校長　松　岡　常　雄先生
（昭和34年４月～昭和36年３月）

第９代（現）校長　沢　本　　豊先生

第８代校長　西　本　澄　雄先生
（昭和39年４月～昭和41年３月）

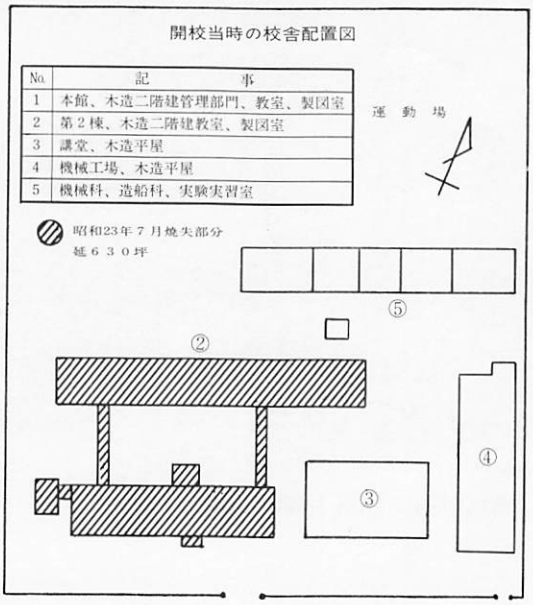


機械科第 2 種第 1 期卒業生（昭和18年12月）



機械科第 1 種第 1 期卒業生（昭和20年 3 月）

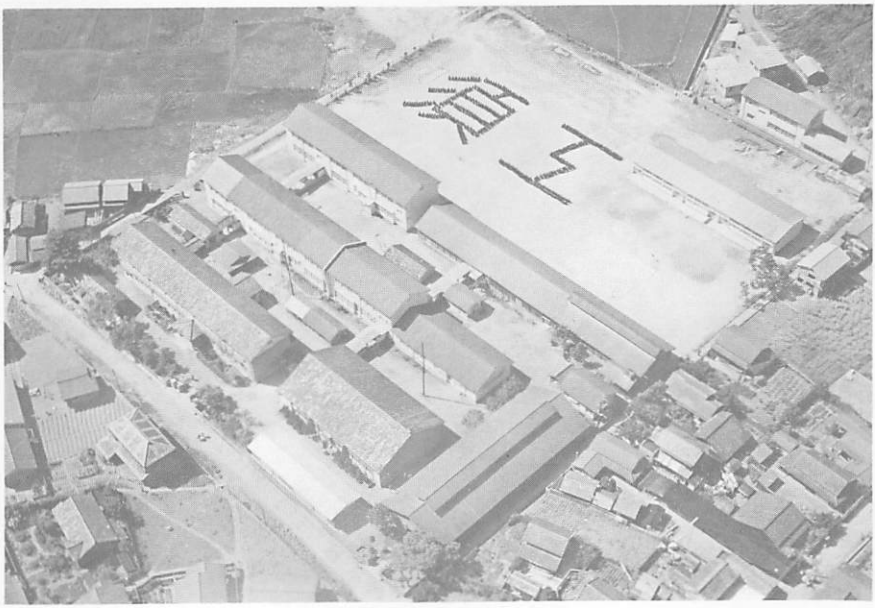
校舎全景のうつりかわり



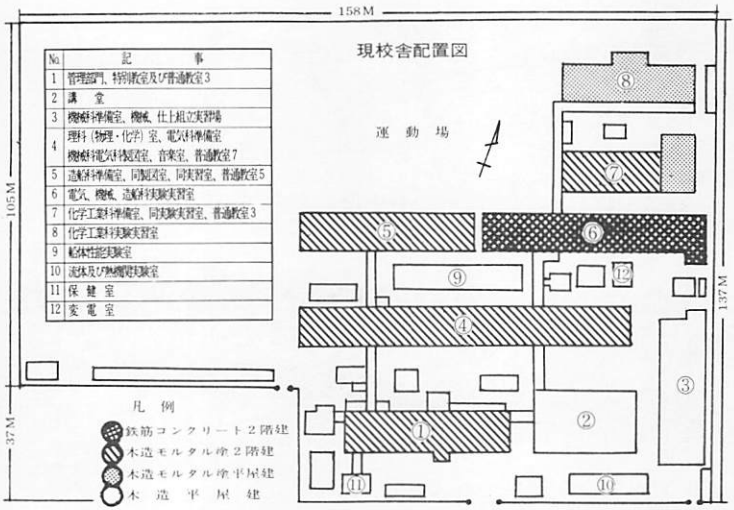
創立当時の校舎配置図
（▨は昭和23年7月焼失した部分）

劫火

昭和二十三年七月二十三日、漏電のため校舎（六三〇坪）焼失、左第一棟（管理棟）と右前方（屋根のみえる校舎）第二棟など全焼、右手前講堂は焼失を免れた。（高陵病院の階上より撮影したもの）右手前方黒きは城山。



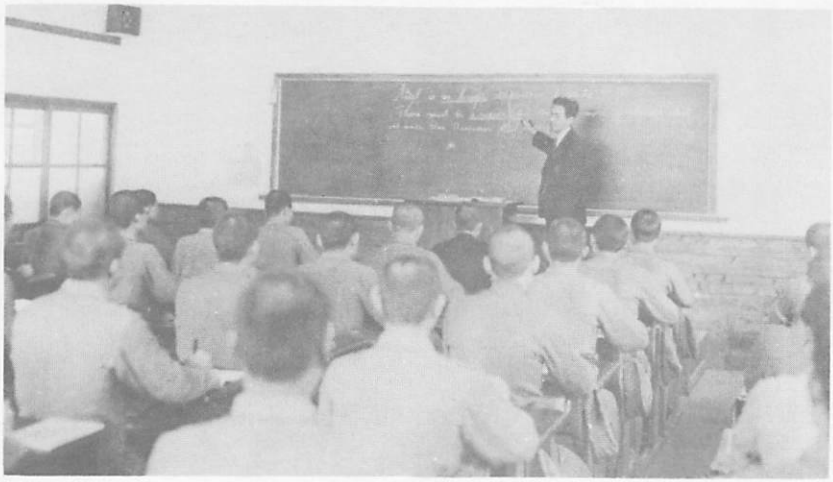
昭 和 35 年 5 月



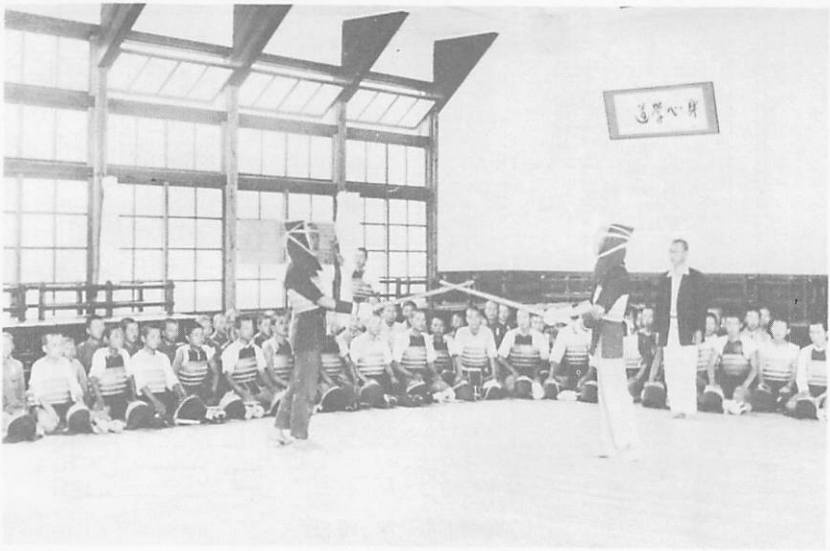
No.	記 事
1	管理部門、特別教室及び普通教室3
2	講 堂
3	機械科準備室、機械、仕上組立実習場
4	理科（物理・化学）室、電気科準備室 機械科電気科製図室、音楽室、普通教室7
5	造船科準備室、同製図室、同実習室、普通教室5
6	電気、機械、造船科実験実習室
7	化学工業科準備室、同実験実習室、普通教室3
8	化学工業科実験実習室
9	船体性能実験室
10	流体及び熱機関実験室
11	保 健 室
12	変 電 室

昭 和 46 年 10 月

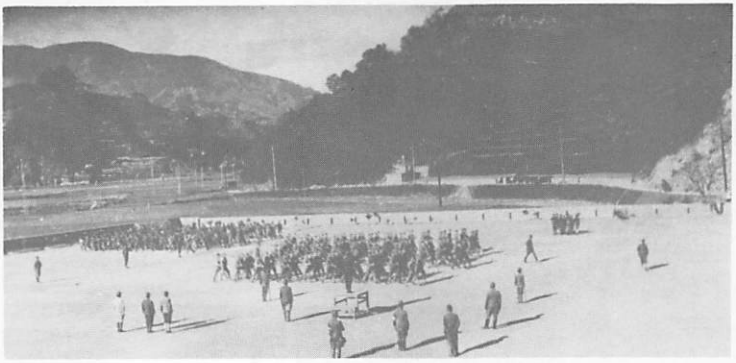
創立当時の学習風景



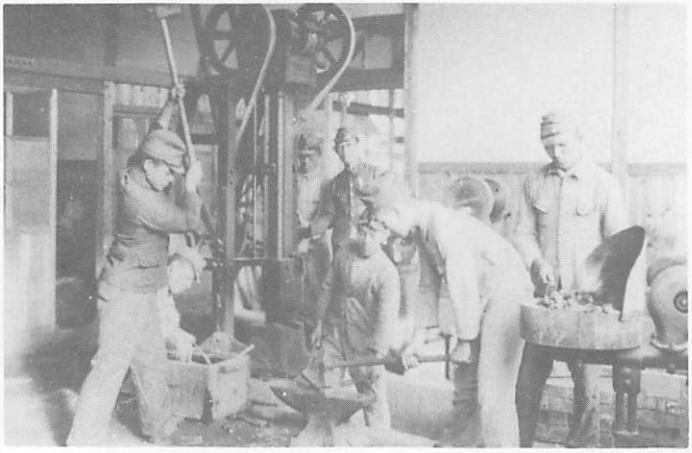
英　　語



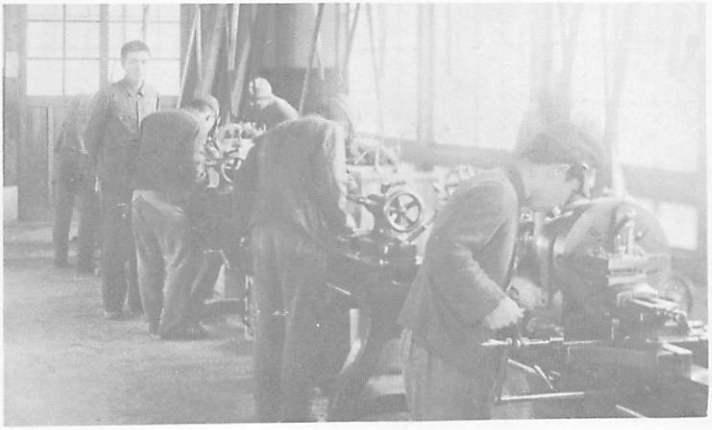
校　内　試　合（第１期生）



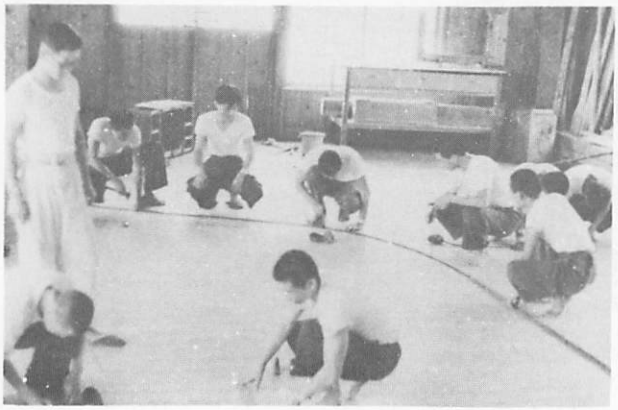
教　　練



鍛造実習



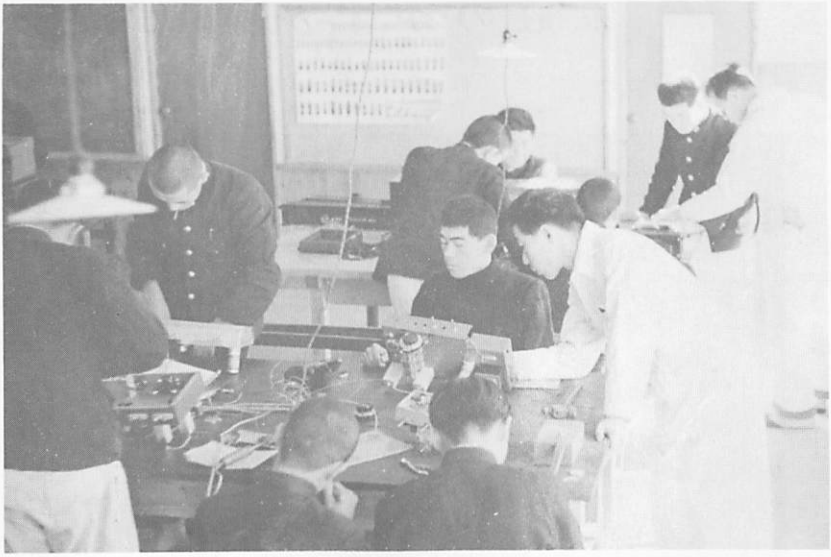
旋盤実習



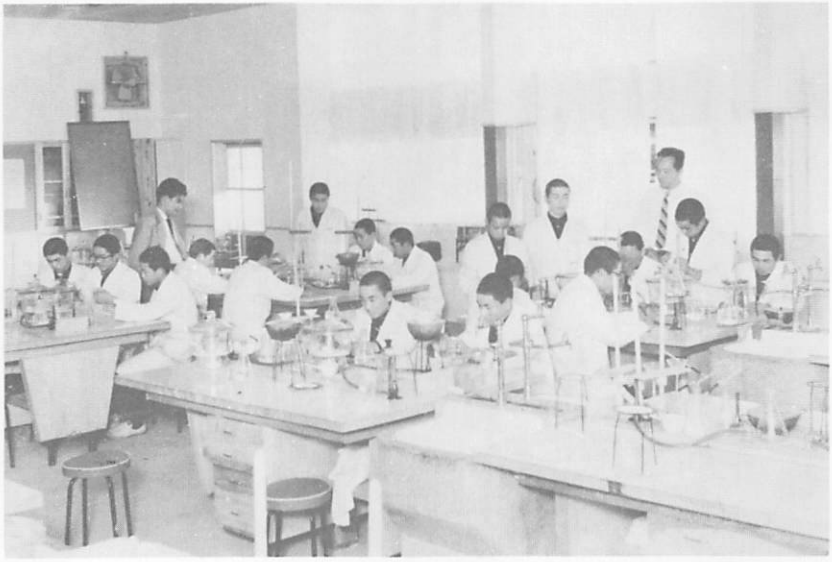
現　図　実　習

建　造　実　習

電気通信実習



電 気 通 信 実 習

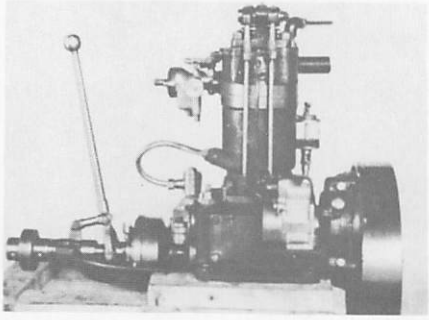


化 学 工 業 実 習

栄冠のかずかず

産業教育七十周年記念

全国生徒実習作品展



通商産業大臣賞

昭和32年度 全国高等学校相撲選手権大会 優勝 記念

32・8・25 大阪府立体育館にて　　卒業生 柳井克己君 寄

澤川中　夫辰甲　増幸井中　史憲崎岡

表彰状

団体
優勝　高知県
須崎工業高等学校

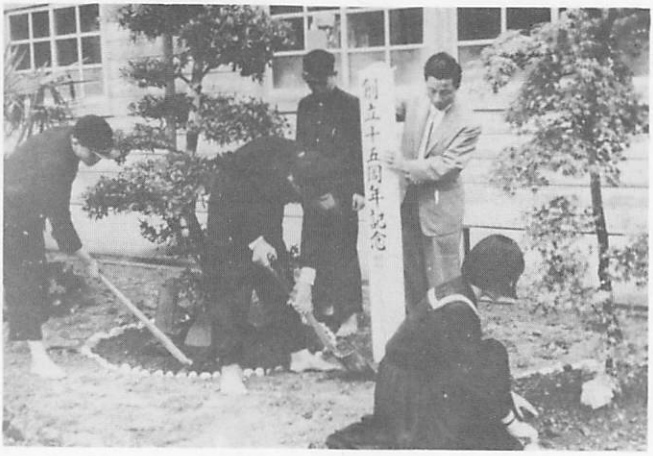
第三十五回全国高等学校相撲
選手権大会で優秀な成績を収
められたので表彰いたします

昭和三十二年八月二十五日

日本相撲連盟
全国高等学校体育連盟
毎日新聞社

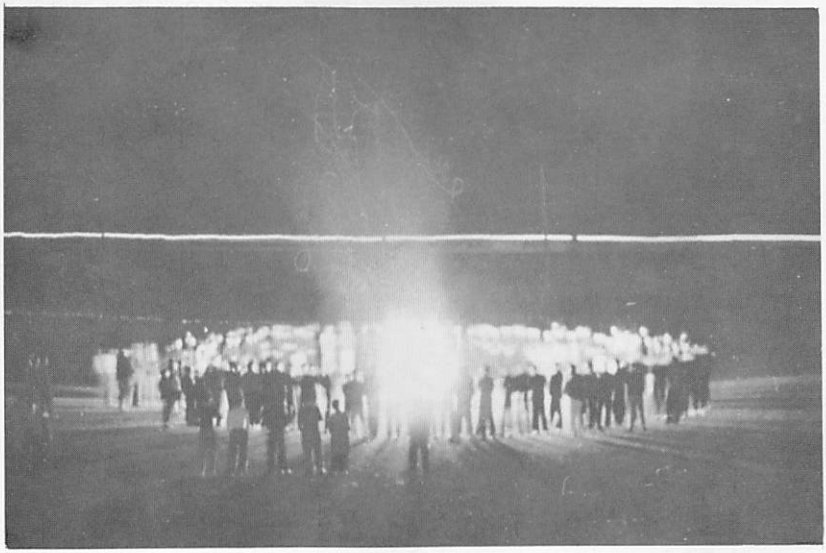
優勝杯のかずかず

思い出の行事



創立15周年記念植樹

文　化　祭



前　夜　祭

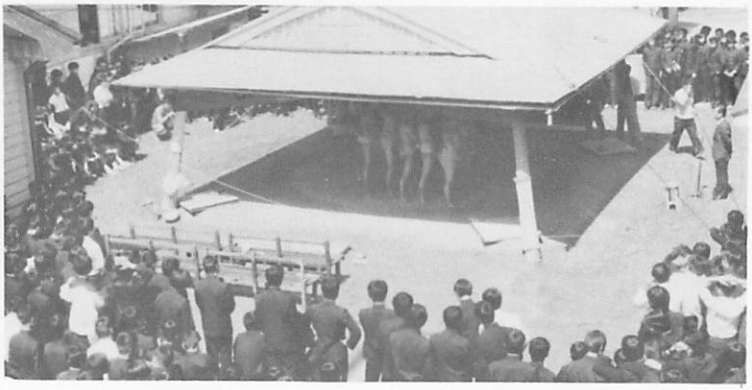
入　口　の　賑　い

仮装行列

校内の賑い

創立記念日の行事

（毎年５月25日に行なわれる校内相撲大会）



序

本校がその前身高知県立須崎工業学校として創立されてから今年で満三〇年になります。創立の事情については別掲『本校創立事情』（五代校長森岡貞篤先生）にもあるように、その背後には数々の美談が秘められております。

昭和二二年学制の改革に基づき高知県立須崎工業高等学校となりましたが翌二三年七月漏電による火災のため校舎の六割以上を焼失するという悲運に見舞れました。

校舎の焼失に加えて戦後の不況に基づく志願者の漸減などのため、県教委では本校と須崎高等学校とを統合して総合制高校にしようという議がおこりました。

然し学校長を中心とする教職員、識者、有志の方々の将来を洞察した叡智と、本校創立の由来を慈しむ父兄や地元町民の熱意とによってようやくその危機を脱することができました。

学校当局では更に本校を発展させるため地元町村の支援を得て、県当局に強く要請し昭和二七年には電気通信科の新設に成功、三四年には化学工業科、三八年には電気科を増設することができたのであります。その後電気通信科は電気科に統合されることによって発展的に廃止され、現在機械科二クラス、造船科一クラス、化学工業科一クラス、電気科二クラス、全校で一八クラス、生徒定員七二〇名の中規模工業高校となったのであります。

今までに世に送った卒業生の数は三、五六五名に達しておりますが、これら卒業生は工業界はもとより経済界、教育界、医療界など各界各層においてその中堅となって活躍しております。

星霜三〇年、孜孜として地味な産業教育に取組み偉大な貢献をなしとげて来た本校も複雑多様化する工業教育の現代化にこたえるには、余りにも校地が狭隘で到底その要請に応ずることができない情勢に立ちいたりました。これがため学校では昭和四〇年以来須崎市長を中心とし、ＰＴＡ、地元識者、有志をもって本校の移転新築期成同盟会を結成し当局に強く要請しつづ

けた結果、昭和四二年二月に至り移転新築が確定し目下着実にその計画を実現しつつあります。

この時に当り本校が辿った三〇年、その歓びや悲なしみのあとを綴って一冊とし、広くまた永く世に残すことは誠に意義深い事業であります。この事業の遂行にあたり本校の旧職員各位、同窓会、及びＰＴＡの物心両面に亘るご協力に対し衷心より厚くお礼を申しあげます。

終りに、本校の今後一層の発展と、工業教育の使命達成のため、このうえながらのご援助とご指導をお願い申しあげまして創立三〇周年記念誌の序といたします。

昭和四十六年九月十五日

高知県立須崎工業高等学校

校　長　澤　本　　豊

《目　　次》

表紙デザイン　金沢弥三平

写　真　校旗、現校舎、新校舎、創立功労者、落成式典、歴代校長第1期卒業生、校舎の変遷、創立当時の学習風景、栄冠の数かず、思い出の行事。

序　文　学校長　沢本　豊

創立事情　（遺稿）当時の学校長　森岡貞篤

挨　拶　～三〇立志～　同窓会長　田辺博造

〃　～30周年に想う～　ＰＴＡ会長　橋田忠幸

沿　革

年　表

現　況

卒業生

草分けの頃

回　想　～苗木を植えて30年～……寺尾　豊… 1

あの頃の思い出……旧師　邑田一郎… 2

座談会　～開校当時の思い出～……第2種第1期卒業生ら… 4

創立後の数年間……教諭　田村隆徳…13

須工創立と初代校長中内知章先生……元ＰＴＡ会長　中田　稔…18

校章図案作成の思い出……森　光喜…19

血　判……旧職員　大田幸吉…21

戦時下の思い出……旧職員　橋田沢視…23

申し訳なかった1年余……第2代校長　西森威稜穂…26

思い出……18.12 機械科第2種卒　清家　寛…27

故郷・母校……同　上　島崎憲一…29

ほろ苦い思い出　～校外散歩になったストライキ～

……20. 3 機械科第1種卒　矢野象一…30

須工当時の思い出……18.12 機械科第2種卒　山田弘市…32

思い出のもろもろ

二昔半前の思い出……旧職員　池上健男…35

街頭写真屋……18.12 機械科第2種卒　西川嘉明…37

創立10年の危機……第4代校長　前田健造…39

須工時代の思い出……24. 3 機械科卒　下村　昇…41

第1種第1期生の記……20. 3 機械科第1種卒　林　弘昭…43

電通科設置の頃を顧みて……元校長事務取扱　野中健一郎…44

私とドル・ショック……20．3 機械科第2種卒　片岡命長…　49
夏の終り……24．3 機械科卒　奥代重恭…　51
森岡、中内、小林先生を偲ぶ～三先生と私～…校長　沢本　豊…　53
祝創立30周年記念事業……23．3 機械科第2種卒　岡林県市…　59
造船科第4期生……28．3 造船科卒　岡林幸保…　62
栄冠の陰に～機工クラブ顧問としての思い出～教諭　広瀬雄助…　64
女生徒と共に……旧職員　宮尾常子…　69
須崎工業と私……旧職員　中沢恒雄…　71
化学工業科に学んで……37．3 化学工業科卒　橋田　泰…　72
須工と私……第8代校長　西本澄雄…　74
思いつくままに……31．3 電通科卒　矢野雅也…　76
進路指導の今昔……教諭　竹村義典…　77
創立30周年に寄せて……34．3 電通科卒　川上忠男…　80
詩　～あいつの思い出～……35．3 造船科卒　増田　浩…　81
昭和37年2月15日……38．3 電通科卒　沖田信一…　82
母校いつまでも健在なれ……44．3 電気科卒　戸田幹男…　84
僕らと須工……43．3 造船科卒　笹岡和富…　84
仕事に生きよう……44．3 造船科卒　小野昭夫…　85

スポーツを通じて

須工相撲部のあゆみ……旧職員　田原敏雄…　87
相撲部の思い出……28．3 造船科卒　岡林幸保…　91
須工陸上部の歩み……旧職員　森田鉄亀…　93
サッカー部の思い出……29．3 造船科卒　高橋忠幸…　96
野球部の思い出……26．3 機械科卒　北川和雄…　97
卓球部の活躍……旧職員　森　寛…　99
ソフトボール部の歩み……教諭　小松元邦…　101

各科紹介

生れ変る機械科　～実験実習設備の充実～……教諭　坂東長太郎…　105
造船科の生立から今日まで……教諭　合田正寛…　107
化学工業科の新設から現状まで……教諭　田所靖通…　108
電気通信科より電気科へ……教諭　森　義彰…　110

PTAの活動と移転新築

須崎工業高校ＰＴＡ略史……第5代会長　中田　稔…　113
移転新築への胎動……移転新築期成同盟会副会長　古谷義計…　115
新校地への陣痛……学校長　沢本　豊…　116
移転新築について……移転新築期成同盟会…　128
編集後記……編集委員…　134

創立事情

本校は昭和十六年四月高知県立須崎工業学校として開設されたのであるが、創立当時の事情は当地域社会の多くの人々の美しい奉仕の精神による美談の数々に包まれている。

当時本県の中等学校は主として高知市に集中していた。しかし東は安芸地区に西は幡多地区に夫々中学校女学校があったが当須崎地区にはなかったので須崎に中等学校を新設の要望が次第に強くなって来ていた。

丁度その頃教育に熱意の深い池内実吉殿が須崎町長であられたので同氏が中心となり中等学校新設の方針を立て運動を始められたようで、その時当地出身の現参議院副議長寺尾豊殿が郷土のために役に立てば幸いだと巨額の私財（昭和十五・十二、拾五萬円）を寄附せられ『本県には工業学校が一校しかなく、それも高知市にあり入学志願者も非常に多いこと故できるなら須崎に工業学校を新設して欲しい』とのご希望もあったので県当局（服部知事）に要請の結果、敷地の提供を条件として県立須崎工業学校創立の具体案がまとまり、昭和十六年二月その設立が認可せられ、機械科一科をおく工業学校として同年四月開校せられる事になったものである。（初代校長中内知章殿）

開校当時は校舎がないので須崎国民学校の諸施設を借用し授業を行いつつ約二ケ年に亘り現敷地の埋立整地作業や校舎建築につき旧須崎町を中心とする周辺地区の人々や当時の職員生徒達延べ六万五千名に上る人々の汗と油の尊い奉仕作業によって校地四、五二八坪と校舎一、〇〇六坪が竣工して盛大な落成式を行ったのが昭和十八年五月二十五日であった。

この五月二十五日を本校の創立記念日としている。

右　昭和三十一年五月二十五日、本校創立十五周年記念式典に際し記す。

当時の学校長　森　岡　貞　篤

挨拶

―三〇立志―

同窓会長　田辺博造

「三十にして立つ」という言葉があります。有名な論語の一節ですが、古来人生の転機を年令的には壮年期のスタートとも言うべき三十代においた象徴的な名言であります。

須崎工業高校が創立三十年に当り、ここに一つのエポックを劃し、乱時代を経て多ノ郷大間の丘陵に装を新にし、新時代に一歩を印さんとしておりますことは、これまた、まことに象徴的事象と言わざるを得ません。

この時に当り現校長、沢本豊先生の御熱心なる勧告により、須工の三十年を回顧する記念誌を発刊し、同窓各位の机辺にお届けすることになりました。

この小冊誌により、母校の揺籃期、青年期の消息をうかがい、そこに関係した幾多の人々の建設の努力、情熱、念願を知り、今後の母校発展のために、更に努力と協力を惜しまない気持になって頂けるなら、これに過ぎる喜びはありません。

なぜなら壮年期に入った母校にとっては、壮年期にふさわしい内容の裏付が必要であり、その意味に於て、同窓会の果す役割は、今後益々大きいからであります。

幸に今、東京、名古屋、大阪と、全国各地に力強い支部結成の実現を見、おそまきながら同窓会の組織作りも、ようやく明るい展望を感じるようになって参りました。

この気運をのがさず、三十周年をチャンスとして、更に強力な同窓会の発展と充実を進めなければなりません。

ここに須工三十周年記念誌を発刊するに当り、各位からよせられた絶大なる御支援に心から感謝申上げ、併せて今後の御協力をお願い申上げる次第でございます。

末尾になりましたが、この記念誌刊行に当り、創立の恩人、寺尾豊先生を始めとし、歴代の諸先生、ＰＴＡ役員の方々から、公私御多忙の中をおさきになっての、貴重な玉稿をおよせ頂きましたことを厚く御礼申上げ、御挨拶と致します。

挨拶

――三〇周年に想う――

ＰＴＡ会長　橋田忠幸

光陰矢の如しとのことわざもありますが、開校三〇年を想い感一入深いものがあります。当地のご出身であり郷土の大先輩である、寺尾先生のご尽力により開校したのですが、当時先生は、関東製作所で重役をして居られ、郷土より青少年を、数多く採用しておられましたが、産業人としての少年期の基礎教育の重大さを、痛感せられてのことと思われます。先生のまかれた種を関係者は、立派に育て、今日の様な実を結び、県内外の産業職場に、或は公務員等の技術職員に、或は自家営業等に活躍致して居る卒業生の数多くを見るにつけ嬉しく、また頼もしく感じる次第であります。

当校は、学校ならびに県、更に先輩、有志のご努力により、大間に立派な新校舎を建築中で、明春四月には移転することになっております。東に多ノ郷平野を一目におさめ、西に雄大な太平洋錦浦湾をみおろす眺望絶佳、青少年の教育には絶好の環境であります。

私共父兄一同は先生方と一体となって本校建学の精神を一層力強く生かすよう努力いたしたいと思います。基礎技術と社会人としての、教養を身につけた須崎工業高校卒業生が、何万何十万人と、全国津々浦々で活躍する日の来ることを祈念致してやみません。

沿

革

年　　表

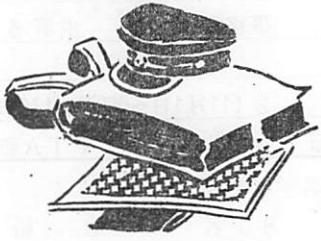
昭和年	月	記事
16	2	文部省告示をもって高知県立須崎工業学校設立認可。 機械科第一種（国民学校初等科卒入学、５年制、定員250名） 機械科第二種（国民学校高等科卒入学、３年制、定員120名） をおく。
	4	高知県立高知工業学校教諭中内知章初代校長に補せらる。 須崎国民学校の施設を借用して４月19日開校式挙行。 第１回入学生機械科第一種50名同第二種40名。
18	5	校地4,528坪に延1,000坪の校舎竣工。５月25日開校式挙行、この日をもって開校記念日と定める。
	8	中学校令、戦時特例により修業年限を４ケ年とする。
	12	戦時特例卒業期繰り上げにより機械科第二種第１回卒業生38名を送る。
19	4	造船科（国民学校初等科卒入学、４年制、定員30名）を新設す。
20	3	機械科第一種第１回卒業生45名同第二種第２回卒業生37名、計82名を送る。
	12	中内知章校長退職し、前徳島県立工業学校教諭西森威稜穂２代校長に補せらる。
21	4	戦時特例廃止により修業年限を５年に復帰す。 第二種制廃止により生徒募集停止。
22	3	西森威稜穂校長退職し、教諭池上健男校長事務取扱を命ぜらる。
	4	学制の改革により23年度より新制高等学校に切替えるため第１学年生の募集を停止し第２、第３学年生徒は新制度による併設中学校の第2、第３学年生となる。 前広島市立第一工業学校長小林秀雄３代校長に補せらる。
23	4	新制高等学校としての高知県立須崎工業高等学校となる。 校歌制定さる（作詞土居晩翠　作曲平井保喜）
	7	火災のため校舎など合計630坪（本館　校舎　第２棟校舎、小使室、便所、倉庫）焼失す。原因は本館天井裏配電線からの漏電。 焼失を免れたもの講堂、機械工場など379坪。
	9	造船科　現図実習室、木造平屋５０坪竣工。

昭和年	月	記事
24	3	新制工業高校としての機械科第１回卒業生38名を送る。旧制機械科第一種第４回卒業生36名、同造船科第１回卒業生28名、合計64名の旧制度最後の卒業生を送る。
	5	災害復旧第１期工事（本館校舎、小使室、便所、廊下など289坪）竣工。
25	3	新制工業高校としての造船科第１回卒業生19名を送る。
26	3	小林秀雄校長退職し、前高知県立窪川高等学校長前田健造４代校長に補せらる。
	8	前田校長病気休職となり、教諭野中健一郎校長事務取扱を命ぜらる。
27	2	高知県教育委員会は昭和27年度より本校に電気通信科を増設のことを決定。
	4	前高知県立高知工業高等学校長、森岡貞篤５代校長に補せらる。 電気通信科新設のため本校の学科は機械、造船、電気通信の三科となる。
28	6	校長公舎（用地70坪、木造モルタル平屋25.5坪）落成。
	10	文部省より28年度産業教育研究指定校（向う２ケ年間継続）として指定を受く。 （研究題目）電気通信科における好ましい生産実習の運営について。
29	3	災害復旧第２期工事（昭和28年度工事）竣工。 第２棟校舎焼跡西端部　木造２階建延122.5坪　渡り廊下３坪 計125.5坪。
	11	産業教育70周年記念式典（日比谷公会堂）において記念行事の一つとして催された全国の産業教育校における実習作品展（東京三越本社）に本校より出品した３ＨＰ舶用石油エンヂンが機械部門第１位に入賞し通産大臣賞を授与せらる。
30	3	電気通信科第１回卒業生33名を送る。
	4	災害復旧第３期工事（昭和29年度工事）竣工。 第２棟校舎東端部　木造平屋60坪（電気通信科実験室）同12坪（溶接実習場）計72坪。
	11	文部省産業教育研究指定校としての研究成果発表会開催。 （題目）電気通信科における好ましい生産実習の運営について。

昭和年	月	記事
31	4	災害復旧第４期工事（昭和30年度工事）竣工。 第２棟校舎焼跡中央部　木造２階建延 152 坪（電通科実験室、標本室、製図室）その他合計170坪。
	5	５月25日創立15周年及び災害復旧落成祝賀式典挙行。
32	1	31年度校舎増築工事竣工、木造２階建延 103 坪（造船科木工室及び同製図室）
	8	全国高等学校相撲選手権大会において団体優勝をなす。
	12	32年度校舎増築工事竣工、木造２階建（31年度工事の西に接ぎたし）113坪（普通教室３室、精密測定実験室）その他８坪合計121坪。
33	3	高知県教育委員会より本校相撲部に対し32年度高知県児童生徒文化賞が授与さる。
	4	校地西側に運動場拡張用地として322坪を購入。
34	2	高知県教育委員会は昭和34年度より本校に化学工業科を増設することを決定。
	3	33年度校舎増築工事竣工、講堂南側木造平屋36坪（原動機実験室）。
	4	森岡貞篤校長高知県立高知工業高等学校長に転補。前高知県立清水高等学校長松岡常雄６代校長に補せらる。
35	3	34年度校舎増築工事竣工、第２棟校舎西端部に木造２階建延50坪（１階教室、２階図書館）を接ぎ足す。
	4	化学工業科第１期工事竣工、木造平屋建、実験実習室107坪。
	5	校地西側に運動場拡張用地1,182坪を購入。
36	1	化学工業科第２期工事竣工、木造２階建延173坪（普通教室３室、実験実習室）その他62坪、計235坪。
	4	松岡常雄校長退職、前高知県立高知工業高等学校教諭小松一夫７代校長に補せらる。
	11	創立20周年記念式典挙行。（学校、同窓会、PTA共催）
37	3	36年度校舎増築工事竣工、電気通信科実験室60坪を２階に改築、製図室完成。
	10	運動場拡張整地工事完了。
38	4	37年度校舎増築工事竣工、木造２階建延 100 坪、普通教室４室、木造平屋40坪、船体性能試験室、木造平屋12坪、保健室その他３坪、計155坪。

昭和年	月	記事
39	3	実験実習施設整備計画（機械科及び造船科の木造建物を鉄筋コンクリート造に改築すると共に電気科の実験実習施設の拡充）に基づく第１期工事竣工。鉄筋コンクリート２階建延 365 ㎡、階下鋳造、木型実習場、２階電気高圧室、電気機器実験室。
	4	小松一夫校長高知県教育センター理科部長に転補、前中央教育事務所長西本澄雄８代校長に補せらる。
40	3	電気通信科を廃止し、電気科を強電コース、弱電コースの二学級とする。
	4	実験実習施設整備計画にもとづく第２期工事竣工。鉄筋コンクリート２階建延466㎡、１階鋳造実習室、材料試験室、溶接実習室、２階電気計測室。
41	4	西本澄雄校長高知県立小津高等学校長に転補、前高知県立高知工業高等学校教頭沢本豊９代校長に補せらる。
	7	実験実習施設整備計画に基づく第３期工事竣工。鉄筋コンクリート２階建延331㎡、１階造船科現図室、２階電気工作室。
	12	電気事業法の規定に基づく主任技術者の資格等に関する省令第１条第１項の規定による学校の認定を受く（通商産業省告示第 577 号）
42	1	高知県教育委員会の告示により本校の学科は従来の「機械科、造船科、電気通信科、化学工業科」を改め「機械科、造船科、化学工業科、電気科」となる。
	4	学校の移転用地を須崎市多ノ郷字中郷、金堂、和佐田に校地ならびに進入路合計28,720㎡(登記面)を購入。買主、高知県立須崎工業高等学校移転新築期成同盟会長天野剛利（須崎市長)。
	7	移転用校地及び進入路造成工事着工、施工主天野剛利、工事施工者関西土木株式会社、設計、監督、検査、高知県教育委員会。
43	4	校地ならびに進入路造成工事完工、県教育委員会の検査をうく。校地（35,000㎡)、進入路（926㎡）は本事業に要した工費総額5,058万円をもって県教育委員会に買上げらる。
44		

昭和年	月	記事
45	3	移転校舎新築起工式挙行。 移転校舎新築第１期工事着工。
	7	移転校舎新築第２期工事着工。
	10	移転校舎新築第１期工事竣工、鉄筋コンクリート造４階建、中廊下、延1,599㎡（校長室、事務室、職員室、化学教室、視聴覚教室、音楽室、電気科製図準備室、普通教室４室など）工費 5,358万円　施工者高知土建(株)
46	4	移転校舎新築第２期工事5,398㎡竣工。 内　　訳 本館：鉄筋コンクリート４階建第１期工事に接ぎ足し分2,270㎡（合計本館延3869㎡） （応接室、進路指導室、保健室、物理教室、造船科製図工、電気科製図室、図書館、機械科製図室、書道室、普通教室５室） 南校舎：鉄筋コンクリート３階建、延2931㎡（材料試験室、工業計測室。流体実験室熱機関実験室、精密工作室、船舶材料　電気室、校舎溶接船舶建造室、現図実習室、木工実習室、電力工事室、電気計測室、電子工学室、電気機器室、電気応用実習室、自動制御室、電気工事室、物現化学室、化学工学、設備管理実習室、工業試験室、機器分析室、天科室、化学分析室、製造化学実習室、普通教室５室など） 変電室：36坪、渡り廊下161㎡ 工費16,451万円、施工者高知土建(株)
	7	移転校舎新築第３期工事着工。



現　　況

施　設　概　況　（建築中の新校舎関係を除く）

区分			面積	記事
学校建物	校舎	普通教室	1,256m²	
		実験実習室	3,144m²	
		管理関係等	3,046m²	
		計	7,446m²	
	講堂		396m²	
	その他		75m²	
	計		471m²	
学校用地	建物用地		9,359m²	
	屋外運動場		8,600m²	
	その他		650m²	
	計		18,609m²	
職員住宅	校長		（建坪）83.5m²	1戸
	教員		（建坪）132.2m²	4戸
	計			

教　職　員　78名（3名）　　（ ）内は臨時職員の内数

職名＼区分	普通科	機械	造船	化工	電気	計
校長	1					1
教諭	18	11	5	5	10	49
養諭	1					1
実助	1	2	1	1	3	8
講師	1	1				2
事務	事務長 1　主事 3					4
用務	2					2
守衛	2（11月1日～翌年4月30日臨時1）					2(1)
校医 3、学校薬剤師 1、臨時職員 2、PTA職員 3						9

生　徒　定　員（各学年とも）

機械科	80名	造船科	40名
化学工業科	40名	電気科	80名
		計	720名

卒　業　生

工業学校の部

年　月	機械		造　船	小　計	累　計
	一　種	2　種			
18. 12		38		38	38
20. 3	45	37		82	120
21. 3	47	37		84	204
22. 3		40(2.一種)		40(2.一種)	244
23. 3	19(29工高)	25(9.工高)		45(38工高)	289
24. 3	12(24工高)		9(19工高)	21(43工高)	310

註（　）数は2種から一種へ、工業から工高へ移籍した人数。

工業高校の部　(註、累計は開校以来のもの)

年　月	機　械	造　船	電　通	化学工業	電　気	小　計	累　計
24. 3	38					38	348
25. 3	24	19				43	391
26. 3	28	25				63	454
27. 3	48	11				59	513
28. 3	37	5				42	555
29. 3	45	16				61	616
30. 3	48	12	33			93	709
31. 3	65	15	32			112	821
32. 3	60	17	41			118	939
33. 3	72	19	34			125	1,064
34. 3	80	18	33			131	1,195
35. 3	84	22	42			148	1,343
36. 3	84	29	37			150	1,493
37. 3	85	25	42	40		192	1,685
38. 3	87	26	44	45		202	1,887
39. 3	81	23	41	39		184	2,071
40. 3	90	28	41	44		203	2,274
41. 3	81	22	37	39	41	220	2,494
42. 3	87	31	40	37	44	239	2,733
43. 3	85	23		37	79	224	2,957
44. 3	75	30		39	65	209	3,166
45. 3	72	31		26	67	196	3,362
46. 3	78	27		26	72	203	3,565
計	1,544	474	497	372	368	3,255	

草分けの頃

回想

――苗木を植えて三〇年――

寺尾　豊

高知県立須崎工業高等学校が、創立以来、三〇周年の偉業を樹立し、多くの人材を世に送り、郷土並びに国の発展に寄与することが出来たその歓びの記念事業として先づ母校創立三〇年誌を発行するに至ったことは誠に意義深いものがあります。

これも、ひとえに、関係当局並びに、初代校長、中内知章氏を初め、卓絶した関係者各位のご努力のたまものであり、更にまた、卒業生諸君の真面目な実力が、社会的に認められ、且、愛校の精神による、ご協力の結果だと思います時、開校に関与した私と致しまして、その悦びと感激を身近かにかみしめながら改めて、関係者の皆様に深甚の謝意を表する次第であります。

春雨秋風三〇年を今顧りみます時に、昭和の初年に日本を襲いました、経済恐慌の嵐が漸くおさまると同時に、人材の育成と、産業の振興が急速に唱導された当時の須崎町には、中学校はなく、遠く高知市に学ぶ不便を重ねて居りました。このことに対処するため、町長池内実吉君を中心として、須崎町に中学校の誘置運動が澎湃として起った当時の事が昨日のことの様に思い出されます。

爰に、私は、高知工業学校開校と同時に入学し、技術や薫陶をうける過程におきまして高知工業創立者、竹内綱・同明太郎両先生の、農を以て国を養い、工を以て国を富ましむる、この先生の座右の銘とも云うべき精神に立脚し、立国の大本は、農をもってその基礎をきづき、国土は狭く、繊細な技倆をもつ国民性を生かして、工業の隆盛発展により、文化並びに生活の安定と、経済の高度化を、その基盤とすべきだとの信念をかたく致しました。

この考えを実行にうつすため、東京に、関東正機株式会社を創立しました処、先輩並びに志を同じくする郷土の青年同志の協力を得て、会社は目的の方向に発展致しました。

私は、その余力をもって、郷里須崎に工業教育の施設を致し度いと考えて居りました矢先、たまたま、友人池内町長より、須崎町に中学校の誘置運動をおこしているからと、協力方の要請があり、私はこぞとばかり、今迄の信念からして須崎には工業学校の必要性ありと強く説きました結果、幸に、関係者並びに町長の賛同を得、一致してその運動を展開し、私も建築資金等を御寄付すると共に、当時、特に調達極めて困難であった、実習用機械器具全部を提供し、優秀な指

導陣と相まって、完全な教育が出来たことは、私にとって、生涯忘れ去ることの出来ない、最高の喜びでありました。

この様にして、本校は、太平洋戦争に突入しようとする、昭和十六年に、機械科のみではあったが、待望の開校を見たのであります。

しかし、本校の歩んできた道は決して平穏ではありませんでした。

戦争の深刻化に伴い、関係者の応召、社会的混乱、遂に敗戦をむかえ、日本のすべてがそうであったように、色々の困難に遭遇したが、その後、教育制度の改革により、工業高等学校として発展し、機械、電気、化学工業、特に全国にも例の少ない、造船科を設置し、その内容とともに、校名はあがり、人材及び技術教育の高度化は、社会的にも信頼を得て、創立の目的を達成しつつあり、当初百名の生徒は、現在毎年二百余名の卒業生を世に送る盛況となり、漸く、校舎等の拡充に迫られ、今回大間地区に、広大な敷地を得て、理想的、近代的な、施設の充実に向っておりますことは、誠に喜ばしき次第であります。

私は、以上のような関係で、須崎工業高等学校の関係者各位とは、血のつながりさえ覚え、身近かな問題として今後の御活躍を心から御期待申し上げる次第であります。

本校が、益々発展し、創立並びに、教育の目的に向って、更に邁進することを祈念してやみません。

（四六・九・五　元郵政大臣、参議院副議長）

あの頃の思い出

旧職員　邑田一郎

寺尾豊先生の寄付で県立須崎工業学校が、誕生することとなり、須崎町は寺尾先生に心から感謝するとともに、高岡郡の中心地として凡ゆる機関の備わっていた須崎に、ただ一つ欠げていた中等学校が生れることは、それこそ須崎町あげてのよろこびであった。そのよろこびの裏には次のような話もあったようであった。

大正も末に近い頃、佐川町と現在の佐川高校の誘致争をして一敗地にまみれ、聊か面目を失っていた須崎は、佐川に対抗する意味合でもあるまいが、組合立須崎実業女学校（現在の電報電話局はその跡に建っている）の内容を充実して子女の実業教育の振興を図った。

普通科二年本科二年の四年制、その上に研究科一年別科一年、研究科へは本科の卒業生と高等女学校卒業生を収容することを看板とし、別科は更にその上で、施設の充実を図るとともに、指導者にも有資格者をいれて、実業科では高等女学

校にヒケをとらない陣容を整えていた。事実佐川や高知市内の高等女学校の卒業生が研究科に入るようになった。

これは当時の須崎町の指導者が、県立女学校のないために如何に苦悩していたかの一面を、物語るものであろう。こんな時、寺尾先生の御好意で郡下唯一の男子中等学校の創設は、町を挙げての朗報であった。（この頃高知市以外で県立中等学校のあったのは安芸町に中学校と女学校、中村町に中学校と女学校、佐川町山田町に女学校があったのみである）

校地が糺町に決ってから、建築にとりかかる迄の整地に、町民の勤労奉仕があったのは、寺尾先生への報恩と対面上どうしても中等学校がほしかったという、ひそんでいた意識があらわれたことと思う。当時の松下組合校長は寺尾先生と親しかった関係もあって、特に青年学校、実業女学校の教員生徒は、整地に毎日のように勤労奉仕をした。町をあげての奉仕である。バイリョウ、担い棒、三ツ鍬、今のように気のきいた用具はない。これこそ竹槍で肉迫戦をやるようなものである。先づ最初の鍬入れは東南隅の少し高かった桑畑であったように思う。丁度暑い頃で汗をふきふき、原始的な用具で桑の株抜き、三ツ鍬も役立たない礫交りの砂土を、それこそ人海戦術で西方の低地にバイリョウで二人一組になって運んだものである。他人様の学校づくりに、こんなに奉仕をせにゃいかんかと不平もでた。然し須崎に待望の中等学校の生れるという喜の気持もあってか、組合校の生徒も馬力をかけて整地に汗を流してくれたのである。

奉仕も終り、本館（昭和二三年七月火災のため焼失）が出来あがると、仮校舎の須崎小学校にいた生徒も本校に移り、借家から我が家で腰を落ちつけて勉強に精を出しだした頃、私は中内校長の請をうけて、体操科の嘱託として確か、週二時間か四時間位＝月手当五円？＝で須崎工業の新しい歴史をつくろうと、真剣なまなざしに燃えた生徒の対手をすることとなった。

校舎もまだ整っていない時だし、ろくな運動場のあろう筈もない。ましてや戦時下、資源の欠乏している時、運動用具はないし、殺風景な運動場で満足して貰えなかった、あの頃の生徒に気の毒な思をしたことであった。寺尾先生から初代校長として、懇望されて赴任された、中内先生は、温厚な方であり、黙々として、新設校の経営に当たられた。その人柄に動かされて、嘱託とはいえ、何とかして御酬いせねばと働かせてもらったものである。

運動場の東北隅に鉄棒を三間と附設した砂場をつくって貰い、それが唯一の運動用具、時により組合校から跳箱を借用したこともあったかと思う。全くの徒手空拳、味もそっけもない授業であったと思う。時により準備体操が終ると、池山から池ノ内一周マラソン、当時の池の内は何の障害もない、

見透しもきき、サボル者はすぐわかるし、誠に都合のよい校外運動場であった。私が昭和十九年県の社寺教学課へ体育担当者として入るまで、短い時日ではあったが、あの頃を想い出して懐しさが一杯である。

母校の校地校舎を失うことは、心のよりどころを失って、何となく寂しいものである。私は二十年ぶりに第二の故郷である須崎へ帰ってきた。ところが当時関係した三つの学校がそれぞれ移転し又移ろうとしている。組合校跡は電報電話局になり、思い出のものは講堂前の一本の公孫樹だけである。漁村修錬場のあった水産試験場もないし、須工が今度大間の丘陵上に移るし、新しく発展するためには結構なことではあるが、跡地がショッピングセンターになっても、せめて須工を想い出す校門か樹木か記念になるものを残して貰い度い。創立当時ここで学んだ者には特にその感が深いと思う。何か残してほしいと思うのは私だけではあるまい。

（四六・八・三〇　県議会議員）

座談会

＝開校当時の思い出＝

日時　昭和四十六年八月六日　午後五時～六時三〇分
場所　須崎工業高校校長室にて

出席者　校長　沢本　豊
教頭　久　正一
第二種　清家　寛
第一期生　広田四郎
同　橋本忠行
同　海地清幸
同　矢野亀雄
同　田辺博造

出席者揃うと沢本校長先生より壁にかけてある写真を示し、開校当時の敷地、校舎等について、更に、昭和二十年火災による校舎の焼失、その復旧後の状態等につき、説明がなされる。

沢本　それでは、皮切りに会長さんからその当時の思い出を話して下さい。

田辺　そうですか、では座談会に入りましょうか……今日は突然でしたけれども、皆さんにお集り願って、三〇周

年記念誌にのせる開校当時の思い出話を集録しようということで、校長先生のご熱心なアドバイスもありまして、お集り願ったわけでありますが、お忙しいところどうも、ごくろうさんでございます。

それから、ちょうど東京で大変活躍されています海地君が一〇年ぶりに帰郷され、このあと皆さんと一緒に楽しい二次会もやろうという献立もあるわけで、それを楽しみに一時間ばかり開校当時のことを、いろいろと雑談したいと思いますのでよろしくお願いします。

どういう話をするか、マア何でもいいわけですが、一つ入学試験のあたりから始めましょうか。どなたでも結構ですから、入学当時の思い出から話して下さい。

氏 広田四郎　氏 海地清孝　氏 田辺博造

広田 三〇年昔のことぢゃけんのう（笑）。

清家 まあ、話ししょったら分らあ。

広田 私はその当時大阪におって、おやじがこっちへ帰るということで、一足先にこちらへ帰えれということで、ちょうどその時工業学校が出来るということで、それで受験に帰って来て、その時間違うて高知へ下りて、高知工業へ行って、ここぢゃないということで、それからこちらへ来て受験したというようなことでしたが。

田辺 あの当時筆記試験はあったかなあ。

矢野 なかったよ、内申と口答試問だけ。

田辺 内申、口頭試問というテストのはしりぢゃったぜ、のう。

久 その頃は志願者と合格者とどの位の割合でした。

矢野 二・八人か三人に一人ばあなもんぢゃった。二種の一期は三十八人とって、一〇〇人近く来ちょった。

田辺 よう、覚えちゅうのう。

矢野 いや、あんなことばあしか覚えちょりゃせん（笑）面白いがが受けに来ちょったぜよ。勿論小学校で試験をやった。試験官は高知工業から来ちょった。

沢本 その時分は先生が居なかったでしょう。

田辺 校長さんが居て、森岡千足先生が来て、大田先生がこられ、それから田村隆徳先生（ダンゴさん）が来られ

た。この四人が一番草分けの先生で、それから次々と赴任して来られた。

（先生達の名前を順に久先生読み上げる。）

矢野亀雄氏

矢野　ダンゴさんが二十五ばあな時ぢゃったけんネェ。

沢本　何に一番不自由しました。学校へ行くのに、勉強に、その当時……。

広田　そうぢゃねェ、その当時は勉強ち、桑畑の桑の抜根作業で……いつごろまでやったかねェ。

矢野　卒業する時分にようよう校庭が出来たわのう、東の端まで埋ってネェ。

沢本　トロッコ押して、モッコかついで…。

矢野　そうです、夏休みもなかったですよ。少々は休んだが、あんまり日中にやったらエラいけんゆうて、朝一寸やりよって、小学校の南の校舎で一寸昼寝さしてもろうて、それから又やったワのう。

広田　普通の土地の整地ならしよいが、べったり桑畑でネェ、あの根っ子を掘り起してやらんといかんので難儀をしたネェ。

橋本　小さなウインチを持って来て、ガリガリやってネェ。

矢野　何しろ物のない時分で、服でも全部揃わざったも、のう。体操のトレパンも麻とスフのまじりのネェ、こんど洗うたら、いながらステテコみたいにちぢんでのう。

（笑）

久　あの野性のラミーというやつよネェ。

海地　ボタンが金ボタンでなくて、カラツのボタンで、靴は豚皮の毛孔がいっぱいあるものをはいて、帽子は全部戦斗帽という不恰好なものをかむって、ゲートル着用してないと登校されんという、オール軍国調でしたからネ。

田辺　戦時下の軍国主義一本の時代だったのに、特に軍国主義教育ではなくて交戦国のアメリカに対しても、技術面で非常にすぐれた国だというようにおっしゃって、中内校長は決して『鬼畜米英をやっつけよ』というようなことは口にされなかった。そういう点でも非常に偉い先生だったと思うねえ、中内校長さんは。

沢本　それはやっぱり、中内先生も技術屋ですからねえ。

田辺　ええそうですねえ、国をあげてああゆう教育が行われていた時代に、現実を正しく生徒に教え、地に足をつけた教育の体勢をキチンと敷いておられたということは、すばらしいことだと思いますネェ。

沢本　それほやっぱり竹内綱先生、明太郎先生の流れを汲ん

でいますからねえ、寺尾先生が県へご寄付されたのも、高知工業第一期の機械科の卒業生で、卒業後も竹内先生の厄介になった、そんな関係で政界へも入った。そういうご縁があるから、金も出来たしこの際竹内先生にあやかりたいというお気持があったでしょう。だから池内町長（当時の須崎町長）さんが中学校（今の普通高校）を作りたいから寄付せんかよと言うたら『中学校なら厭だ、工業学校なら寄付しよう』と言うた。ということをご本人から承ったことがありますがネ。

橋本　どれ位寄付したろう、額は……。

矢野　一五万円ぢゃったねェ、当時機械工場に据えつけた四尺の一番こんまい米式旋盤が二、〇〇〇円、月給が百円から百二〜三拾円という時代の一五万円ぢゃきのう。今の値打でゆうたら一億ばあに当るねェ。

海地　小学校の借りずまいというのはいつごろまでぢゃったかネェ。

橋本忠行氏

橋本　二年生になって機械工場へ移ったから一年足り足らずぢゃなかったかな。

広田　小学校では授業だけをやったねェ。

沢本　学校が出来るまで、小学校をかりたわけですネ。

橋本　そうです。小学校の東の隅の二教室をかりて、一種、二種のそれぞれ第一期生が授業を受けました。

海地　それから機械工場が一番先に建って、機械工場の中をしきって、一種、二種と教室をつくって、引越したように思うがなあ。

広田　あの機械工場の機械の据えつけも全部我々がやったぜよ。毎日機械が入ってくるが楽しみでネェ。

沢本　よう其の時分に旋盤があったネェ。

矢野　ええ、その時分中内校長先生がタイプを買うてネェ、機械を注文するにも、ガリ版ずりでやったらいかんけん、一寸ハッタリかますけん、わしはタイプで打ってやりよう言うてびっしり言いよったがネェ、注文するのに。機械は来たが動力が来いでネェ、しばらく手廻しでやった、三人一組で、早よやれよゆうて（笑）鉄の材料がないもんぢゃけん、木をけづった。

海地　二人が皮のベルトを引っぱって、一人がけづって。（笑）

広田　ベルトで手をはさまれるが、こわくてネェ。

橋本　大分たって、木材材料から鋳物材料を削らしてもらえるようになって、旋盤でけづる実感が出て来た。

沢本　そういう時がかえってよかったですネェ。今のように

便利になるとかえって人間関係が阻害されますねェ。

田辺　高知工業へ実習に行ったのは、いつちゃったぜのう。

海地　一六年ですか、夏だったですネェ。

矢野　今で言う集団食中毒、佃煮みたようなものが当ったゆうて、途中でやめて帰った。

橋本　高知の天理教の本部の大きな教会で合宿してのう。

田辺　高知工業の同窓会長、橋本さんという人が来て御挨拶があった。羽織袴で真夏の暑いさかりにタマルかと思うたが、今考えると随分礼儀正しい律儀な人だったろうネェ。随分年のいたおんちゃんと思うたが、今の我々年輩かもっと若かったろうネェ。

沢本　あの人はそれは実によく同窓会の世話が出来たねえ、当時の県会議員で権力もあった、高知工業のためにどれだけ尽したかわからんネェ。

海地　あの時はまだ鋳造工場が須工になかったから高知工業で鋳造の実習をやったネエ。

沢本　その時分はまだ高知工業が北与力町だったですか。

矢野　そうです。

沢本　古い話よネエ。

海地　関東製作所（社長寺尾豊氏）へ行ったのは十八年、卒業の年で、修学旅行を兼ねて行ったわけだ。

矢野　戦争も激しくなってくると、後の連中は学徒動員で引っぱられて修学旅行も出来んようになった、我々だけでしょう、あの時分に県外旅行、特に東京へ旅行かたがた行けたのは。

久　どれ位の期間でした。

矢野　夏休中を利用して二週間位でした。関東製作所の社宅二軒位に分宿して機械の実習をやったわけです。寺尾さんが目黒の駅に迎えに来てくれて、東京駅で乗りかえて宮城遙拝に行った事ぢゃった。それから大森の関東製作所へ行った。寺尾さんがあの時、中折帽をかぶって迎えに来てくれたことを覚えちゅう。

田辺　高知工業へ実習に行ったり、関東製作所へ行ったりして、苦労してやったということぢゃのう。

沢本　軍事教練なんかもやったでしょう。

清家　寛氏

清家　やりました、はじめは銃がなくて、木銃ばっかりで、終り頃に戦闘教練をやるようになってよく浜で、匍匐前進をやらされました。

田辺　教官殿が久礼の山本泉先生、配属将校というのがあって福本中尉という人が教えた。

海地　営内宿泊というのがあって朝倉の四十四聯隊へ三日間入隊させられて教練を受けた。我々が入ったのが六車中隊というので隣りの中隊に樗原農林の生徒がやはり営内宿泊で来ていた。

清家　ボクも兵隊に行ったが、実弾を撃ったのは、あの時だけぢゃけのう。

橋本　まこと、実弾射撃というがをやったネエ、あの聯隊の射撃場で……。

海地　秋季連合演習というのがあったネエ。全県下の中学生（現在の高校生）が東軍、西軍に分れて、物部川で一大払暁戦をやった。

橋本　あれはエラかったネエ、何しろ夜通し行軍して暁に物部川で出合うわけで、徹夜の行軍ぢゃったけんネエ。

広田　銃がどうしてもテンビン棒をかついだような恰好になる。ひちをしめて、引きつけて……とどなられる。眠りもって行軍しよるがだから、止れの号令がかかると銃の床尾板をぶちつけるように地面に下す。それでまた教官から雷が落ちる。

矢野　昼食の時、農家の奉仕で芋が出て、背嚢え一ぱいつめこんで帰ったがのう。

久　一番食慾があり、一番食糧がない時代ぢゃったからねえ。

矢野　第二次大戦が入学した年の十二月八日に始まった。その時よう忘れもせんが田村先生がふるい出して、いよいよ戦争が始まった言うてネエ。

橋本　戦争がわれわれの運命を大きく狂わした。工業卒業生が空襲で会社、工場を失ってみんな帰って来た。戦後も食糧事情のために元の都会の工場へ帰ってゆくことが出来ざった。みんな事、志とちがっていろんな道に進んでいった。

矢野　そうよ、戦争がないづつ今の年まで勤めよってん、なんぼわしらあでも矢野技師さんゆうて呼ばれよらよ。戦争で卒業も十二月に繰上げになって、早う現場へ出して生産につかせという方針ぢゃったろぜのう。わしらあの翌年から、もっと繰上げになり五年制が四年卒業になったけんのう。

海地　戦争によって一番運命の狂ったものは、戦死した人達ですねエ、笹岡、谷本、横畠、宮内君らはみんなすばらしい連中でしたが、本当に残念です。生きておれば随分社会で活躍していると思いますが。

〔一同大いに同感の意志表明あり（略）〕

橋本　卒業の年に戦利品の自動車（フォード）が一台学校へ来て、運転の練習をした。

矢野　そうそう、オンボロのフォードでガソリンがないから

一人が校庭を一周するだけということで、新開先生が免許を持っちょって助手席へ乗って教えてくれたわのう。

沢本　思い出に残った先生方はどんな先生方ですか。

海地　それは何と言っても中内校長先生ですねえ。

広田　あの先生には誰っちゃあ、おこられたという記憶がないねえ。

田辺　何しろ話が抜群に面白かったねエ、実におかしい話を真面目くさった顔で話すからよけいにおかしかった。そういう話をたくみに授業の随所にはさんで笑わせながら、いつの間にか時間がくるという教え方で、校長先生の時間は楽しかった。マアきれいな人で端正な美男子でしたねえ。坊ちゃんというあだ名で、ほんとに白面の坊ちゃんという感じでしたねえ、ボクは中内校長という人は、卒業して年がたつにしたがって、その偉さを感じ学校の時には知らなかった。人格の重さというものを知らされたねエ。

初代校長中内先生と生徒（第1種1期生）たち

橋本　おやじのような、こわさと、親しみとを感じる人ぢゃったねエ。

田辺　校長さんがなくなった時は、ほんとにおやじを失なったような、希望が一つ消えたというショックを受けたのう。

（全員同感、中内校長をしのぶ）

矢野　やっぱり我々は、校長、ダンゴさん、大田先生に一番世話になり、一番思い出に残っちょらねエ。

（一同、同感）

海地　特に誰ということはないが、自分らが習うた先生は、それぞれ思い出深いものがあるねエ。

（一同、同感）

田辺　あの時分は異色の人材が須崎工業へ集まっちょっ

たぜよ。東元善次郎先生、依岡一郎さん、新階先生、物理の橋本先生、みな時流に流されない一つの信条を持った一流人ぜよ。その他にもそういう先生が中内校長を筆頭にズラッと揃うちょったけんねえ。

久　就職の方はどうでした。

矢野　就職は引っぱり凧で、県内は久礼の万年さんが、県造船へ一人だけで、外は全部県外の、主に航空機関係の工場へ就職したねエ。成績の良かった武村君(現・清家君)島崎君、海地君達は三菱関係の会社へ、ボクらあ成績の悪いがは川西航空機へ行ってくれ言うて、夜行で行って面接して夜行で帰って来た。ところが、はや先生が、お目出とう、電報が来ちゅう、合格ぢゃ言うて先に言うたけんのう。とにかく一日も早う技術者を職場へ送れという国の要望が強かったろうねえ。三学期を繰上げて二学期の終りの十二月二十五日に卒業式をやったけんのう。

沢本　ろくに勉強出来なかっても、素質が良いから、あなた方の……(笑)

矢野　勉強ち、土方やったり瓦をふせたり、あんなことばっかりよネエ。まあ、それはどこでも一緒でしたねえ、一緒に入る時何百人も入社して、存外おれよりリコウそうながばっかりぢゃよ思うけんど、存外一緒に机を一つにしてみると、何ちゃあ知りやせん。まあそこえ自分の仕事をあてがわれてから、しぼられらあねエ、学校でやることは基礎ぢゃけねエ、そんなことが本え書いちゃあるというばあなことよ。

清家　私が学校で習うたことで役立っていると思うことは計算尺の使い方ですネ、今でも私は学校で使った計算尺をもっていてそれを利用しています。

沢本　製図なんか、ろくにやれなかったでしょう。

海地　いや案外やったですよ。この本館の二階が製図室で、今のように、この前に何も建っていなかったので、窓をあけると高陵病院がよく見える。顔ははっきり分らんが白衣がちらちらする。製図を書くより、そちらの方へサインを送るのに忙しい人もいたようですよ。(笑)

清家　校風樹立ということをよく言われました。

橋本　その具体的なものとして校訓というものが出来て、毎朝暗唱させられたなあ。

海地　勤労を尊び明智の学徒たるべしというのがあって、大田先生が勤労はどこの学校にも負けないが、明智となると果してお前らあよその学校に負けない自信が持てるのかと言われたことを思い出すねエ。

広田　そりゃあ、たしかに勤労は全国どこの学校にも負けんばあやったのう。

矢野　毎日、毎日、校庭の埋立作業、それに建築材料を運ん

だり、瓦をふせるのを手伝ったり、食糧増産の勤労奉仕で稲かり麦かり、農家の草かり、桑畠の根を抜いて麦畠にする作業など、その上に軍事教練ときて、三年間、あんまり勉強する時間はなかったのう。

清家　僅か短い三年間だったけどネ、学校の建設、機械工場の建設と師弟が一緒になって早く建設しよう、早くいい学校にしようという気持で結ばれていて先生と生徒の連りが非常に楽しみが深いように思いますネエ。

沢本　基礎工事から埋立まで全部生徒がやったという学校は、全国でも例がないろうネエ、そこにこの学校の特質があるネエ。

清家　新しい校舎が多の郷へ出来ると、やはり新しい校風が出来てくるでしょうネ

久　それは創っていかにゃいきませんネ。

矢野　立派な学校になって生徒もひとりでに一新すらあよ。

沢本　教育は物だけではない。教育はやはり人間ですネ。学校全体が一つの方針に心を合すことが大切ですね。

広田　ボクらの時は設備が悪いけんという弁解が出来たけんど、あれ位設備が出来ると（笑）設備が悪いからとは言えんのう。（笑）

沢本　逆にあまり設備が出来るとかえって人間関係が阻害されるという気がしますねエ、その時分は何とかして物を造ろうという皆さんの気持が一致して、教員も生徒も社会の人も協力してくれて、そこに人間的に非常な協力体制とか、心のつながりとか、人間関係が育って行ったからネエ。今のように冷房も出来、暖房も出来、ワーッとモーターで上ってゆける、特にボタン一つ押せば何でも自分の思うことがかなうようになれば人間関係というものを育てるのにかえって苦労がいくでしょうネエ。

田辺　ボクらの時は校舎もない、生徒数も少ない、第一学校に伝統というものがない。何となく同じ生徒でも高知の学校へ行っている生徒にひけ目を感じる、肩身のせまい思いというものを持っていた。それだけに早く学校が完成したいものだ、早くいい学校にしたいという願いがあった。それがやっと開校三十年にして念願がかなうというようになったわけで、こんなに嬉しい、目出度いことはないと思います。これを契機に益々同窓が連りを強化して母校の発展に少しでも役立ちたいと思います。では話しはつきませんがこの辺で打切り度いと思います。

どうも長時間ごくろうさまでした。

創立後の数年間

教諭　田村隆徳

一、間借り生活と勤労奉仕の話

開校早々は無論校舎も無いままに、須崎小学校（当時国民学校）の二教室とそれに続く理科の準備室を借り、授業に使用した。私が奉職した時、北の理科の準備室を改造した急造の職員室に、常時席をかまえておられたのは、中内校長先生、太田幸吉先生、森岡千足先生のお三方のみ。他の先生方はすべて小学校、高等小学校からの応援で授業をまかなっておった。この森岡千足先生こそ、須工最初の物故者となられた方である。先生は、もの静かでまじめな君子人で、責任感の強い方であったが、もともと蒲柳の質で、生徒の指導や、打ち続く勤労奉仕に心身をすり減らされ、いくばくもなく結核を病む身となられた。或る時、健康診断に私と共にひっかかり、高知の保健所だったかで精密検診を受け、私は無事パスしたが、先生は血沈が一時間に三十近くで、大変気にしておられたことを憶えておる。間もなく休職、ご郷里の佐喜浜で療養中に、まだ前途春秋に富む身でとうとう亡くなられた。去る者は日々にうとしで、忘れ去ることは故人に対しまことに申し訳ないと思い、同窓会誌創刊号にも特に先生のことに言及したことがあるが、このたび改めてお名前を挙げ、草創時代の御苦労にむくい、且又教えを受けた方々の思い出のよすがにもしたいと思う。

扨、この間借り生活は二年続いた。一年目は一種一期生五十名、二種一期生四十名が共に小学校で学び、二年目には一種一、二期生が小学校、二種一、二期生はすでに出来ていた機械工場に入り、職員室も小学校と機械工場に別れた。勉学の合い間には勤労奉仕に精を出した。初年度には主として土方作業であったのが、二年目には建築作業にも手を貸すようになった。それは、彼等が卒業後述懐したように、勉学と勤労奉仕と相半ばする程のものであった。やがて教室が順次出来るに従い、学校造成のための勤労奉仕はなくなり、これにかわって校外での勤労奉仕、勤労動員が行われることになったのである。

一、実習工場設備の件

学校創立時の苦心は、それにたづさわる者の誰しも経験するところであると思うが、須工創立当時は、丁度大東亜戦争のはじまる前後であり、軍需物資最優先の時であったので、実習工場は出来ても、中に入れる機械器具の入手については、校長中内先生の非常に苦心されたことの一つである。その詳細については思い出せないが、時々『機械が思うようにはいらんので困る』とこぼしておられたのを憶えておる。校

長命で、寄宿舎建設の資料集めに出張した途次、愛知県のワシノ精機に立ち寄り、万能研削盤の納入督促をしたところ、さんざん待たされたあげく、民需は後回しという訳で、要領を得ぬまま追返され、坊の使いを演じたこともあった。結局この機械は納入されず、特別に作られた基礎も無駄となった。これは苦労の一例であるが、幸い先生の同窓の橋田正治さんが東京で機械商を営んでおられ、同氏の並々ならぬ御協力があって、結果的には、当時としてはまづ上等と云えるのではないかと思われる設備が出来上った。機械科の先達は無論校長中内先生であったが、御多忙だったので、われわれに、ああせよ、こうせよと大まかなことを指示され、後はまかせるとゆう風であった。後から考えると、任された当方が未熟のために、先生の意図するところが充分に達せられず、先生としては相当歯がゆい面があったのではないかとも思う。

さて、実習実験用機械器具購入に使われた金額は約十一万円であった。ベルト掛四呎旋盤で一台約千二、三百円、最も高価だった三十トンのアムスラー万能材料試験機がたしか七、八千円位いであったと記憶する。これ等の記録は昭和二十七年に出来た産振設備台帳に転載され、もとの手持の帳面は其後どうなったか記憶にない。

当時県下で比類的珍しかったのは歯切機械で、須工の他には鈴江農機と他一、二社にあったらしいが、高知工業でも歯車はすべて万能フライス盤で切っていた頃だったので、一寸得意であった。又、入交好敏氏より寄贈を受けたタレット旋盤も当時の高知としては珍しい方であったと思う。

ベルト掛旋盤は今はなく、アムスラー万能材料試験機も影を消し、僅かに残った歯切盤も平削機も、学校移転を機に廃棄処分となる運命にある。恐らく学校移転後は、創立当時を思い起す何物も残らないであろう。何か一つや二つ、教材として古いものを残しても満更無意味ではないと思うが、これは私の郷愁であろうか。

話が前後するが、これ等当時の高知県に於ける新鋭機器の据え付けの中核となったのは、最初の実習指導員西原健夫先生と、一期生の諸君であった。一期生の諸君は結局、整地作業と建築作業の他に、機械の据付作業にも習熟したことになるのである。

なお、これ等の工作機械は、戦争末期に、県の命令で加茂村に強制疎開させられたらしく、私が復員したとき、旋盤類は加茂の製材所の中に雨露をしのぎ、平削盤等大型機械は加茂駅倉庫の横で雨ざらしになっておるのを見た。疎開を担当せられた先生方は随分とお骨折りのことだったと思う。

一、校章、校旗、校歌制定のいきさつ

校章は開校当初より決っていた。図案は中内先生が高知工

業の森光喜先生に委嘱せられたもので、現在のものと違うのは、中央の『高』の字が当時は『工』であった。図案の意味するものは、錨は港すなわち須崎を表わし、工は工業、両翼は大鵬の羽ばたきを表わす。つまり須崎工業はおおとりの如く飛躍するとの意であると中内先生より聞いた。

後年、新制工高となってから職員会で『高校となったのだから』というのが主な理由で工が高に変えられた。変更の時期は、この職員会が、講堂を仕切った一室で行われたことを記憶しておるので、昭和二三年七月の火災以後であることは確かであるが、正確な年月については憶えていない。

校旗は、当時東京に在住せられた中内先生の同窓の方々が、須工創立を祝して、相当の費用をかけて作って下さったもので、出来た時期については、これも正確な記憶がないが、多分開校後暫らくたってからのことであると思う。

次に校歌の件であるが、学校沿革史によれば、昭和二十三年五月制定となっておるが、このいきさつを簡単に述べる。相当永い間校歌なしで過して来た須工にも、もうええ加減で校歌を作ってはという機運が熟し、生れ出たのが大崎二郎君作るところの須崎工業校歌原案である。同君は一種一期卒業生であり、二二年九月から二三年三月まで、須工助手として勤務していたが、当時詩人として活躍しだした頃であったようで、私も多くの作品を見せて貰ったことがある。その大崎君がものした校歌の歌詞の調子は、自由奔放で躍るが如く、必ずしも韻律にとらわれていない風があった。これが土井晩翠先生に送られて書き改められ、更に平井保喜先生によって作曲されて、校歌として体裁が整ったのが二三年五月ということであろう。敢て大崎君の名をあげ、かくれた功をたたえる所以である。

一、スパルタ式実習

昭和一八年機械工場の設備もほぼ整った頃の話である。

授業開始のベルが鳴る。実習に当った生徒達はかけ足で機械工場の前に集合する。点呼が終る。時あたかも厳冬、吐く息は白い。おまけに曇った空からは白いものがチラホラ。忽ちさかんに降り出す雪。この時教官の口よりとび出す号令『実習体操始めッ』生徒は散開、上半身裸。天を衝く拳、どよもす声。ヨイショッ、ヨイショッ、ヨイショッ、ヨイショッ。十分、二十分。寒さにちぢかんだ体が内からのぬくもりでポカポカしだすまでこれは続く。終ればかけ足で工場中央に整列、安全頌と皇国民の信念を大声で唱和、それから持場にうつる。与えられるのは片手ハンマと刃のないタガネ。手仕上げのタガネ集団練習の開始である。『用意』の声で脚を開きハンマを思い切り後方に振り上げる。『ピッ』笛の音一声、ハンマは勢いよく振りおろされ、やがて静かにタガネに衝突する。一回よりも二回、二回よりも三回と衝突の速度は

速くなり、衝撃音は高くなる。『ピッ』『ヂャン』『ピッ』『ヂャン』……だが、馳れないうちはハンマはタガネを打たず手を打つ。『ヂャン』の音のかわりに『ウッ』のうめき声が出る。忽ち皮はやぶれて血がにじむ。痛さに堪えかねてウエスでも手に巻こうものなら『コラッ、はづせ』と教官に叱られる。『エイッ』と気合いを入れ、『ピッ』『ヂャン』『ピッ』『ウッ』

これが当時の実習の一駒である。

彼等はかくの如く鍛われたために、就職後も、古くからある伝統ある工業学校の卒業生に伍して、一歩もひけをとらなかったということである。

一、魚つり大会の話

創草期の年中行事の一つに、校長中内先生の発議で始まった新荘川のゴリ釣り大会があった。二、三年でやまったように思うが、これは今でも時々思い出す。

この日は校長以下職員生徒全員が、思い思いのつり竿を手に持って、新荘川下流に集り、川口から新荘橋上流にかけてゴリの数釣り競技が行なわれる。エサは多分ミミズ、ゴリの大きさは七、八糎ぐらい。いたって釣りやすいので、たちまち相当沢山の獲物が集まる。これがゴリ汁に化ける。食糧不足の折、結構な蛋白資源となって全員の胃の腑におさまる。さてはそのあまりが食飲会の材料ともなろうとゆう寸法である。

今思うと、その頃の新荘川はすばらしくきれいで、魚も多く、弁当持ちでの半日の清遊は、つり好きもそうでない者も、日頃のスパルタ教育や奉仕作業の苦労も忘れて、師弟一体の、まことに心やすらぐたのしいものであった。

一、専修科生の話

今でも倉庫の中に専修科生と表紙に書かれた学籍簿が一冊ある。これは一種二期生中の十四名のもので、何故このクラスだけが専修科生となったかについては、今は知る人も少ないと思われるので誌しておく。

昭和二一年三月彼等は須崎工業学校一種二期生として卒業する予定であり、卒業と同時にその殆んどは失業生となる筈であった。彼等は在学中、学校作りの勤労奉仕に続く農村への勤労奉仕、工場への勤労動員等で落ちついて勉学する時間が少なかった。これをそのまま失業者の渦巻く世間へ送り出すのは、まことに情に於てしのび難い。よって希望者があれば後一年学校に残し、ゆっくり勉強して貰い、そのうちに適当な職が見つかれば、その時出て行って貰えば良いではないか、ということになった。そこで希望者を募ったところ、前記の人数が居残り、国、数、英、物象、実習の授業を受けることになり、これが一年続いたという次第である。これは県の正式認可によるものではなく、須工独自のものであったの

で授業料は不要であった。名づけて専修科生という。万一前記学籍簿が失なわれたら、これを証明する何物もなくなるだろう。

一、玉屋文庫

学校が出来て間もない頃、実習工場を視察せられた恰幅の良い紳士がいた。後から聞けば玉屋壹章氏で、この時千円寄付せられたという。これを図書購入費にあてようとゆうことで出来たのが玉屋文庫で、普通科と機械科に金を折半して図書を購入した。

その後廃棄処分等で現在は殆んどなくなっていると思うが、相当長い間、玉屋文庫の判をおした書物のお世話になったものである。

一、初期の就職

一期生の軍需工場割当て就職は論外として、敗戦後の食糧難、住宅難、就職難をおして県外就職運動を開始したのは、昭和二四、五年頃のことであった。当時県外からの求人申込は極めて稀で、就職の開拓は殆んどゼロからの出発に等しかった。困難に満ちていた。これは一種の戦いであった。担当者の心をこの戦いに駆り立てたものに当時の学校の事情があった。当時学校は衰微して振わなかった。入学志願者も減った。おしまいには学校の存立さえ危ぶまれるような話も出る始末であった。この窮状打開については各人各様の考えがあり、それぞれの立場で努力が重ねられていたが、その中で、就職状況を良くすることこそ、困難でも、回り道のようでも、結局これが学校の存在意義を明らかにし、窮状打開の近道となり、又これは工業学校本来の道でもある、これに力を傾注してはどうかという高知工業校長森岡先生の個人的なアドヴァイスがあった。そのとおりだと思って大いに努力した。その後も森岡先生はこちらの相談に応じて何くれとなく指導してくれたし、二七年須工に赴任後も率先して開拓に努力された。又阪神、東京方面で活躍しておられる県出身の方々の御援助、御鞭撻も頂いた。その後工業界の復活と発展にともない、就職も少しづつ楽になっていった。かくして開拓開始以来約十年、一応の地盤は出来た。が、其の間、担当者の一人であった自分の到達し得たものは、就職状況を良くするのは結局は卒業生の就職先に於ける働きぶり、実績である、これ以外の何ものでもないという極めてありふれた結論であった。又求人と求職の立場が逆になり、卒業生が引張り凧となっていくにしたがい、昔の生徒に悪いことをしたような気持が深まるばかりである。

一、むすび

須工誕生の時に、初代校長中内先生を頼って教員生活をはじめて以来三〇年余、新設校要員として南国市、宿毛市に転勤した七ケ年を除いて、その大半を須工と共に過して来た自

分として、思い出は尽きることがない。だが、心身共に尾羽打ち枯した状態の現在、いにしへを語ることは何としても心が重い。然し、それでは責をふさぐことが出来ないので、重い心に鞭打ち、草創時代の事どもを少し、なるべくありのままに、客観的にという心組みで書き綴ってみた。此の機会に、須工育成の為に随分御尽力頂き乍ら、物言わぬ故人となられた方々のことに言及すべきだとは思うものの、筆至らず申し訳なく思う。又何かの機会に語ることが出来れば幸いである。

須工創立と初代校長 中内知章先生

元PTA会長　中　田　稔

『悲願』　親の願の内、吾が子の教育は、今も昔も変りない望であり、願でもある。戦前小・中・高、六・五・三時代中学に進学する数は極めて少なかった。県内で高知市には一中、市商、工業、農林など随分古くから開校されて居たが、以外では中村に中学、安芸に中学と女学校があった。須崎には中学校はない。進学しようとすれば、鉄道は開通していない為、外宿しなければならない。高知へ外宿して通学さすだけ経済面で許される家は全般的に収入の途が少い時代故、非常に少く旧須崎町で毎年五、六人、多くても七、八人内外だった。須崎に『中学がほしい』それは長い間の悲願であった。

当時県の貧弱な財源では、中学校新設は容易でない。昭和の初期高岡郡中に一女学校新設が県議会で通過、その候補地に佐川と須崎が上った。地理的にも人口分布などよりしても、須崎が条件が勝れているように思われたのは吾々の自負心かも知れない。佐川には同地出身、東京に維新の元勲、元宮内大臣伯爵田中光顕翁あり、政治には直接関与しなかったが、大きな力だったと思われるし、当時県議会随一の闘将で重鎮でもあった森淳太郎氏が居た。須崎には当時一人の県議も出ていない。結局佐川に決った。政治力の敗退だと当時いわれた。かくて悲運の涙をのんだ。

『寺尾豊先生の篤志』須崎出身で東京で関東正機製作所を経営成功した、寺尾豊先生が母校高知工業を創立した恩師竹内綱、同明太郎両先生の遺志にならい、郷里須崎へ工業学校を新設したいその費用を奇附するとの申入れがあり、県としても女学校でかつて苦い思をさした須崎だので、之を受入れた。

『悲願達成』　かくて長い間の悲願は寺尾先生の愛郷と今後我が国の進むべき途「工業立国」この戦士養成という遠大

な理想の下に、待ちに待った中等学校、然も技術者養成の工業学校だから町民の喜びはたとえようのない程だった。

『須工開校』　機械科だけで発足、初代校長として高知工業より美男にして人格識見抜群の中内知章先生を迎へ、須工は誕生した。時に昭和一六年四月であった。この年十二月八日大東亜戦争勃発、国運をとしての戦故、学徒として勉学のみに精進は許されず、勤労奉仕に随分動員された。敗色濃い昭和一八年一二月二種一期生三八名が初めて社会に送り出された。

『感謝の勤労奉仕』　敗地は糺町の現在地だが、ここは桑と野菜畠、それに公文儀太郎氏経営須崎牧場があり、北は湿田だった。敗地造成は桑の木を抜き、その地の土で湿田を埋めたり、整理する作業で、今日の機械力を以てすれば僅の期間で出来るが、当時としては鍬やスコップで、土をバイリョウやモッコで運ぶのだから、随分手間だった。然し悲願達成の喜びに湧く町民の、感謝は一丸となって、各町が順次割当てで奉仕した。奉仕日数は当時、例のない程多かった。かくて敗地は出来た。

『中内先生退職』　昭和二〇年八月一五日終戦。見るからに温厚にして気品風格だけでなく余りにも豊かな才能、然も「ボッチャン」の愛称で親しまれた名校長中内先生は、戦時下の教育理念と敗戦後のそれとの相違に、遂に職にとどまることを潔しとせず、戦後数ケ月を経ずして退職された。退職後しばらく浪人生活をされたようであるが、入交太蔵氏の要請により、東洋電化設立のための技術部門の責任者として、夜もろくに眠らない程の努力を傾注された由であるが、重なる御苦労がたたってか、間もなく五十をいくばくも出ない若さで他界された。先生は、県内工業教育の第一人者として、長くこの道にお留まり願うべき方だったが、まことに惜しい極みであります。

校章図案作成の思い出

元高知工業高校教諭　森　光　喜

今から三〇余年の昔、私は高知工業学校に勤め風雲ようやくあわただしい社会情勢下、工業技術の開発刷新等に心を配る同僚と共に青少年達の教育にたづさわる毎日を生き甲斐に思っていました。その頃須崎に工業学校が創設せられるとのめざましい大ニュースは私共に取って何ともさわやかな快い極みでした。

寺尾豊先生とは私が須崎の白石君と呼んでお互いまだ小学校三年生の頃から親しく存じあげていた仲であり、この時巨額の私財を提供せられ須崎工業学校創立の口火を切られたこ

とを承り満腔の敬意と限りない感激を覚えたことでした。

そんな矢先き、こんな心境で居た私に校章図案作成のご依頼があり、不肖を顧みずお引受け致しました。純真闊達、ひたむきに工業技術者をめざして進む好もしい少年達を対象としてその真正面に光りかがやくべき校章の考案は誠に晴れがましい限りの仕事でした。

当初私は今まで他に類形のない変った形状の図案を用意しましたが、周囲の人々から高知工業と兄弟校の須崎工業であるので校章もどこか似通った感じのものが望ましいとのご希望やご助言に副って結局現在通りの形に落付いたわけでございます。尤も戦後高等学校になって中心部の文字に変更もあり、又女子生徒用の徽章にもなっているかと思われます。

図案の要点としては高知工業の古典的な意匠に比べてこちらはグッと近代的明快な様式にして清楚端麗な表現を意図して計画を進め仕事は淀みなく五日間で実にスラスラと順調に終了し帽章としての現寸図、拡大図、写真による縮小図など一連の作図を提出させて頂いたことは記憶していますが、その季節が思い出せないのは戦時戦後のあまりにも異常多端の年月をへだてたためでしょうか。

自分の考案設計による品物に他日めぐり会った場合は、自分とそっくり醜悪さもそのままの人間に突然行き当ったようで頭からゾーッと寒けを覚え、およそいやなものですが、この校章に対してはそんな思いを全くしたことがありません。といっても決して図案が優れているわけでなく、三十年前私が図案の仕事を進める時対象とした純真で逞しく工業技術の研鑽に邁進し巣立って行った今や三千人に余る先輩の伝統を踏まえて精進する健やかな須崎工業高校生徒のシンボルとして浄められ、もはや私風情の画いた小さなデザインではありません。

校章考案の後も校旗の制定、国旗掲揚台の建設等々、初代校長中内知章先生とは頻繁に会合懇談を重ね、いささかでもお役に立つことが出来たことを今日でも冥加に存じて居ります。

三〇年といえば生れたての赤ん坊が数人の子の親になる程の長い歳月であり、しかも忍苦に明け暮れた戦時戦後を含む三〇年の貴い歴史の上に今力づよくそびえ立つ須崎工業高等学校の栄光に対し、私は心をこめた欲呼と拍手を捧げるものでございます。

四六・八・一五

（高知県美術展工芸の部審査員）

血判

旧職員　大田幸吉

須工創立当時のことども書いて欲しいとの依頼で、早速ペンをとりましたものの、大分古いことではあり、実は大変困惑していたのでしたが、幸にして清家君が、ひょっこり見えられ、懐しい第一回生の卒業生アルバムを見せて頂き、おぼろげな記憶を呼び戻すことが出来ました。

手許に残る私の履歴書を開くと、熊本県から高知県への出向辞令に、昭和十六年五月二十四日付にて、須崎工業学校教諭に補す、八級俸当分、千三百八十円下賜とあります。

俸給も上ご一人から戴いたものと言うことで、月給にしてこの十二分の一が支給されていた。今の若い方達にはびんと来ない話ですが、これがいわゆる戦時体制下の中等教員職の実態であったのです。

所でその頃、戦況は日増しに深刻に、速戦即決など云う日本人好みには捗らず、いやでも長期戦を覚悟せざるを得ない状況となり、しかも、竹槍戦術てう子供だましの兵法では、も早や何ともならぬ所まで切迫していることが、公然の秘密のように囁き交される事態に立ち到ってはいましたが、それでも大本営発表にゆめさら不信を抱くなど以っての外であった。とは云え国民一般にも漸く苦悩の色が見え始じめてはいた。それが米英に対する宣戦布告という大それたことにまで拡大してしまったのですから、それはそれは大変なショックでありました。あの年の十二月八日早朝、臨時ニュースで軍艦マーチを聴きながら、堀川沿いに出勤した時の感激は今も忘れない。けれどもそれがやがて無条件降伏という大悲劇の序曲であったことを誰が知っていたろう。結果論から色々いう人は今日多い。けれども当時そのことに確信を持っていた者は殆んど無かった。それは真実でありました。

多量生産の為の動労と科学教育の振興とが急に叫ばれ始じめ、後の祭ではあったが、実業学校が県下に一度に数校開設を見るに至ったのもその頃で、中でも須工は別して県民の与望を担って開校された学校の一つでありました。然かもその開設が殆んど寺尾先生お一人の出資で実現したという、その詳細は県外から帰ったばかりの私などにはよくわからなかったけれども、その額を今の貨幣価値に換算すればどうなるのか、見当もつきませんが、持てる者ほど出さないという世の中だけに、当時としては特筆太書さるべき美挙であったに違いない。

若い人達は次々に召集されたり、工場に徴用されたりで田圃に若者の姿を見かけないという状況下、卒業式を待たず、早目はやめに求人に来る会社も多かったけれども、今と違っ

て、就職斡旋業務は凡て国家権力の統制下にあり、個人の自由など許さるべくもない厳しいものであったことは云うまでもありませんでした。

校舎にしてからが、現在の須小から借用した三教室と糺に出来たばかりの機械工場のみで、従って、実習の時は、須小から糺までテクテク往復するという状態で、生徒達にとっても随分と不便、為に時間的ロスも多かったけれども職員からも生徒からもただ一言の不平も聴かれませんでした。今日の様にエスケープや代返など云うことのなかった時代、これ凡て勝つまではと全校打って一丸となった姿でありました。その頃私は、機会ある毎に、君達は須工第一回の卒業生になるのだから、それだけの栄誉と責任とを感じて欲しい。どこの学校の歴史を見ても人材は必ずその第一回生の中から輩出している。諸君に期待するものは極めて大きい。など云ってさかんに生徒達に発破を掛けたものですが、それが今日ようやく実を結びつつあるようで愉快でなりません。

当時は、教科の編成にしてからが現在とは様相を異にし、入学資格を小六卒とした五年制（戦時中のみ四年）の一種生と、高小卒を入学資格とする三年制（戦時中のみ二年）の二種生と云う二つのコースがあり、両コース共に機械科のみの単科の県立工業学校であって、生徒達も皆粒揃いの逸材が多かった様に思う。だがこうした発足をした学校の、その運営に果して何も問題は無かったかと云うと、必ずしもそうではなく、戦時下の統制経済のもと、施設設備の一つをとってみても、云わば何もかにも無いものづくしという状態で、実習などには言語に絶する不便があったことと思いますが、その間の事情は田村隆徳先生が一番よくご存じと思われます。金さえあれば、何でも購入出来る今とはまさに正反対で紙幣は紙屑、いくら出しても品物が手に入らなかったのです。実習工場の教官室でバイトの一包を持ち上げて、大田先生これで〇〇円かかりますぜよ、と中内校長から教えられて、普通科の教員一同、目を丸くして驚いたことを今でも想い出します。中内初代校長が若くして逝かれましたのも、当時のご辛労のせいだったかも知れません。

機械科実習工場に急造された、板囲い教室での授業も辛かった。幾台かの旋盤はあっても、広い工場内には未だ相当のスペースがあり、そこに二教室、とは云っても、薄い杉板で囲った空間に、黒板をひっかけただけと云う教室、コンクリートの床は靴の裏にも冷たく、隣にはガンガン、ハンマーの音を工場一杯に反響さすと云う中での授業、生徒も先生もへとへとになりましたが、それでも生徒は静かに授業だけは受けてくれました。あの頃の生徒は今の高校生などとは異った特別の気風を持っていた様に思う。生徒指導にしても現在の先生方が嘗められている様な苦労は全然なかった。結局職員

生徒一同が一心同体となって新しい須工魂を創造してやろうと新鮮な気迫が漲ぎっていたのかも知れません。

ただ、当時一つだけ困ったことがありました。それは、一種生と二種生との対立という微妙な感情に、階級的軍人精神がからまり、教練と学校教育との板挟みになって、その調停に校長先生と職員との間を何回か往復させられた苦い想い出もあります。一種生は云わば本科生で在校年数も二種生よりは長く、先輩後輩の序列は年令に拠るべきか、経験年数に拠るべきか、挙手の敬礼はどちらが先きにすべきか、と云う今から想えば噴飯ものだが、当時はこれが真剣な問題として採りあげられなければなりませんでした。二種生の腕白が、若い一種生の柔道着や竹刀を持ち出して来て教室で叩き売りした話やら、こんな態勢に抗議して一種生が連署血判に及んだ話など、後日談として宴席で聴いたことがあります。けれども、パチンコやシンナーに遊びほうけると云った今の高校生のそれとは、全然異質で明るく且つ豪放磊落、そこに時代の変遷を感じる次第であります。

又その頃から地元の人達も、須工には特に協力的で、私達が生徒と一緒に、糺の校地造成に精出していた当時、街の隣組の人達が輪番で埋立作業に献身してくれ、天理教の信者さん達からは、日の寄進とか云って、驚く程の工程を一日で仕揚げて下さったことなど、今に印象に残っています。抜根機と呼ぶ桑の根を掘り起す機械を使っての作業に汗を流したことなど、私としても一生の想い出であります。それだけに、後日、新築の本館が焼失したと聞いた時は胸が痛みました。無残な焼跡を見て悄然立ちつくし、誰にも逢わず一人中村に帰って行ったこともありました。火事と聞けば、飛び出して行って学校の空を見る校長としての責任感とも違う感情、それは創立の事業に夢を託した職員生徒の連帯に根ざした、何か純粋なものがあったのでしょう。後日私は、校長として某普通高校の校長に任命されました。台風災害の復興にやっとの思いで獲得した予算で出来たばかり設備が心なき生徒の為めに、見る間に破壊されつくした経験があり、あの頃の須工の風格と思い較べられ、今更のように往時が偲ばれます。

（清水高校長を最後に退職、現在高知市神田ひばりが丘にて自適）

戦時下の思い出

旧職員　橋田沢視

同窓の皆様何時もご無沙汰ばかりで申訳ありません。何時の間にかご無沙汰のうちに母校も創立三〇周年を迎えその礎も益々固く校運愈々隆昌の御由、誠にご同慶にたえません。その記念会誌発刊の趣旨を承りまして平素の疎遠を謝し短い

ご縁でその柄にもない私如きが貴会の一員に列なり得たことの感謝をこめて拙い一文をお送りして寄稿のご指名を賜りました責を果したいと存じます。

奉職中の思い出をとのことでございますが、健忘症の私のことで記憶の糸口をも見出し得ない状態で意をつくし得ないことを誠に残念に思います。あの悪夢の様な第二次大戦の苛酷な進展に伴い国家総動員の発令となり聖なる学園にも学徒動員令が吹きまくり、食糧増産に、或は造船、軍需品の製造にと、幼い小学生迄がその本来の勉学を放擲し動員就労させられたのであります。

本校におきましても技術実習の学校工場は施設共々動員せられ、寺尾先生の関東製作所から技術指導員の派遣と当時実習教材にも事欠いでいた状況下では教材の受入は何より好都合で不自由な輸送下にもかかわらず資材の送付を受け師弟の固い団結の内に不足勝乍らも勝たんが為の兵器増産、即実習が行われたのであります。

学校工場動員外の生徒は白石工業、高知県造船、須崎造船、松下電器高知工場等に分れ、夫々国家の要求する労力不足の産業部門に所謂銃後の奉公として学業をなげうって就労奉仕したのであります。私達も交替で各工場へ会社側の生徒に対する給食厚生面や要求せられる労働条件の監督や接渉の目的で派遣されたのであります。

白石工業では通勤の不便もあり宿泊していたので宿舎の一室に黒板を借り臨時の教室にして自分の担任学科を夜学した訳ですが、それが一級（クラス）の全部でないため教科進度の不均衡を恐れました。然しそんな都合の言える時代ではなく、学業を抛棄して国策に協力する彼等の犠牲に報い、その家庭の方達への申訳としても、仮例一部の者でもあれ少しでもこの犠牲を軽減してやりたいとの念願であったように思っております。生徒諸君も昼間の疲れをよく耐え忍んで頑張ってくれました。又造船科発足当初、専門教師の不足していた本校は、機械科の私達が県造船工場の徒弟の方々にその初歩を教え代償として造船技師に造船科授業を助けて貰った所謂交換教授も行われたのですが、それ程当時は総べてが逼迫していたのであります。

戦争の進展と共に状況は日々面白くなく下級生の大野見村疎開も検討せられ学校工場は土佐加茂村へ疎開を計画し、工場の機械類は次々に須崎駅へ運ばれました。輸送困難な当時随分無理を頼んで土佐加茂駅に運び、それから又三町余り東の杉皮葺の粗末な建物に運び込んだ様な一幕もあった訳で、その間トラックもクレーンもないただ素人の職員生徒が荷車とコロを使っての重量機械の運搬の困難は誠に今日の想像に絶するものがあったのであります。又比較的小型な実験機器等は之も疎開の目的で山間の生徒の宅へ保管を依頼したよう

なこともありました。

終戦の年の入学試験の時であったか、私は身体検査場に居たのですが、受験生の裸姿に若しこんな時空襲でもあったら大変だが……と誰かに囁いたことでしたが、その直後警報が鳴りました。それでも始め私達は退避壕をあらかじめ説明してあったので、大した混乱もなく夫々の防空壕に退避して不安な一時を過したことでした。それ程に一生懸命増産に職域奉公に励んできた私達の念願も空しく遂に敗戦となり、ラジオも充分聞けない当時として…その頃私は学校工場にいたのですが…玉音放送があるので隣の天満宮境内に集合せよとのことで「多分最後の全力を振って銃後の奉公に邁進せよ、朕は陣頭に立つ」とのお激励のお言葉だろうと囁きながら集合した私達に玉音は余りにも聞き取り難かったけれど終戦の詔勅と判り、一面では全然予期しないことでもなかったけれど余りのことに茫然として声もなくその後で誰彼となくすすり泣も聞え、私も隣の南先生と手を取り合って泣いたことでした。

遂に進駐軍が今日須崎へ上陸との噂が流れ私達の田舎部落まで大騒ぎとなりました。今日学校は宿直者以外手薄であることを思い出し、同じ村の庶務担当の橋田高治先生と話し合ったところ、地元職員として斯る時こそ行かねばなるまいと家族の心配を振り切って二人は勇躍家を出たのですが、内心私は大仰な形容だが悲想な思をかみしめて居たのであります。今と違い自転車に乗るのがやっとで大間を過ぎる頃から鳥越坂を登る途中には町の人々が田舎の縁故を頼って荷物を持って次から次へ退避して来るのに出合い、これと逆行する私達は一層悲想感を強めた次第でした。それはまるで映画で見るお城下の町人が戦乱や大火を逃れて避難引越する姿の様で、今眼の前に見る同胞の悲しい現実の姿に胸を痛めたことでした。それでもその日は米軍の上陸もなく無事にすみましたが、間もなく進駐軍は学校に寝起する様になりました。然し引き揚げ迄恐れていた不祥事もなくすみましたことは何よりの幸せでした。

考えて見れば当時の在校生の方々には誠に苦難欠乏の時代で、充分な学業も得られず、たまたま卒業就職せられた人々も世相の急変に職を辞せられた人も多く、或は入学当初の目標を変更せざるの已むなき次第となった方も多く、大変お気の毒に思います。でも、昔から『艱難汝を玉にす』とか『禍転じて福となす』とか、この未曽有の苦難時代に何かを掴み得た人々は之にたゆみなき努力で肉付せられた精華を今日実社会に爛漫と咲かせている数多くのニュースをお聞きして、私は心から敬意を表し誠に心強い若者の力強さを痛感しております。こうして原稿を書いていますと忘れ勝な私にも色々と思い出は浮んでつきないのであります。懐しい三〇年の思

い出に満ちた旧校舎に別れを告げ、古い伝統を礎に環境に恵まれた白亜の近代的校舎に、新しい飛躍の希はれる時、沢本校長先生と田辺同窓会長を軸として同窓の皆様は縦と横の連繋を密にせられ、須工本来の使命を再認識せられ、各界での御活躍、御発展をお祈り申上げます。この記念すべき三〇周年に当り古き恩師であり初代校長であった中内先生を初め物故せられた先輩同窓の面影を偲びそのご冥福を心からお祈りしてペンをおきます。

（大阪セメント株式会社）

申し訳なかった一年余

第二代校長　西森威稜穂

曽て勤めたことのある県立須崎工業高校が創立三〇周年になるとは数えてみるとその通りだが年月の過ぎ行く速さには今更乍ら驚きます。

お便りによりますと校運も近年隆昌の一途を辿り、既に移転新築の工事も着々と進んで居られる趣、工業教育振興の為め慶祝至極に存じます。県境に近い山里の一角から遙かにお祝い申し上げます。

私が赴任したのは昭和二〇年一二月末であって、今の生徒諸君は勿論のこと、かなり昔の卒業生諸君も未だ生れてもいない昔のことです。進歩の激しい今日、二六年余の昔の事など語るのは全くナンセンスですが、当時あまりにも申し分けない自分であったのでせめて罪ほろぼしのためにも申し上げざるを得ない点をお宥し願いたいのです。

私は赴任前徳島工業校に勤めて居りまして二〇年七月の空襲に遭って一物も残さず焼き失い、辛じて家族を連れて郷里池川町へ引き上げざるを得なかったのです。やっと発令になっても単身赴任するの外なく、又赴任後も古い自転車で池川町から須崎まで通ったことも数回ありました。斯様な状態で大切な校務もその他の活動も全く不行届が多かったのです。その内に急性肺炎となりまして、当時適当な薬もなく遂には死も覚悟せざるを得ない状意に陥ったのです。斯様な次第で考えた末、在職僅か一年と三ケ月で郷里の新制中学校に転任したのです。短年月の間に病に侵され何一つ尽すことなく須崎工業を去らざるを得なかったことが私の長い教員生活で全く申分けもなく心残りでありますので、紙面を借りて真実を披瀝してお詫び申し上げます。

何かの機会にと常日頃考えて居りましたので、貴重な紙上を拝借しましたことを何卒お許し願います。

今は教職を去って十年余になりますが、郷里池川町の生家で極めて元気で余生を送って居ります。終に臨み須崎工業高

校の一層の御発展を祈ってやみません。

（四六・八・二〇）

思い出

一八年一二月
機械科第二種卒　清家　寛

母校創立三〇周年お目でとうございます。来年は私達母校は思い出の糺町を去って、装も新な別天地多ノ郷和佐田に移転します。

現校長沢本豊先生はこの記念すべきときに当り、母校創立の精神の高揚と、母校発展の基盤とすべく三〇周年記念誌の発行をご提案下さいました。

糺町の母校に育った同窓はぜひ早い機会に、新らしい母校をおたづね下さるようおすすめします。必ずや今昔の感に打れたることでしょう。

昭和二〇年八月、日本は無条件降伏をしました。この日を境にして日本人は一八〇度の大転換を迫られました。私達が過去に於て経験した中でこれ程大きな物心両面に亘る変化はないと思います。

次に私達の脳裡に強く印象づけられているのは、われらが母校、須崎工業に入学してから卒業までの思い出でありましょう。

私は昭和一六年四月開校と同時に入学しました。当時入学した者は私達第二種一期生三八名と第一種一期生四五名でした。

入学はしたものの学校は一面の桑畑と麦畑と田圃であり、漸く整地と埋立てが始まったばかりでした。それで校舎は須崎小学校の教室を借りて約一ケ年間勉強しました。

初代校長中内知章先生は、人情味の厚い、高邁な卓見をもたれた方でした。教頭太田幸吉先生はじめ諸先生方は意慾に燃えた、権威ある立派な方々で校長先生統率の下、一致協力体当りで須工建設に努力されました。私達生徒に対しては、情熱と暖かい心でご指導下さいました。私達生徒も、先生に対し、親しみと畏敬の心を以って接しておりました。

当時は軍国時代であり、消費節約、耐乏生活、勤倹貯蓄、勤労奉仕など、世情も現在とは相当に違っておりました。

このような状況下にありましたので、私達は勉強もしましたが、校地内の桑の根ッコ抜きや、田圃の埋立ての手伝いも毎日のようにやりました。地元の労力奉仕団の方々や、国防婦人会の方々も積極的に手伝って下さいました。

入学した年の一二月大東亜戦争が勃発しました。戦争に突入してからは、軍事教練が一段ときびしくなりました。登校、下校の際はすべてゲートル巻きでした。福本教官が配属され

実戦さながらの軍事教練や、朝倉の四四連隊へも一週間入隊し実弾射撃の練習をしたこともありました。

校舎が最初に出来たのは、入学後一年目位であったと思います。現在の東門入口の機械工場がそれです。他には教室がないので、中を仕切って確か南半分が臨時の教室となり、私達はここで暫く勉強しました。北半分は機械工場ですが、機械も一つ二つと運び込まれました。据付は田村隆徳先生はじめ機械科の先生方のご指導の下に私達の手でやりました。

何分にも戦争中のことでもあり、関係の方々は勿論校長先生はじめ諸先生方のご苦労は大変なものであったと思います。こんなこともありました。旋盤が入り据付も終ったが、モートルが来ない、仕方なく吾々生徒が交代でベルトを引張って動力代りをしました。

やっと本校舎が完成し、そこで勉強出来たのは卒業前僅か一年位であったように思います。ふり返って見れば私達は、満足な勉強はしておりませんが、肉体的にまた精神的に得難いものを得たのではないかと自負しております。

初代中内校長先生は終戦後間もなく、学校を去って実業界に入られ、入交産業の重役として忙しい要務のかたわら新装置の開発を完遂されましたが、須工のことは常に心にかけて下さっていたと聞いております。

過日中内先生の奥様にお目にかかり、創立当時の先生のご苦心の程を伺い、今更のごとく感嘆いたしました。

中内先生が初代校長になられたのは、三八才であったとのことです。先生は非常に責任感の強い、人情に厚い方でありました。開校当時は特に多忙な毎日で、日曜も祭日もなく、完成の一日も早からんことを願って、ご努力されたとのことです。須工と同時に開校した学校が他に三校あり、これに遅れてはならないと、毎夜思いついたことをメモしては案を練られたそうです。先生は或日こう感じられました。『いくら努力しても人力ではどうにもならないことがある』と、それからは毎日乳神社に祈願されていましたが、落成の日は奇しくも一〇〇回目であったとのことです。

落成記念日の中内校長先生の式辞は奥様のお手許に最近まで保管されていたそうですが、昨年（四五年八月）の台風で浸水し已むなく処分されたそうですが、惜しいことをしました。

戦時中中内先生は生徒が予科練に行くことに強く心を痛めておられたそうです。時代の要請とは云へうちの生徒が若い命を散らすのは誠に惜しいと常にもらしていたそうです。

今は亡き中内先生も母校の創立三〇周年記念行事並に移転新築の快挙を聞いて、地下で嘸かし喜んでおられることでしょう。

在校当時特にお世話になりました諸先生方に対する思い出

は次々と浮んで参ります。入学当時から卒業する迄三年間ご担任下さいました太田幸吉先生、今尚母校でご指導下さっております田村隆徳先生、その他数人の先生方の思い出もなつかしく偲ばれてなりません。この際一緒に書きたいと思いますが、紙面の都合上次の機会に譲らせていただきます。

現校長沢本豊先生は本年度を以てご勇退されると承っております。初代中内校長先生によって創立された母校が、歴代校長先生はじめ諸先生方ならびに同窓、父兄のご協力とご努力により大いに発展し、今また沢本校長先生によって母校三〇年の過去を集約し、未来に向って大きく飛躍せんとしています。母校の弥栄を願ってやみません。

最後に校長先生はじめ母校諸先生方のご健康とご多幸をお祈りし、益々のご発展を願って筆をおきます。

（株式会社・清家商会社長）

故郷・母校

一八年一二月
機械科第二種卒　島崎憲一

車窓から錦浦湾が飛込んでくる頃になると、私の胸は少年の様に騒いでくる。この町は私の故郷であり、そして人生の中、最も感受性の強い時期を過した母校のある処でもあるからだ。

卒業して二七年、他に誇示し得る何物もなく、肩書き一つとてなく、世話になった母校に報いる術もない身では、正面切って訪れることも憚られるが、墓参りの途次よく学校横を通る。そして意識せぬまま思い出す過ぎし日の出来事は、苦しいことも時の流れが浄化してくれて、すべて楽しい回想と変る。

本校が産声を挙げたのは、泥沼のような大東亜戦争に突入する八ケ月前だった。開校当時は校舎も無く須崎小学校の一隅に仮住居して、二クラス、教師も含めて親近感があった。

まだ戦争の緊迫感もない折とて、勉学にいそしむ傍では、多くの人々の善意と労力奉仕による校舎が出来つつあった。といっても牧場跡の撤去、土地造成から始めるのだから大変だった。山を削り落として、トロッコで運ぶ、そんな仕事にも生徒は駆り出されたし、屋根の板打ち、瓦運びといくらでも仕事があった。建物が出来上ると今度は工場への機械の搬入、据付。コンクリートを割り、セメントを練って働いた。何事も一から始める苦労もあったが、半面工業学校としての形態を整えていく喜びもあったし、生徒も当り前のことと受取って不平もなかった。

頑張ったのは生徒ばかりではなかった。先生方も同様だった。T先生の如きは休日もよく出勤し工作台を造ったり、試

験室の台を磨き、取付とそれこそ寝食を忘れて努められていたらしい。

須崎に中等学校が出来たのは本校が始めてであった。それ丈に生徒の動向、学校の活動など地元民の関心、注目する処であったが、別にその期待に応えた訳ではないが評判は良かった。淳朴で、礼儀正しいなど、態々賛辞を寄せてくるなどと先生が話していた。教師にとって最も御し易い生徒であったと思う。画一的で個性がないという誹りを受けるかも知れぬが、時代がそういう時代であったのである。

学校もその形を成し、活動も軌道に乗ってくるにつれ、戦局も緊迫の度を深めてきた。その当時の吾々の合言葉は「人生は二〇年」という短い言句だった。事実二〇才迄生きれたらよいと真剣に考えて居た。誰の為に死ぬのでもない、親兄弟の為、愛する国土の為である。そんな気持を端的に表わしたのが、吾々の卒業記念アルバムの第一頁にある桜花の写真であろう。

『今の若い者は』と、とかく批判されているが、彼らとて時代が違って、戦中、戦前派の経験した様な立場に遭遇したら、同様の道を歩んで来たであろうと思う。そして又、物質的に恵まれ、昭和元禄に酔う現代の若者は真に幸せであろうか。勿論戦争は絶対否定すべき罪悪であることは論をまつまでもない。

やがて、この校舎も消え去るであろうと思うと、懐しい思い出も追憶の彼方に追いやられ、一ぺんに年を取る様な気がする。

利害打算のない純真な時代に結ばれた友情は、いつ思い出しても懐しく美しい。それだけでも大切にしまっておきたいものである。

（三田青写眞株式会社）

ほろ苦い思い出

――校外散歩になったストライキ――

二〇年三月
機械科第一種卒　矢野象一

昭和一六年四月一九日、私達機械科第一種（小卒、五年制）五〇名、機械科第二種四〇名（高小卒、三年制）が須崎小学校で寺尾豊先生（元参議院副議長、元郵政大臣）服部高知県知事のご臨席を得て入学式と開校式が盛大に挙行されました。

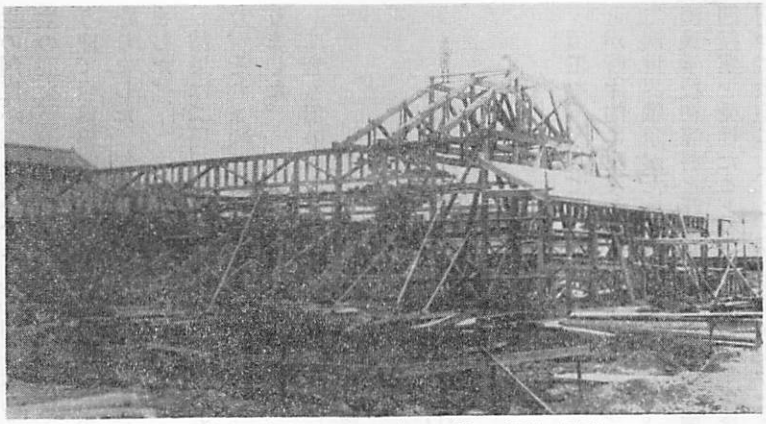
入学時の教室は、須崎小学校の東の端の北側の階下二教室と職員室で、職員室には先生は専任三名位でしたが小学校、高等小学校（現在の須崎高校）の先生が沢山おいでになりました。

教科で今と違っているのは、柔道、剣道は正科でどちらか必ず選択、教練（軍隊教育）を卒業迄やらなければなりません。授業内容はどんなだったか忘れました。

一年の年の一二月八日、米英両国に宣戦が布告されましたが、某先生が廊下で『バンザーイ！』と大声で踊っているのをみて私達もみんなが万歳、万歳と叫んだ様に憶えています。

遠足は文字どおり遠い足で、全部徒歩で浦ノ内、野見、大谷、串之浦と苦しい遠足で、今の生徒や先生では落伍者続出ではないでしょうか。大谷の楠（天然記念物）の大きいのと、黒岩書店のおぢさんが全員にくれたバナナ（一人二つ位）の味が印象に残っています。バナナは今は珍しいものではありませんが、その時分には食べたことのないものが大半でした。二年の時の遠足は横倉山に一泊（越知）で登ったことでした。

現在の学校の校地は、中心部が乳牛の牧場で南側が桑畑、北側が田でした。整地は桑畑の方から始め機械工場が一番先に出来ました。私達は授業をさいて先生の指導の下に毎日の様に整地作業をしました。抜根機（小さいチェンブロック）で桑の株を抜き、北側の山を削り取って運動場を作りました。その間須崎町、多ノ郷村の奉仕隊が毎日のように来て作業をしてくれました。現在ではとても出来ないことです。中でも天理教の信者の方がそろいのハッピで五〇人位の方が数日間ひのきしん（奉仕）をせられたその統制ある作業が特に強く印象に残っています。



講堂の建築（昭和17年）
（創立当時の建物で今残っているのはこの講堂と左手に見える機械工場だけである。この建築にも生徒達は汗を流した。）

昭和一八年五月二五日、校舎が全部完成し落成式が盛大に行われました。私達には全員紅白の餅（本物、パンではない）がくばられました。

昭和一九年春戦局も激しさを加え、機械工場も軍需品の製造にはげむことになりました。そうして一種一

期は四年で卒業することになり（全国の中等学校が一年繰り上げ卒業）ました。

当時学校では一種と二種の間に軍隊のような階級制度を設けていましたが、これが原因となって両者間に対立が生じました。我々、一種一期生は学校を別にして（校舎を別に建てるという意味ではない）一種、二種の区別を無くして欲しいと学校側に頼みましたが、学校側は職員会を重ねた結果だめ、私達は全員（一名不参加）退学願を学校に出し、糺神社に集りました。あわてた学校側は説得に先生方がみえたが誰も応じず。翌日も起洋館に、冨士ケ浜にと転々としました。その翌日は須崎署に全員呼ばれ署長の説教を受け学校に帰されました。

私達はストライキという言葉さえも知らなかったのですが、警察は思想的なものと思ってその取調べが強くありました。原因は単純なもので、当時一種の一期生の中には高等科一年（現在の中一の年令）修了生が大分いたし二種の二期には同じように一種一期を受験し失敗して、一年たって二種の二期に入って来た者がだいぶんいましたが一種一期の生徒はその後から入学してきた同じ年令の二種の二期に対し上級生として敬礼をしなくてはならなかった。これを心よしとしない生徒の感情がだんだん積み重なり、結局下級生も一種と二種が対立したわけです。それを配属将校が軍隊では幹部候補生の制度があるので、それと同じであるといって上級生下級生の別を堅持したわけです。学校では『無断校外散歩』という廉で全員停学二日の処分、ストの時の主謀者は無期停学になりました。無期停学になった者は毎日反省日誌を書かされました。

結果は二種三年と一種四年は同等となり敬礼が挨拶となり、それまで一部で行なわれていた、所謂鉄拳制裁もなくなりました。

二昔も前のほろ苦くまた擽ったい思い出です。

（高知工業高校教諭）

須工当時の思い出

一八・一二
機械 第二種卒 山田弘市

須工を卒業して早二七年、今、目をつむると在学当時のことが断片的に次々と頭の中で浮んでは消えてゆく。当時は第二次世界戦争がたけなわな頃であった。須崎小学校（当時は国民学校初等科と呼ばれていた）の片隅に二教室を借り一年間授業を受けたこと、二年目の約半年は工作機械室を板で仕切って教室にし、ここで授業を受けたこと、その間授業を受けながら又は夏休み、春休み等、特別招集を受けたりして校

舎敷地の埋立て作業や建築中の校舎の壁板や屋根板打ちなどを行ったこと、工作機械類の据付け作業を行ったこと、実地に色々なことを体験し汗を流して働いたが不思議にいやだと思うことはなかったように記憶している。

また学校の近所に豚小屋があり風の向きによって授業中の教室に豚の匂いがして来たこと、玄関の二階に製図室があり、道と堀川をはさんで向側に昭和病院があり、製図にあいて来ると先生のいない間に窓から白いカーテンを振り廻すと昭和病院の窓から看護婦さんがこれを見付けてハンカチを振ってくれ、皆んなで大喜びをしたこともあった。

また校外での思い出としては、一六年夏、母校の実習工場が完成していなかったので高知城下の天理教会に合宿し、一週間高知工業学校で実習を行ったこと、一八年の夏休み、戦争が激しくなったため終学旅行などとうてい行けない時勢であったが、寺尾豊先生の経営する東京の爆弾製造工場に勤労奉仕と言うことで実習に行き(二週間くらいであったと思う)自由行動の時間を大いに利用し、初めての東京を皇居、明治神宮、靖国神社、四十七士のせんがく寺、浅草等と歩き回ったこと。この旅行中西瓜が無性に食いたく、家に帰り着いて早速母親にねだったが、もうその時期(八月一〇日頃)には西瓜がなかってがっかりしたことが、いやにはっきりと思い出される。朝倉の連隊に五日間入隊し鍛えられたこと、夜、床の上に直接置いたマットの上で(ベッドは鉄製であったので戦争中の金属不足で供出されてなくなっていた)毛布にくるまって寝ていると隣の部屋で新兵が気合いを入れられる竹刀の音と古兵のどなり声を聞き驚いて小さくなったものだった。一八年秋季学徒連合演習に参加し一宮—山田間を深夜から朝まで夜行軍させられ歩きながら居眠りをしたのは後にも先にもこの時だけであった。

当時の先生、教官は我々に常に同行され、また作業にも我々と同じように参加され大変など苦労であったことと思う。後から後から思い出は続くが、当時の生徒であった我々は純情素朴であり常に笑いがあったと思う。勉強ふ今の生徒のようにやかましく言われることもなく適当に学び、よく遊び、落第点を取って「おどり」さえしなければよいと悠揚迫まらざる心境であった(これは私だけかもしれない)。しかし楽しかった。戦争中で良い時代ではなかったが、私の今までの人生で一番楽しかった時期であったと思う。在学中の後輩諸君に学校時代を心おきなく楽しみなさいと声を大にして申したい。

(四六・八・二五、関西電力株式会社)

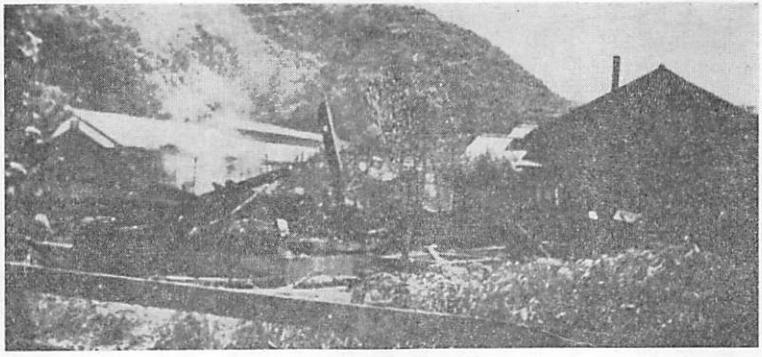
思い出のもろもろ

二昔半前の思い出

旧職員　池上健男

創立三〇周年、人生正に飛躍の年令。これを機として海抜四〇米、北に名山桑田山を仰ぎ、南に錦浦湾を見おろす、眺望絶佳の高台への発展的新築移転。この二重の喜びは永年に亘る学校を中心とした関係各方面の方々のご努力の賜であります。こうした七〇年代へ大きく雄飛しようとする姿は想像するだけても楽しいものであります。特に昭和二三年七月の大火当時、校長出張中の留守責任者であった私にとっては、この須工躍進の姿を見て、人一倍の喜びと同時に、今まで澱のように心の底に淀んでいたいやな思い出がうすらぎ、ホッとしたような安らぎをおぼえます。昭和二一年から四年間の在職中には数々の楽しい思い出がありますが、この大火だけが唯一の忘れることの出来ない痛恨事であります。

全く悪夢のような出来事でありました。夏休に入って間もない、カンカン照りの、昼下り伊野の自宅でうとうとしているところへ、伊野警察署から使いの人が来て『今学校が火事だという連絡がありました。校舎が全部燃えているそうです』といわれた時には、どこかの間違いではないかと信じられませんでした。火事の季節でもない真夏の、しかもこんな時間に、どうしてそんなことがあるものか。千頭先生の監督で卓球部が合宿しているし、中沢先生御一家もおられることだし、どう考えても分かりませんでした。最悪の場合でも全焼などとはとても考えられませんでした。やっとかけつけた時には焼け残った講堂で、先生方が集まって芒然としていました。まさかと思った本館、第二校舎全焼という惨状を目の前に見て途方にくれました。高陵病院の患者さんなどの話では、本館校



灰　　燼

昭和23年7月23日本館　第2棟校舎など630坪焼失。
（翌7月24日校庭西南隅より撮影）

舎が殆んど一斉に火をふいたということで、消火も手のつけようがなかったようであります。

卓球部が茶をわかすためヒーターを使ったとのことでしたが、終戦当時、海軍が校舎を宿舎とし、天井裏などの配線を変えていたのが漏電の原因ということになりました。創立者である寺尾豊先生が林譲治先生と焼跡を見に来られた時は、まともにお顔をようみませんでした。聖書を片時も手ばなしたことなく、温厚で物静かだった方だけに、今はなき小林校長の胸の中は察するに余りがあります。

後年自分がその立場になって、申訳なさが一層身にしみました。不幸中の幸といいましょうか、夏休みに入ったばかりで、しかも講堂と実習工場が類焼をまぬがれたので、機械科の先生を中心として、先生方の手で講堂を仕切って授業の出来るよう応急の処置をすることが出来ました。

復興資金獲得のため生徒と一体となり、石鹸その他日用品の販売や久礼の八幡様の夏祭りに売店を出すなど、復興の意気にもえたものであります。地元の方々からも随分と物心両面のご援助をいただき元気づけられました。県当局も大変同情的で、その九月には早速、造船科の現図室、翌年五月には本館校舎を建築していただくという物資不足の当時としては異例の復旧ぶりでありました。

先生、生徒の一体となっての復興への願いと、校長、PTAのご努力の結果でありますが、寺尾先生が蔭の力になっておられたのではないでしょうか。その小林校長も、会長だった黒岩のおんちゃんも今は亡き人になりました。この大火をきっかけとしてかどうかは分かりませんが、須高との合併問題がおこり、県教委から楠瀬課長が説明に来られました。会場は須高の講堂でしたが、私の隣に坐っていた父兄が猛烈な反対の野次をとばしたことが印象に残っています。両校とも絶対反対で、綜合高校は実現しませんでした。あぶないところでありました。

私の赴任した頃は、機械、造船科だけのささやかな旧制の工業学校でありました。然し戦災もうけず、分散授業の必要もなく、当時としては広い運動場にも恵まれていました。敗戦直後のこととて、生徒も先生も楽しみとてはなく、昼休や放課後などにキャッチボールをやる位のことでした。

若い先生が多かったので、野球チームを作り、生徒と試合もしました。隣りの須小に親善試合を申し込み、私もまだ四十才位でしたから、ピッチャーなどやりました。いつの間にやら生徒の方にも野球部が出来、伊野から来ていた西内、塚本両君がバッテリーを組んでいました。軽快な動きをしていた山田君は後に市商に転校して名ショートとして活躍しました。はじめて市営球場で試合した時は、さんざんでしたがよい刺戟となりました。やがて卓球部も出来、大火当時、合宿

練習していた西森、小野君などは県体でも大いに活躍しました。運動会には、近くの青年団チームを招いたり、校内相撲大会を開いて、先生も参加して、いやがる生徒を無理にとらしてみたり、全校生徒をつれて須崎の浜へ水泳に行ったり、楽しい思い出が次から次へと蘇って来ます。

生徒は素朴で先生は若く、明かるい楽しい学園でありました。汽車通勤の先生も数人おられましたが、斗賀野のトンネルには閉口しました。吾桑駅で石炭をくべてトンネルにいどむこと三回位、やっと登り切る頃には車内は白煙もうもう。これが毎日ですからたまりません。昭和二二年一二月の南海大地震のときは汽車不通のため、吾桑駅からはるばると歩いたものでした。一月からは佐川小学校を借りて分散授業をしましたが、その寒かったことはよう忘れません。

私は須崎には大変縁があり、其後昭和三八年、須高へ赴任して来ましたが、須工がなつかしく、まだ当時のなつかしい先生方もおられたし、また丁度遠慮のない小松校長も先輩としておられたのでよく遊びに行きました。現在の沢本校長とも旧知の仲だったので用事もないのに度々話しに出かけました。その都度事務の方々からも心よく迎えられ、いつも、おいしいお茶などご馳走になりました。

つきない思い出を楽しみ乍ら須工のご発展を祈っております。

（昭和四四年須崎高校々長退職、現在私立中央高校）

街頭写真屋

一八・一二
機械科第二種卒　西川嘉明

我々機械科第二種一期生は昭和一六年四月から昭和一八年一二月まで二年九ケ月の在校であったが、私は昭和二二年九月から昭和二三年一一月まで再度在校したことがあるので、そのことについて書いてみたいと思う。

七〇年代は激動の時であるとよくいわれているが、昭和二〇年のような変化はないだろう。私が再び学校に帰ったのは二三年であったが、明治以来教育の柱であった忠君愛国は自由平和の民主主義に変り、歴史地理の授業はしてはいかんとか、教科書を部分的に抹消せよとかいわれ抹消すべき個所が講堂に張り紙されていたと思う。また学校における先生と生徒との間も、昔は七尺下って師の影を踏まず（我々もそれ程には思っていなかったが）といわれたように、先生は尊敬すべきものとされていたが、先生も生徒も同じ人間となってしまうし、更に猛烈なインフレによって先生は随分生活が苦しく、生徒が先生より小使いを多く持っていたのではないかと思う。当時給料は千八百円ペースとかいって、新入りの我々は月給が丁度それ位で、当時でも米一升百円とかいわれており、貧乏の程度が知れようというものである。

このように何もかも変った学校に帰ったのであるが、私にとって変らないもの、それは田村隆徳先生、橋本清美先生のお二人であった　私は第一回の卒業生で母校の教員となったということもあってお二人の先生から何かと目をかけて頂いていたと思う。

田村先生については開校以来馳染の人も多く、紹介されることも多いと思うので割愛さして頂いて、故人となられた橋本先生と街頭写真屋をやったことを書かして頂く。

橋本先生は高知商業のご出身で、当時非常な難関であった専検（専門学校入学資格検定）を取り、独学で中等学校教員の免許（文検）を取られた方で、非常な努力家で何事でも徹底的にマスターしなければおさまらないような方で、専門は地質学であったが、昆虫・植物についても造詣が深く、研究の必要上からか写真に特技を持って居られた。私はこの写真について弟子入りして何かと教えて頂いたが、弟子入りして一年、いろいろと失敗を重ねた末ようやくまあまあ写せるということになり、橋本先生のお尻にくっついて生徒のスナップ写真を取り、実費を頂く程度になっていた。これが生徒間の評判になり隣の須崎中学（現須崎高校で電報電話局のある所にあった）から招かれて臨時の写真屋になり、城山で薄暗くなるまでパチパチと写し、その晩実験室の暗室に入り真夜中の十二時、一時までかかって現象焼付けをした。

七月を迎え学校もいよいよ夏休みという時、橋本先生から石鎚山行きのお誘いを受けた。軍靴を履き米を二升程リュックに入れて朝一番の佐川発のバスに乗り途中からトラック、三輪車に何回か乗りついで、夕方面河の渓泉亭に一泊、翌日から山頂を経て長沢のダム建設現場を通り仁淀川沿に伊野に帰るまで四日間山の中を世間を忘れ己を忘れて歩き（漱石は山路を登りながら人の世の住みにくさを考え名句を残したが、我々は世を忘れるのみである）、心の洗濯をし晴ればれとした気分で須崎へ帰りついたところ、工業学校が火事で焼けたということを聞きあわてて学校に馳けつけたら校舎は無残な姿となっていた。その後職員会議で復旧のための資金の一部を何とか稼ごうではないかという話があり、私と橋本先生は写真屋でということになり、当時流行の街頭写真屋をすることになった。

丁度秋祭りの時季であったので生徒に各地の秋祭り日程を教えてもらい、あらかじめ写真の予約を受けて行き復興写真と書いた雨戸一枚位の立看板を作り、これに見本写真を貼りつけて屋台店と並べて店を張り、当日現場での注文も取りながら、須崎の八幡様、伊野から仁淀川に沿って少し下り、渡しで渡った所に松並木の参道のあった神社、久礼の八幡宮、梼原の何とか神社と、あちこちえと出かけて行った。久礼の八幡宮や梼原では同業いや本業の写真屋から素人が商売の邪

魔をするなと文句をつけられて今にもなぐられそうな一幕もあったが、生徒の父兄に神農会の役員さんが居て、その人を通じて現地の人に連絡がとってあった関係で、その都度この人達が我々に強力な味方になってくれることなきを得た。

秋祭りも終る十月下旬、私も大阪に転職することが大体決まり街頭写真屋の収支決算を行なったところ非常に収益率がよく、わづか三ケ月で十万円程度の純益をあげていたように記憶している。勿論これは復興に必要な資金の一部として橋本先生から提供され有効に利用されたことと思う。今から考えると終戦後の混乱期とはいいながら、教職にあるものが随分無茶なことをしたものだと汗顔の至りであるが、他の人にはない思い出として敢て記した次第であります。

当時この写真屋に対して注文取りや、出来上った写真の配達、現地での準備、その他に献身的な協力をして下さった生徒（現在ではもう四十才位、それぞれ中堅幹部としてご活躍のことと思うが）の方々に対しこの紙上を借りてお礼を申し上げます。

（大阪府商工部工業課
同窓会大阪支部長）

創立十年の危機

第四代校長　前田健造

昭和二六年はまだ占領軍の軍政下にあって、凡ての行政がその指導と監督下に置かれていた時代であった。私はその年四月一日付で窪川高校長より須崎工業校長に転補の発令を受けた。

当時、工業学校は永い歴史と伝統を誇る高知工業と、創立後一〇年の歴史浅い須崎工業の二校のみで、然かも須崎工業は、昭和二三年火災に遭いその復興も遅々として進まず、加うるに戦後の不況と郡部校という地域性より、年々志願者が減少しその存続が危ぶまれていた。昭和二四年九月公立高校の再編成が実施されて、同課程校の統合と共に普通課程校と実業課程校の合併による総合制高校への移行促進が軍政部の指導方針でもあった模様で、私が須崎工業校長に転補発令を受けた時、同じく須崎高校長の発令を受けた県教委指導主事の北代周三氏と共に総合制高校への編成替の検討が非公式に内命として指示されていた。

然しながら高知工業満六年、続いて大阪府立西野田工業満一三年、計十九ケ年間の工業学校在職の経験をもち、且つ戦後農業課程と普通課程の総合制の窪川高校での経験をもつ私

は、この指示とは逆にむしろ須崎工業の独立工業高校として、将来の発展対策は如何にあるべきかを検討すると共に、これが実現をひそかに使命と考えて赴任したことであった。私がこうした使命感を抱くに至ったのは、須崎工業学校の設立創始は高知工業出身の寺尾豊先生（元郵政大臣）の郷土の子弟教育と工業立国に寄せられた熱意による莫大な私財提供によったものであること。

初代故中内知章校長、三代故小林秀雄校長は共に、かつて私が高知工業在職当時の同僚であり畏友であったのでその意志を継ぎ飽迄も独立発展を願ったこと。

昔の高知工業の校歌にあった様に、「富国の礎は工業」にありで、敗戦によって打ち挫かれたわが国の生産工業界は、その興隆のため独立工業高校の設立を国家的要請として益々強く求めてくる時代が来るであろうこと。

実業教育は、総合制高校では充分に教育効果を挙げ得ない。専門教育面からも、生徒指導面からも、教育施設面からも種々の問題があり、特に工業教育に於ては独立校であらねばならない。等々の理由からであった。

然し校内には総合制賛成、反対の二つの流れが対抗し必ずしも楽観は許されない状態であったが、兎にも角にも校内の統一が先決と考えて、独立の旗印を明かにして方針を確立し、当時の県教育長杉村盛茂先生(現高知学園短期大学長)、教学課長楠瀬洋吉先生（現塩見文庫館長）にこうした私なりの考えを披瀝して了解を求めた。丁度その時分、須崎電報電話局の新局舎落成式に参列のため寺尾先生の御帰省があり、直接お目にかかって須崎工業の現状と将来に対する私の構想を述べ、先生のご意見をお聞きしたところ、全面的賛成を頂き更に積極的に援助するので努力せよ、との激励を受け意を強くしたことであった。こうした背景のもとに私は県に対し具体的な独立発展策として次の提示をした。即ち

「須崎工業が機械科と造船科の二科であって機械科は伝統と歴史ある高知工業高校にもあり、造船科は県内に鉄鋼造船の企業工場なく県民の造船工業に対する認識も極めて低く、且つ郡部校であることと相俟って応募者の減少傾向も当然のことと思い、この際今後時代の脚光を浴るであろう魅力ある科として、弱電関係の電気通信科の設置と、その完成年度に工業化学科を設置し、更にその後将来の国土関発事業に備え土木科を増設すると共に、従来の機械科は工作機械を主軸として特色ある科とし、更に一層造船科の内容の充実をはかる」という構想であった。

県教育長、課長共々これを了解され、教育委員会にはかり、これが実現のため努力するとの意を示してくれたので、ここに須崎高校との総合制構想は一転して、従来通り独立工業校として存続するとの見とうしが明かになったので直ちに

電気通信科設置のための準備工作に着手した。

一方私は須崎工業の将来を考え、生徒の愛校心の涵養と青年学徒の身心の鍛錬による剛健な精神の育成を指導の中心課題とし、伝統的な特色を培養してゆく必要を痛感し、全職員の賛同を得て、クラブ活動として相撲部を設けることにした。熱心な水野正治先生（現四国予備校英語主任）を顧問に体育の田原敏雄先生（現高知工業教諭、県高体連理事長）を監督指導コーチとして発足することとなり、乏しいＰＴＡ経費の中より捻出して土俵を構築し、水野先生より朱塗の優勝盆の寄贈も受け、最初は三、四名の生徒によって放課後熱心な練習が開始された。これが今日の相撲部の創始である。

時たまたま私は戦時中と戦後の過労がたたって大患に罹り、後事一切を教頭の野中健一郎先生、機械科主任田村隆徳先生、造船科主任の竹村義典先生を始め当時の全教職員に託し、不本意にも休職の上療養生活に入ることとなり、随分当時の先生方にご迷惑をかけお世話になったことであった。約三ケ月間校長舎宅に起居して増設科準備の推移を看まもり、後髪をひかれる思いで高知市民病院に入院、当時在校生であった松岡直人君ら三人の教え子達から手術のための尊い若き血液の供与を得、輸血しつつ無事大手術を受けて病根を断ち快癒への第一歩を踏み出すことが出来た。その年二月の県議会で電気通信科新設の予算案が可決承認されたので、安心するようにと杉村教育長自ら来院されて病床にお知らせ頂いた時の感激は私の終生忘れることの出来ないことである。

その後県当局は勿論五代校長故森岡貞篤先生、六代校長松岡常雄先生をはじめ歴代の校長先生、全教職員、地域の関係当局の不断の苦心努力の継承によって、隆々発展の道を辿りここに三〇周年を迎えるに至ったことは歓喜の極みである。

爾来二〇年を経た今日、私は古希の齢を重ね今もって老軀を提げて教育の道にご奉公出来ている身を日々感謝しつつ過している現状である。

創立三〇周年記念誌に稿を寄せ当時を回想し誌面を借りて当時お世話になった数多くの方々の限りない友愛とご恩に改めて感謝の誠を捧げ、歴史の流れの一駒を記して備忘の資とすると共に、今後更に須崎工業の校運の弥栄を切に祈念するものである。

（高知県中学・高等学校連合会事務局長
社団法人高知県退職金社団事務局長）

須工時代の思い出

二四・三
機械科卒　下村　昇

須崎工業高校が新設されて間もない昭和一八年四月に私は入学した。校庭は半分程しか埋立てができておらず大きな穴

が残っていた。しかし、新しい学校だけに先生方も上級生も一緒になって新しい校風を作り上げようという気魄に満ちていたように思う。

当時は世をあげて戦時体制であり、先生や上級生に対する礼儀は特に厳しかった。授業の中に軍事訓練をする教練という科目があり出席番号順に分隊長をやらねばならなかった。分隊長は始業前に教官の指示を受けに職員室へ行く。入口で不動の姿勢をとり、戦国時代の荒武者のように大声で名乗りを挙げる。『一種一年、青木恵一、山本教官殿に教練の指示を受けに参りましたッ。』一斉に先生方の視線が集まる。声が小さかったり、服装が乱れていたりすると間髪を入れずあちこちから雷が落ちる。まるでおけら火を振り回しながら火薬庫に入るようなもので、危険なことこの上もなかった。日常生活は万事こんな調子であった。この山本先生は個人的には非常に優しい方であったが、授業中ともなれば鬼のように恐ろしかった。この先生に友人の浜田幸四郎君は賞められたことがある。それはある教練の日、桜はなぜ日本人に好かれるのかという問に

『パッと咲いて、パッと散るからでありますッ。』

と即答したからである。彼は現在大阪で歯科医院を開いており、名医の誉も高い。

戦争が日毎に激しくなり、こうした授業も二年生になると勤労動員に切換えられ、飛行場へ、工場へと駆り出され、遂に終戦まで学校に帰ることがなかった。動員中は苦しかったことだけしか脳裏にない。私達は神原の整地作業場で終戦を知った。その夜、高岡の宿舎で突然誰かが「おい皆、家へ帰ろうや」と言った。「おう。」というが早いか荷物をまとめて真夜中に集団で脱走した。色々の思いが胸の中にあったのであろう、長い暗い夜道を皆は黙って歩き続けた。月はなかったが、星空が殊の外美しかったことを記憶している。

二年振りに、やっと自分達の母校に帰った。新聞を折りたたんだような粗末な教科書であったが、待望の授業が始まった。三角関数は担任でもあった鍵本正一郎先生の教えを受けた。正弦、余弦の曲線を書いて、「禍福は糾へる縄の如し。」と漢書を引用しての名講義は忘れられない。端正な方で大変きれいな字を書かれ、短歌にも深い造詣があった。詩人の市原麟一郎先生は国語を担当され、ユニークな講義に評判があった。宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ……」の詩は初めて先生から読んで頂いた。微分、積分は前田隆一先生に教わった。曲線の長さや面積が機械的に求まるのがとても楽しかった。こうした思い出は挙げれば限りがないが、若い頃に受けた恩師の印象は年と共に鮮やかになるばかりで、決して薄れることがない。

昭和二三年、学制改革で須崎工業高等学校になった。が、

この年の夏、漏電が原因で校舎が焼失した。私達はアルバイトをして一人五百円位の建築資金を作った。

食糧も物資も乏しい時代であったが、クラブ活動は年々盛んになった。野球部では、奥代重恭、笹岡益良、渡辺昭男君等が活躍、地下足袋をはいてグランドを走る選手達に私達は甲子園への夢を託した。大崎哲、堅田雄男、小島敏博君等のバレー部は須崎高校の美人チームと合同練習をして、腕はぐんと上った。名選手で評判の梅下和男君はこの時ロマンスの花を二輪も咲かせている。当時私は橋本清美先生の自然科学班に属し、次第に自然を見る楽しさを覚えていった。そして遂に物理学を一生の仕事とすることになった。

それにしても、文字通り一つ釜の飯を食い苦楽を共にしてきた大崎秀信、南部昌一、西村昌和の三君が若くして世を去ったのは残念でならない。三君とも秀才であり、よきリーダーであっただけに哀惜の念も一入である。

（大阪教育大学助教授）

第一種第一期生の記

二〇・三
機械科第一種卒　林　弘昭

灰色の曇り空に早春の陽光が淡い、昭和二〇年三月二七日は、私達一期生の卒業の日であった。

記念写真に童顔をのぞかせたのは三四人。卒業をまたず、七つボタンの予科練八人。蒙疆に雄飛した大崎二郎、満洲の浜口義雄、浜崎誠一の三君は、緊迫した戦局の異国にあって、その日望郷した。空襲もなく、国を憂い、将来の結束を約し、私達は全国の軍需工場に出立した。八月終戦。国破れて山河あり。心の糧を求めてやまなかった。

あれから二六年。世の変遷と試練、生きてきた生活の強さを、そこにみる。

在校四年間の思い出は、ストライキ、田村先生と運動場一〇周、学徒動員等、忘れ得ない。戦争末期の暗い時代、青春の救いであった。

◇

私の日記を追う。

二一年一月一日。病気療養の津野光康、薬石効なく、故人の初めとなる。無常を知る。合掌。

一月二五日。蒙疆より大崎二郎帰国。

三月　三日。新円切替。

七月　　。浜口、浜崎、撫順から引き揚げ。

一二月二一日。南海道大地震。津浪でその年は暮れた。

二三年七月九日の記録をたどる。

午後一時五〇分ごろ、母校から火を発し、焼いてたまるか

と、消火の手をつくしたが、その願いも空しく、灰塵をさらけた。学生時代の思い出が、凄烈な焔の中で池をめぐって、展開した。（損害約一、〇〇〇万円、漏電と報ず）

◇

四六年七月三一日未明、濃霧の熊野灘で貨物船神和丸と客船にほん丸が衝突、神和丸は沈没、乗組員五人の行方不明者は絶望であると、ニュースは伝えた――。

機関長井上博介が遭難の日、台風一九号が接近していた。海に生き海に眠る故人の冥福を、心から祈りたい。

◇

三〇年の歴史を持つ学校は、多の郷和佐田の丘陵に移転し、鉄筋ビル四階建の新校舎が、四七年四月落成するときく。

今の学校跡地は、ショッピングセンター、商業団地として生れ変り、四七年一一月を開店目標に計画が進められているという。感無量である。

母校の発展を願うや切。（四六・八・三一　須崎、県税事務所）

電通科設置の頃を顧みて

元校長事務取扱　野中健一郎

電気科の森先生が見えられ、「創立三〇周年記念誌」を発刊するから、電気通信科が発足した「いきさつ」について書いてほしい、とのおことばでした。

須崎工業高校で私がご厄介になったのは、昭和二四年から三三年までの九年間でした。同一校在職九年というのは、私の全教職生活を通じて最も長いものでしたが、それは単に長かったというだけでなく、私の「人生アルバム」のなかでは、後年特に印象に残るような経験や、出来事が、この間に集中しているように思われます。

勿論、ここで申し述べる「電通科設置運動」をめぐる諸々の思い出はその最たるものでした。その理由は、予算を伴う新規事業は一切とり上げないという県当局の考え方と真向うから対立したため、大変労多き運動に終始したからの一語につきると思います。

本校に「電通科」が設置されたのは、昭和二七年四月でしたが設置運動の発端は一言にして言えば、生徒の漸減傾向への対策だったといえるようです。

当時の生徒定数は、機械科二四〇名、造船科七五名でしたが、敗戦後の一般家庭の経済事情の不如意、教育に対する理解度の不徹底、産業界の不振による卒業生の就職難、等々種々の悪条件もあったかと思いますが、高校課程への進学率が極めて低く、ために定数に充たぬこともあり、生徒数三〇〇名を割るような事態に立ち到っていたのであります。

そういう次第で、生徒数減少への布石として、科の増設を考えねばなるまい、というのが校内の一致した空気だったように思いますが、この課題を「電通科新設」という、はっきりした形でとりあげられたのは昭和二六年四月、前田健造先生が校長として就任されたときに始まるのであります。

前田先生は、特に終戦後における本校生徒数の逐年減少しつつある事実に非常に心を痛められ、是非とも科の増設をもって臨まねばならぬ、そして新設の科は、現在高知工業高校に設置されておらず、且つ未来への展望につながる魅力ある科でなければならぬ。などの原則に立って検討を重ねられ、その結論として「電気通信科設置」という具体的な提案が先生によってなされたのであります。それは先生御就任の翌月、五月の初旬頃だったと記憶しております。

早速、全国の電通科既設校全部に依頼状を送り、①電通科の教育課程表、②当面必要な施設々備および教材、教具類、③電通科を新設しようとする後進校へのアドバイス。などを求めましたところ、期せずして、北は北海道、南は鹿児島に到る各校から続々……と申しましても僅か九校位だったと記憶していますが。詳細な資料に加えて力強い激励のことばが寄せられ、これによって自信を得、事実上、移設置運動への第一歩が踏み出されたことになります。先づ手はじめとして、それらの資料を照合、比較しながら本校の理想とする「教育課程の試案」をはじめ県、県議会、県教委などに出す陳情書と、これに添付すべき科設置に伴い当然必要とする教職員の増員、校舎の増改築をはじめ施設、設備など詳細にわたる書類の作成にとりかかりました。

この頃から、PTAの坂本会長が殆んど毎日のように学校に見えられ、前田校長先生との間に要談を重ねておられたようでした。

六月になってからはPTAの総会など矢継早やに開催され、学校の体勢としては「新科設置」対外交渉への足固めが、大筋においては大体出来上がったと思います。

ところが、大変困ったことがおきました。それは七月も夏休みに近い頃だと記憶していますが、前田校長先生が突如病気になられたのです。少し立ち入って申しますと、これは勿論、校長先生から後になって伺ったことなのですが、去る六月に実施された教職員の健康診断で、先生の胸部に少々異状が認められるということで、その後更に須崎保健所などで精密検査の結果、矢張りご病気だとの判定がなされたのであります。私は内心困ったなと感じながらその後も従来通り、必要事項に関しては校長先生の指示を受けながら、校務の余暇を駆使し、準備作業を続行していったのであります。

それは、夏休も漸く終りを告げる頃の午後でした。校長先生から、直ぐに学校へ来るように、との連絡で、急いで校長

室に行きますと、県教委から汲田主事が見えておられ、ご両人でご歓談中の様子でしたが、校長先生は、私の顔を〝いちべつ〟されると同時に、「あゝ、野中君です、野中君に後事を託して行こうと思って」といつもと少しも変らぬ屈託のない表情で、両人に諒解を求めるような調子でいわれ、改めて私を顧みられながら「実は、近いうちに入院しなければならなくなったんです。」と、さり気なく言葉を続けられました。私はこの一瞬に受けた衝撃を今もって忘れることができません。この人の教育理想実現のために全力を挙げてお助けしようと思っていたのにと、悲しさと、くやしさが一遍にこみあげてきました。

九月一日付で私への〝校長事務取扱い〟の辞令が出ました。八月末をもって、書類の準備は概ね終っていました。そこで、対外的な仕事として、高吾両郡と幡多郡東部の町村長及び中学校を訪問して陳情書に署名をして頂くこと、今一つは、今後の運動を効果的に進めていくためには是非とも事前に、県教委事務当局に陳情の趣旨を好意的に理解しておいてもらう必要があるので、適当な機会に教務課長を訪問して内容を詳細説明し協力を求めておくこと、以上二つの仕事が九、一〇の二ケ月間のスケジュールに予定されていたのであります。

私は校務のすきを見ては、地元須崎町とその周辺を手始めに比較的乗物の便利のよい久礼、上の加江方面に脚をのばし、中学校と役場で署名をもらって廻りましたが、ここではしなくも私が、痛切に思い知ったこと、それはこの仕事が、授業などを抱えながら、片手間にできるような、生易しい仕事でないということでした。

私は学校へ帰ってからも種々考え悩んだ揚句、入院を一両日後にひかえ、構内の住宅にご静養中の校長先生を病床に伺い、「電通科設置の運動は校長先生が御全快の暁、改めてやられるようにされたら……」という意味のことを進言したのですが、上半身を起き直られた校長先生から「弱音を吐いちゃあ駄目だよ、もう、ここまできたんだから、この位いのことは僕がいなくても出来なくては……」という厳しいお言葉でした。

私は、退くに退かれぬ現在の立場をしみじみ自分自身に言いきかせながら辞去する外ありませんでした。

翌日の職員会議で事情を訴え、週十時間の私の授業を五時間に減らして頂くことに先生方の快諾を得、それ以後私は文字通り寸暇を惜しむようにして署名をいただきに廻りました。役場などによっては会談に熱が入り過ぎて思わず、長談義をしたり、中学校のなかには、バスの道路から一キロ以上も入った所にあったりなどで、署名の途中は、バスに乗るなど思いもよらぬことを私は経験から教えられました。

朝、始発のバスで新荘川筋を上り、白石の近くで下車して上半山、下半山、上分と川沿いの真白く乾いた道路を歩いて各役場、中学校と歴訪して帰ったこと、影野で汽車を降り、（その当時は汽車は影野まで）往きは興津までバスに乗れたものの、役場で以外に手間どったため、運悪く帰りのバスに乗りはぐれ、止むなく、影野までの山坂一〇数キロを歩いたことなど、時に思い出しては、若かりし日の自分をいとほしく思ったりしています。

次に、楠瀬教務課長を県教委事務局にお訪ねしたのは一〇月の末も押しつまった頃だったと思います。私は持参した書類を課長の机上に置き、須崎工業高校がこの度、電通科設置の要請に踏み切るに至った〝いきさつ〟を詳しく説明し、この運動の成否は一にかかって事務局の方々、とりわけ、教務課長の御意向によって決まると思うので何卒よろしく、という意味のご依頼を申し上げたのであります。

すると、私の話を終始、黙々として聴いておられた課長は冷然として、次のように言われました。「私はそうは考えない、もし電通科の増設が時代の要請であるとすれば、郡部の須崎工高にではなく、県の中央部に位置し、より設置効果の期待のもてる高知工高に新しい科を設けるというのが私の意見である」と。私は課長の予想だにしなかった冷淡なこの態度に、全身から発する憤りを抑え得ませんでした。私はここで自分なりに、教育者的良心として自負している立場から、課長の考え方の誤りを指摘し、次のように反駁したのであります。曰く、ここにあえて教育基本法などを持ち出すまでもないのだが、教育の機会均等、ということばの意味を課長はどのように解しておられるか、いまは正に新時代への幕明けともいうべき重大なときである。旧制中学校の標札を〝何々高等学校〟と書き替えただけで、何等為すところを知らず、万事、事なかれ主義、でその日、その日を過しているのが昨今の県教委の実態ではないか。

実業教育の振興策こそは教育行政当局として即刻取り組まねばならぬ最優先課題であるを疑はない。その意味からも差し当たり東は安芸に、西は幡多地方に工業高校を各一校新設し、過去、長きに亘り不当に放置されて顧みられなかった僻地の子弟に対して、等しく実業教育の機会を享受しうるよう、教育行政当局者の良心の名においても、即時措置すべきは当然なのに、それをなんぞや、須崎工業高校に電通科設置の配慮方を要請したのに対し、「郡部の学校には新しい科は置かない、増設の必要あれば市部の高知工業高校を考える」など時代錯誤も甚だしい……など、自分としては課長の発言に対して、思ったことをそのまま言葉に出して言い、全く妥協ないまま帰ってきました。

後日、城西病院に、前田校長先生の病床をお見舞いしたと

き、はからずも、校長先生から前述の話が出ました。

「二、三日前、楠瀬課長が来てね、イヤー野中君というのは随分気の強い男だね、と言ったから、いや、あれで案外さっぱりした男だよ、と言っておいたよ」と先生は可笑しそうに話されました。

奇妙なもので、楠瀬課長との一件が、私の心を刺戟し、この運動は是が非でも勝たねばならぬわい、という新しい闘志と使命感のようなものが湧き、運動に関連する仕事に一段と身が入るようになりました。

一一月には会期中の県議会を訪れ、休憩時間に議員さんの後を追いかけて、一名でも多くの署名をもらうことに努めました。特に教組出身の高橋敏明議員から受けた親切なご配慮、幡多郡選出の小島小太郎氏の示されたご好意など忘れません。

月末には愈々県と県教委へ陳情に行くことになりました。一行は地元の笹岡助役、佐川の森田町長、浦の内の上田村長(後の須崎市長)、坂本PTA会長、学校側からは橋田事務長と私、外に久礼、窪川からも行って頂いた筈なのにどうしても思い出せません。

最初、知事部局と議会事務局を廻り、型通り陳情をすませてから教委事務局に行きました。折から委員さん達は会議中でしたが、区切りがついたところで私共の陳情を受けて下さることになり、先づ坂本会長から陳情の趣旨について述べられ、細部にわたっては私が専ら説明に当たりました。委員さん側から二、三の点について質問があり、それにお答えしたのですが、その内容などは全然憶えていません。それなのに、ある委員さんから「この種の陳情に学校長が自ら先頭に立って来るのはどうだろう。」と発言されたのが私の〝癇の虫〟にさわり、二〇年の歳月を経過した現在、なお忘れることが出来ないとは、私など随分罪深い厄介な人間なのか知れません。

さて、これで一応陳情活動は終ったものの、なんといっても最終段階においては、教育長の意見が決定的な力をもつ、といわれていましたので、教育長にいま一遍お会いして、最後の駄目押しをしておかねばと思い、陳情の日から数日たって県教委へ参りました。教育長には来客中とのことで、控室に入りますと、折から来合せていた教育委員長とばったり顔を合せました。先日の陳情で、お互い顔見知りになっています。彼は無論私の来意を百も承知です。「これは現段階では私個人の意見としてお聴きねがいたいですがねえ」と前置きして早速、話を切り出してきましたが、氏の意見というのは、要するに、電通科は新設するとして、その交換条件といっては悪いが、現在不振状態にある造船科を廃止するという案は考えられまいか、というのです。

私は、ついこの間の楠瀬課長との一件を思い出しながら「ご指摘の通り造船科は現在、二五名の定員を割るような状態ですが、戦後の船腹不足は世界的な問題だと思います。いまに本校の造船科が時代の脚光を浴びる時が到来することを私達は疑っておりません。どうか、造船科をどうこうするとお考えにならずに、電通科の新設を御配慮ねがい度いと思います。」そんな意味のことを汗を拭、き拭き申し述べているところへ、来客を送り出した教育長が同席されました。「やっぱり駄目か」ぽつりと一言された教育長の赤ら顔はいつもの温顔そのものでした。

それにして〝トップクラス〟の間では既に通じ合っていたようです。豪放らい落な教育長が加わられたことで私は気分的にも〝らく〟になり、「教育の仕事は、眼先の利を追う際物商買などとは本質的に違うから、造船科の廃止などいわずに、是非とも電通科の増設を認めて欲しい。」と、乏しい知恵をしぼりながら、歎願これ努めました。

教育長は、私の話の終ったところで、「よし判った。然し、造船科の現状は教委内でも話題になっている折りだから、将来の見通しについて学校側の〝長期計画書〟のようなものを出してもらおうか。」と言われました。私は肩の荷が幾分軽くなった気持で辞去しました。

翌日学校で造船科の竹村義典先生にことの次第を説明し、造船科の長期計画書の作製をお願いしました。更に数日後、先生の苦心に成る部厚い書類を携えて、両人で県教委に出頭しました。細部にわたっては、竹村先生から熱心に補足説明をされました。やがて、杉村教育長のお顔の表情に、私達の不安や焦りに対し以前にも増して、ほっとさせるようなものを感じとることができました。

かくして、その過程においては随分と紆余曲折をたどりながらも、数多くの人々の善意と援助に支えられて、遂に翌二七年四月、須崎工業高校は既設の機械科、造船科に加えて、電気通信科の増設に成功し、ここに宿願を果し待たのであります。

（須崎高校定時制主事を最後に退職
現在、川崎重工㈱嘱託）

私とドル・ショック

二〇・三
機械科第二種卒　片岡命長

ドル・ショックで人並みに騒いでいる中に暑い光化学スモッグの夏が台風二三号と共に去っていこうとしている。先日出張から帰ってみると、得意先の社長が亡くなったという。同年輩で碁敵のあまりにも身近な人だったので、柄にもなく自分の年令について考えてみた。然し考えてみたってどうともなるものではなく、本当にあっという間に過ぎた三〇才代

をふりかえってみたという次第……。何のために生きているんだ?とむずかしいことをいっても始まらない。これから如何にして長生きしていくかというところにおちついた。

先日、朝日新聞社であった〝ドル・ショックと日本経済〟という講演会で、三井銀行副社長の飯野氏は、〝戦時経済は終っていない〟ことを強調された。

IMF・一オンス三五ドル・為替変動相場制、といった前段のむずかしい話は大して身近なものでもなく、毎日の新聞を読んでいれば大体のことはわかったつもりになれる。が、〝勝つ為の戦時体制〟の中で母校須崎工業の三年間を過して来た私は、思わず身を乗りだして聞いていた。毎朝六時四〇分になると家を出て山手線に乗り、近郊社線に乗りかえて会社へつき、夕方は疲れて何となくわが家へ帰って来る自分。飯野氏流に言うと〝朝から晩までコマネズミのようになって働き、二級酒を飲んでマージャンをやり、へとへとになって帰ってバタンとひっくりかえる〟この姿こそが〝戦時経済〟下の一面だというんだ。俺のことを言ってやがると思った奴が満員の聴衆の中に大分いたんだろう。この種の講演会にしてはめずらしく、やけっぱちの拍手と爆笑がうずをまいたことでわかった。

ここで行きがかり上、飯野理論を拝借すると、戦時経済とは、非効率の産業でも、又弱い生産設備でも、保護と援助をあたえて、自給と物量増産につとめる。休暇をやめ勤務時間を長くし、家庭生活をぎせいにして働き、道徳、文化、教養、規律の低下をかえりみないで戦う為にがまんして唯ひたすらに目的に向って突走っていくことを言うらしい。そして、敗戦―平和―復興とめまぐるしい経済の立直りの中で、〝コマネズミ〟は変らない動きをする。そして資源もなく資本の蓄積もない敗戦国日本は、その戦時経済のおかげで、GNP世界第三位、しかし残念ながら国民の個人所得は大分見おとりする一七番目位。

ここで人間らしい生活をする為に、自分のくらしを組立てる為に、あなたはどう考え、どう動くべきか! それはこの自由な現代に於けるあなたの自由選択であるといわれる。

そうだ思いだしたぞ。〝月月火水木金金〟一日として、アメリカの飛行機が爆弾を積んで飛来しなかったことのなかった須工卒業の年、余りにも自主性のなかった私には本当にはずかしいことながら、在校時のまとまった想い出などないけれど。

配属将校が突然やって来た暑い夏の日、講堂で全身の震えが止らなかったこと。校舎に沿った校庭にさつま芋と南京豆を作ったこと。

〝おまん、こりゃあクラッチかよ、わしにも運転さしや〟といって順番を待っていた僕達をしり目にオンボロ自動車に

乗っていったKという眼鏡の先生。それ以来私は身近に自動車免許証があるようで自分のものにならない立場に立たされている。機械科に席をおきながら、妙なことに漢文や国語の時間が待ち遠しかった失格組にも折にふれて思い出される恩師が何人かいる。何時かそのお住いを尋ねて、ビールでも飲みながらゆっくりその頃のお礼や話をしたいと思う。

先日の関東支部会で、準備会にこまめに出席したことが認められ(本当は海地、箭野両先輩の謀略にひっかかったもの)こちらの方に居る同窓諸兄の連絡係に選ばれた。その器でもないものが無理をすると不自然この上もないし、又何もしないと申訳ないことだし困惑している。然しながら集ってくる顔は、まさしく須崎湾の潮風にきたえられた土佐の顔であれば、年令の差や、いかめしい名刺の肩書をこえた共通の何ものかがある。その共通のものを足場に今後母校発展の為の力になり、何時しか自分を忘れてしまいそうなこの街のしくみの中で、会員の為の憩いの場になるものを皆んなの協力で作っていきたいと考えている。

〝馬子にも衣裳〟人間は場が与えられるとその場にふさわしい働きをしようとするそうだ。卒業以来母校の為に何一つ出来なかった、いやしなかった天罰がまさしく的中したと思ってみるといい。〝おじさん〟と呼ばれる年になった自分をおかしくもある今日この頃、いろいろな場を自分の生活を楽しくする為に積極的に利用し、多くの人々と話し合える場を持ちたいと思っている。母校三〇周年を迎えるに当り校長先生を始めとする学校当局、及び地元に居られる同窓会の皆様方のご努力に感謝し、今後のご活躍を祈って、私とドル・ショックを終る。

(多摩燃器株式会社・同窓会東京支部長)

『夏の終り』

二四・三
機械科卒　奥代重恭

秋風が立ち、黍の葉がさやさやと揺れだす頃になると、私は終戦直後のけだるい解放感と、すえたような虚脱感が胸の中を去来してくる。学校生活を語ると言うことは、戦争を語ると言うのに等しい程、密着した生活であった。

あこがれの、須崎工業学校の門をくぐった頃は、戦争がたけなわであった。ラジオからは軍艦マーチに続いて、大本営の発表があった。各地で日本の勝利を伝えるニュースが、殆どであった。そのニュースに嘘が多かったことは、終戦後になってわかった。日の出の勢であった日本の軍力も、次第に衰退の色を濃くし、統後を守るのは女、子供、そして年寄りのみであった。ペンを持つはずの我々の手には、木銃が与えられ教練を受けねばならなかった。又、運動場の埋立てや壕

掘り作業の為、モッコやトロッコを酷使した。たまの遠足も、それは名のみで兵隊のような行軍であった。背のうへ砂袋を入れ道中は、軍歌の合唱、背後には上級生の鋭い眼が光っていた。このような酷しい日々をさほど苦しいとも思はない程、我々は子供の頃から軍事教育で鍊えられていた。

二年生になり、学徒勤員の名目の下に、松下工場へ派遣させられた。各職場で大人に混って働くことを余儀なくされ、約九円の賃金ももらった。その頃、ラジオから流れる「湯島の白梅」や「伊那の勘太郎」のメロディが明日をも知れぬ我々の命へ、ほのかな灯りをともしてくれた。やがて、日章飛行場の整地作業をする為、親元を離れたが、そこは軍隊生活そのものであり協力一致の精神をたたき込まれた。その後高岡の鉄工所へ移されたが、工業学校の生徒とは言え、機械作業が未熟で作業はスムーズに行かなかった。工場疎開の為、機械の運搬をせねばならなくなった。グループが手押車を使っての作業であったが、ぎらぎらした炎暑は栄養不足の体にこたえた。昭和二〇年、本土の空襲も頻度を加え、七月四日には遂に高知市も焦土と化した。八月には予科練へと飛び立つ友とも別れを告げた。その後、広島、長崎と続いて原爆の被害を受け、日本の戦力は虫の息になってしまった。八月一五日、天皇陛下の玉音放送があるとのことであったが、我々には明かしてもらえなかった。それが戦の終わりを宣言するものであったことは、後で知らされた。目の前の高峰が、がたがたと崩れ落ちるような激しいショックであったが、不思議に涙にはならなかった。その夜宿舎には「土佐湾へアメリカ兵が上陸した」と言うデマが飛び我々を震え上がらせた。組長の指示に従い佐川方面と伊野方面と二手に別れて、夜逃げを敢行した。日々の粗食と過労がたたって、途中で腹痛をうったえる者も多かった。私も路傍で便意をもようし始めたので、夜陰にまぎれてそれを実行した。一六日に久礼の我が家にたどり着き、親子で涙ながらに抱き合った。満洲へ嫁いでいる姉や海軍の学校にいる兄の安否も気遣われた。三年の二学期から授業は平常に戻されたが、紙の粗悪な教科書で超特急の授業を受けた。過去二年半のブランクはどうしようもなく、仲々勉学に馴染めなかった。やがて、六・三・三制が施行され我々は中学五年から、新制高校へ編入の形になった。混沌とした敗戦のあけ暮れの中で、あっ気なく卒業の時期がやってきた。

無事須崎工業高校の第一回卒業生として有難く卒業証書をいただいたのである。聞くところによると、私達の学んだ粗末な西礼町の校舎はやがて姿を消し、和佐田の丘陵に鉄筋ビルがそびえ立つと言う。諸先生方の教えを仰いだ思い出の場所が、もはや永久に見られなくなることに、一抹の淋しさを感じさせられる。が、今ここに母校も創立三〇周年を迎え、

益々発展の一路をたどっていることは、卒業生の一人として深い喜びに耐えません。

私は二〇才を過ぎて志を抱き、単身上阪して来た。右も左もわからない都会の真中で私の飛びこんだのは、鉄鋼界であった。高校時代に学んだことがそのまま活かされる、この鉄鋼業を天職と思うようになり、やがて独立して小さい会社を創った。同業者が星の数ほど居るこの工都で生きて行く為には、並々ならぬ腕と度胸がいるが、まがりなりにも一匹狼として渡り歩いていけるようになった昨今、やはり高校時代の教えが土台になっていることを痛感し、感謝している。

間もなく中学生になろうとしている私の息子は大の野球狂で、終日バットを振っている。その姿を見ていると平和の有難さと、自分の過ぎこしかたをしみじみと思うのである。戦争を知らない今の子供達が、戦争をかっこいい物として考えることのないよう、声を大にして叫ばなければならないと思う。『戦中派』といういまわしい名前を頂戴しようとも、本当の意味での「戦争放棄」を唱える使命のあるのは、我々の年代ではないだろうか。失う物の多かった戦争下の学生々活の中で、我々が得たものは、不屈の魂であった。蹴られても踏まれても立ち上って行ける、この根性は子供達に伝える必要があると思う。仕舞い忘れの風鈴がかすかな音を立てながら、夏の終わりを今、告げようとしている。

（四六・八・二七　桂金属工業株式会社専務取締役）

森岡、中内、小林先生を偲ぶ

～三先生と私～

校長　沢本　豊

本校の歴代校長の数は九人である。そのうち四人までが高知工業の出身であり、面白いことに四人とも奇数代目に当っておる。

初代校長中内知章先生（一六・四～二〇・一二）は大正八年機械科第三回卒、大阪高等工業学校。三代校長小林秀雄先生（二二・四～二六・三）、大正八年応用化学科第一回卒、広島高等工業学校。五代校長森岡貞篤先生（二七・四～三四・三）、機械科第一回卒、早稲田大学。それに私の九代、機械科第一三回卒、神戸高等工業学校である。

三先生は、上級学校卒業後ただちに母校の教壇にお立ちになった、所謂生粋の教職畑の方で、また申し合わせたように在校中は抜群の成績であった。これは決してお世辞ではない。私が高知工業に奉職していた頃何かの機会に先生方の学籍簿を見て、驚嘆した記憶があるから間違いはない。

当時高知工業はまだ私立（大正一二年県に移管、県立高知工業学校となる）で、校主は竹内網先生（吉田元首相の厳父）からご長男の明太郎先生に移っていた。そんな関係で教

員の採用は学校の自由採量に任されており、余程人物、成績とも優ぐれていない限り母校の教壇に立つことはできなかったようである。

三先生は同じ年代の同窓生で同僚の間柄でもあるが、私は一〇年以上も後輩で先生方にとっては教え子、それも不肖という冠のつく教え子である。

森岡先生には三年生から五年生の間、機械設計、機械工作、ボイラー、機械実習などをお習した。とくに四年生と五年生の時はクラス主任をしていただいて随分ヤンチャもし、ご心配もおかけした。当時は専門教科の教科書はなく（ボイラーやエンヂンの図集はあったが）講義はすべて先生の口述をノートすることによって行なわれた。

森岡先生の悠揚迫らざる口述と噛んで含くめるような講義は今でも頭に深く刻みこまれておる。

先生の愛称は『パターン』であった。これは全校的なものではなく、私共のクラスだけで使われたものだと思うが、その由来は、三年生の初の機械工作の講義で『今日から木型工場＝パターンショップ』といわれた先生のその発音が如何にも重々しく、まだ子供であった私共の耳に異様に響いたという罪のないものであった。

先生は大正一一年から昭和一四年まで一七年間母校で教鞭をとられたが、同年五月佐賀県の鳥栖工業学校の校長に栄転され、のち新設の多賀工専の教授に招かれた。終戦後二四年母校へ校長として帰任され、戦争中に荒廃した母校の復旧に尽力されること三年、二七年四月本校の校長に転補されたのである。後任は小松生幹先生（昭和一三年から、同三二年西高校の初代校長として転出するまで、高知工業在職一九年、退職後県教育委員となったが、のち辞任、現在高知市薊野に自適）であった。

この人事は当時人々に意外の感を与えたようであったが、その真相は県教委が先生に本校の建て直おしを託されたものだと聞く。すなわち郡部校としての不利、志願者の漸減などのために高知工業に比べて余りにも見劣りのする本校を、高知工業並に建て直おすために特に先生に白羽の矢がたったものだと聞いている。

先生はご在任七年、名ＰＴＡ会長として有名だった、坂本和久氏の協力を得て、新設直後の電気通信科の施設設備の充実、運動場の拡張、化学工業科設置への布石、校長公舎の建築等、施設設備面でも面目を一新されたが、更により以上に教育の内面的充実に尽瘁され本校三〇年の歴史に大きな足跡を残された。今私が住っている校長公舎は先生ご在職中に建てられたものでその設計は多賀工専の官舎に倣ったものだといわれている。

私は戦後、それも二五年からの教員である。同年四月から三年間城山高校に勤めたが願いが叶って昭和二八年四月母校

高知工業へ移った。然しその時は森岡先生はすでに本校へ転任された後であった。三四年四月先生が再度高知工業の校長として帰任されるまでの七年間に校長は小松生幹先生から戸梶徳喜先生に変っていたが、戸梶校長は先生と入れ替りに県教育委員会の指導課長に転出されたのである。

こうして私は先生が退職されるまでの二年間教員としてのご指導をいただくことができた。一口にいって先生は誠実の人であり至誠の人であった。生徒としての五年間、私の目に映った先生は『何んと行き届いた親切な先生だろう……』ということであった。相当なヤンチャ坊主もいたが先生から叱られた生徒は先づあるまいと思う。時に生徒に注意される場合でも、むしろそんな時、先生の顔にはやさしい微笑がただよっていたように思う。五年生の機械設計でサイクロイドやエピサイクロイド曲線の複雑な画法を実に綺麗なシミひとつないプリントにして頂いたことを今でも有難く思い出す。私が教員としてお仕えしていた頃、何か肩の張らない会合の席で……『私はあの頃（私が生徒であった頃）実習を入れて週三六時間もっていた……』。とぽつんとただそれだけいわれたことがある。また先生は一〇年以上も年下の私共より遙かに時代感覚が鋭かったようで、何時だったか『時代が大きく変ったからね、昔のような考えだけでもいかんよ……』とたしなめられたことがある。

先生はいろいろの才能に恵まれておったが特に謡は素人離れがしておったようである。本校ご在任中、沢山の方々が弟子入りをしたらしい。転任があったり途中で脱落したりして最後まで残った人は少なく、今在職しておるのは田村隆徳、明神亘、竹村義典、合田正寛の諸氏である。同僚の結婚式や、新築祝などにはこのうちの誰かが先生直伝の名調子で錦上花を添えてくださる。

先生は三六年退職された後、一年ばかり天神町に自適しておられた。当時高知工業の同窓会では五〇周年の記念事業（昭和三七年五月）として図書館兼同窓会館の建設を計画をしておったが期日を一年後に控えて資金（七三〇万円）の調達に追われていた。同窓生はもとより、県内の企業にも寄付をお願いすることになっていたが、学校への寄付ではなく同窓会への寄付だから難色を示す向きも少くなかった。そこで県内にお名前の知れ渡っておる先生にご出馬いただくのが最も効果的であると考え、細い計画をたて、戸梶校長と共に先生のお供をして企業を歴訪した。東は香宗から西は伊野まで奔走した。若い私どもで可成こたえたから先生は嘸お疲れになったことだろう。前日、お願いしておいてお迎えに上ると先生はきちんと用意して待っていてくださった。そうして『じゃあ、いきましょう』と短くいって車に乗られるのが常であった。

翌三七年二月には図書館も立派に竣工し五月四日の開校記念日には五〇周年の記念式典と図書館の落成式が盛大に挙行された。落成式では先生の荘重なうちにも淡々とした工事報告が印象的であった。

然しそれから僅か四ケ月の後、先生は忽然として不帰の客になられたのである。九月二日（日曜日）私は戸梶先生から電報で呼び出された。急いで登校すると、先生は悲痛な面もちで、昨夜おそく森岡先生が亡くなられたこと、自分は十一時ごろ危篤の連絡を受け車で駈けつけたが、すでに昏睡状態であったこと、などを話された。余りのことに私はただ茫然として立ち続けるのみであった。夏休み中のことではあり殊に先生は佐川、私は商国市という地理的な関係もあって先生ご不快のことは全く知らなかったのである。

五〇周年の記念式典も立派に終り図書館兼同窓会館も見事に竣工して重荷をおろされたことだっただろうに……いろいろとご無理をお願いしたことを今更のように申し訳なく思うばかりであった。

告別式は佐川町春日のご自宅で行なわれた。会葬者は引きも切らず、花輪は道に長く並べられて、益大な告別式であった。

小林先生には三年生の時、化学をお習いしただけである。先生は応用化学がご専攻であり、私は機械科の生徒だったので教室でのご縁は少なかったわけである。

先生が本校三代目の校長だった頃は、私はまだ教職に就いていなかったのでお近付は全くなかった。

先生は大正一二年から昭和一四年まで母校で教鞭をとられたが、その年の六月広島市立第一工業学校に転出された。そうして二二年四月本校の校長としてお帰えりになったのである。

先生は二六年退職され、善通寺にある今の四国学院大学の教授に招かれたが、後再び帰国して高知市旭の清和女子高校の校長に就任された。先生は熱心なクリスチャンであった。ミッションスクールの校長として、魚が水を得た先生だったが、昭和三五年六月校長室で急逝された。何んでも生徒を校長室に呼んで話をした後でドアーまで送って行きそこで突然倒れられたとのことである。告別式は校葬で行なわれ私も会葬したが、卒業以来先生に『お会い』したのはこれが最初で、また最後である。

先生が校長として本校にご在職中、昭和二三年七月不慮の火災のため校舎の六割を焼失した。原因は漏電、それも戦争末期本館を宿舎にして駐屯していた海軍の兵士が勝手に行なった不良配線からであったといわれる。

先生はクリスチャンに共通な非常に物静な面ざしと態度の方であったがご自分には極めて厳しい面を秘めておられたの

でこの火災には特に責任をお感じになったことだろう。そのうえ先生は本校創立の功労者である寺尾豊先生の三年後輩でお親しい間柄でもあっただけに嘸かし苦しまれたことであろうとお察しする。

先生は校舎の復旧に文字どおり全霊全力を尽して東奔西走し、許される限りの手段を講じられたそうで、ただ痛ましいという一語につきる。学校の先生方や生徒達も復旧に協力するため焼け落ちた校舎の木切を拾い集めて海岸で塩を焚いたり、近隣の氏神様の夏祭りでアイスキャンデーや日用品を売ったり、街頭写真屋をやったりして復旧資金の一部を稼いだそうである。校長、教職員、生徒が一丸となって復旧に当った姿は、学校の浮沈にかかわる非常時であったとはいえ、当時の麗わしい人間関係を物語る佳話として永く語り継がれることであろう。

中内先生には二年生の時数学（代数）を、三年生と四年生の時機械製図をお習いした。

先生が着任されたのは私が二年生の時の四月であった。当時高知工業では雨天でない限り炎天下であろうと粉雪が舞おうと全校教職員、生徒が参加して朝礼を行なっていた。全校生徒へのお達しはその朝礼の時校長先生または係の先生からなされることになっていた。

その朝吉崎校長先生（初代の名校長で明治四四年から昭和八年まで実に二二年間〃亘り校長の職にあった）のご紹介につづいて壇上の人となった先生は『私が中内です。どうぞよろしく』といって軽く頭を下げた。

房々とした真黒な髪、白皙の顔に縁なし眼鏡のよく似合う美男子であった。私達は早速「坊っちゃん」なる愛称を先生に捧げた。

『坊っちゃんの月給は九〇円ゾ……しょうええねや…』、クラスの情報屋（私達のクラスの中に何処からともなく情報を仕入れて来てクラスへ流す情報屋がいたが、その内容がかなり正確だったのでクラスの者に喜ばれていた）がこういって皆を驚かせたのは五月中頃のことである。当時高知市内の小学校長でかなり先任の方の月給が八〇円位だったそうだから高給だったには違いない。喰気盛りの私共でも五つ食べると腹一杯になるボタ餅が一個二銭でお茶のサービス付だった頃である。

先生は大正一三年から昭和一四年まで一五年間母校で教鞭をとられ、同年五月尼崎工業学校の機械科長に転じられたが短期間の後母校に帰任され、一六年四月本校の初代校長に転補されたのである。

不肖の生徒は卒業後も不肖で年に一度の年賀状も差上げたり上げなかったり、とんとご無沙汰に打過ぎていた。そんな私に一五年の春頃先生からお手紙がきた。当時私は海軍に勤

めていたが、不審に思いながら関いしてみると、『……そんな事情で今度須崎に工業学校ができることになり私が校長に内定している。ついては帰国して教師をしないか……』というお誘いであった。私は自信のないまま大いに心が動いた。然し戦時下である。殊に私は在学中（神戸高工）海軍の造兵生徒になり給費を受けた関係で進退の自由は許されない。事情を述べ、お礼の言葉とともにご辞退したことであった。

私が教員生活に入った二五年には先生はすでに退職して入交産業へ技師長として迎えられていた。先生が退職したのは終戦直後ともいえる二〇年一二月のことである。敗戦後戦争中の教育の基本が真向から否定され悪と極めつけられたことに対する自責（もとより先生の責任ではないが）にも近い正義感や、教育者、特に上層部に対する誹謗にも近い世論に対し、潔癖な先生の性格がその職に留ることを許さなかったものと思われる。

先生が入交産業へ入社されたのはご退職から一年の余も経ってからのことである。

先生は同窓会の運営には大変ご熱心で、東洋電化の建設という極めて多忙なお仕事の傍ら戦争中に四離滅裂になった同窓会の再建に心を砕いておられた。

私が高知工業へ移った二八年の秋、先生に同窓会の世話をするように依頼された。私は本心をいえば辞退したかったが先生のお言葉であれば仕方がない。当時同窓会の庶務を一手に引受けておった小川楠水先生（高知工業の同窓会の生字引的人物、今は退職して朝倉で自適。四四年一年間本校の講師として勤務された）のお手伝を始めた。そのうちに私もだんだん本腰が入るようになり、昭和三七年の創立五〇周年記念事業として図書館兼同窓会館を建設しようという計画をたて、同窓の人々にも随分とご無理をお願いする羽目になった。この案を私が最初に相談したのは先生であった。それも桟橋通りの電車の中であったが、先生は大賛成で早速理事会を開いて同窓会へ持ち出す糸口などについて話し合ってくださった。

この計画がほぼ煮詰って愈募金などに取り掛るという段階になった三三年二月先生は急に亡くなられた。

戸梶校長先生からそのことを聞いた時私は文字どおり自失してしまった。『そうですか……』やっとただこれだけいって机に戻った。頭の中を先生についてのいろいろの思い出が相馬燈のように駈けめぐった。

今先生を失なって同窓会の再建はどうなるだろう、記念事業は一体……と心配は果しなく広がる思いだった。それ程私には同窓会における先生の存在が大きくまた力強い柱として印象づけられていたのである。

然しその心配にもまして悔まれるのは生前お見舞に上って

いなかったことである。ご不快で静養されておるということは聞いていたが、平素お元気な先生のことだから間もなく回復されるだろうと思っていた。県外支部に協力を依頼するため一週間ばかり出張して帰校した直後のことである。東洋電化の建設という激務のため連日睡眠時間が三、四時間にすぎなかったという無理が大きな原因であったようである。

同窓会や入交産業にとっては申すまでもなく、高知県の産業界は得難い人材を失なった。

僅かに五六才という若さであった。告別式は高知市寿町の中教院で行なわれた。私はただ深々と頭を下げるのみであった。

『どうぜよ……うまくいきゆうかよ、同窓会の仕事は気長うせにゃあいかん、人はそれぞれ考え方が違うきにノー……焦りなよ…』こういって私の泣き言や不満を慰ぐさめたり励ましてくださった先生の言葉が今も耳に残っている。

森岡先生が本校を去られて六代校長松岡常雄、七代校長小松一夫、八代校長西本澄雄と三人の先生を中において九代目校長に私が着任したのは四一年四月である。以来五年有余、私は前任校長、西本先生の残した方針を受け継いで移転新築に明け暮れてきた。そうして天野須崎市長を頂点とする期成同盟会をはじめ多くの方々のご援助によって明年四月にはこれが実現の運びとなった。

今後何十年、何百年と続くであろう須崎工業高校の校史の中の一エポックとなることであろう。

本校の『糺町時代』は大きな使命を果して今その幕を閉じようとしている。

この『糺町時代』は中内先生に始まり歴代校長や教職員、父兄、有志、町民、市民に慈しまれ育てられてきたのである。発展的終幕とはいえ理窟では割り切れない淋しさと申し訳なさを禁ずることができない。

終りに謹んで三先生のご冥福を、心からお祈り申しあげてペンを擱く。

（四六・九・一〇）

祝創立三〇周年記念事業

二三・三　機械科第二種卒
（同窓会中京支部長）　岡林・県市

北海道の開拓者として、後世の人達にパイオニアースピリットとは〝これだ〟と実証した明治の先覚依田勉三の歌に、『益良夫が北海の地と、さだめしが風吹かばふけ、波立てばたて』と土佐っ子の血を激動させるように受け取った。

母校を卒業した昭和二三年三月、将に日本にとって暗雲低迷、前途に光明を見出すことが出来ない世相であった。「暗澹」とはこのことのために存在したと思われた。

GNP世界第二位にランクされている現状から考へるとき想像することさえ困難である。懐古派ではないが、当時の流れを断片的に挙げてみよう。

先づ、国際的な問題は、西に於ては、ニュールンベルグでナチスドイツの戦争犯罪が追及され、日本国土にては、東京市ケ谷台に極東軍事裁判が開かれ勝者が敗者を裁くという、屈辱にみちた光景をなげかけた。〝老兵は死なず、ただ消えさるのみ〟と名文句を残し英雄の末路のあわれさを人々に訴へた、〝ダグラスマックァーサー〟も、連合国最高司令官としてその権勢旭日昇天の如きものであった。巷に眼をてんずれば、焦土と化した国土世間、失業者は街にあふれ、食糧事情は今の東パキスタンの状況と変りない位であり、カストリ文化によって、かろうじて日々を送る有様でありました。

何んの取柄もない私は技術者としての生涯を貫き通うそうと決意し、故郷をあとにした。同郷の先輩をたよって九州の八代を訪れ、社会生活の第一歩を踏み出した。その後、技術を求めて各地に転々、時としては遊蕩三昧に耽ったこともあった。然し乍ら初志貫徹のため、土佐人としての誇りを胸に、悪戦苦闘の歳月を送った。異郷にあって、きづいたことは、特に私の交友関係だけかも知れませんが、明治維新前夜に不遇な最後を遂げた、坂本龍馬のことが話題になった時、土佐の代表的人物と激賞されたあと必ず、残念だが今の高知には、龍馬の片鱗もないといわれたことです。全く、頭にカチンと来る。その都度、冒頭に書いた歌の文句が走馬灯の様にめぐり、流行語ではないが『がんばらなくちゃあ』と決意を新たにいつとはなしに星霜二十を超えて、齢も不惑に達した次第です。

縁あって不二越工業株式会社の代表取締役として昭和四四年五月、就任したところ、鹿島という総務担当がおり、なかなかのファイトマンです。数奇な人生経験の持主で、彼の出身県である広島県人会や中央大学学員会等に参加して、利害を超越した友好活動の輪をひろげてゆく姿をまのあたりにし、母校の同窓会は一体どうなっているだろう?…卒業以来全く忘却の彼方に追いやった状態であり、不知恩と思われても仕方がないと、日増にその想いはつのるばかりであった。

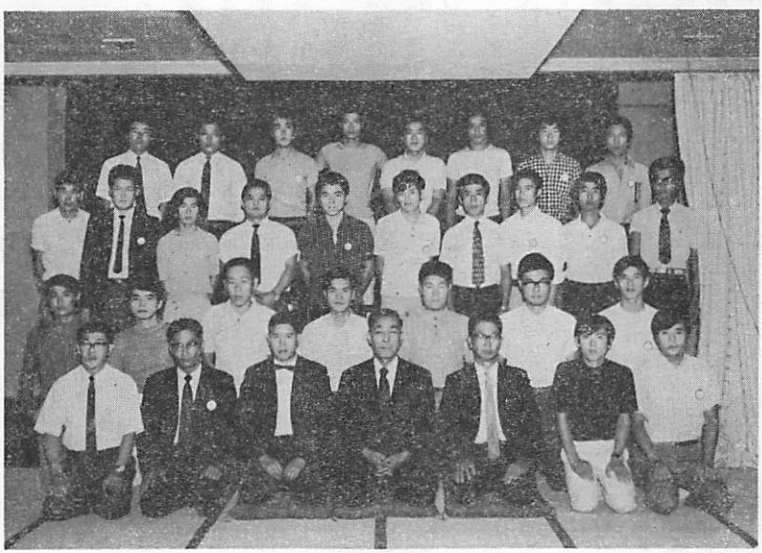
たまたま高知から出て来て名古屋に住んでおられる知人のご子息の結婚式に招待され、席上で母校の現校長沢本豊先生におめにかかり、先生より同窓会の現状をきき、中部県にも毎年卒業生が社会人として送りこまれている実状を思い、私は先づ名古屋市を中心として、県内は勿論、岐阜、三重の三県を基準に組織の構築を考えた。

昭和四五年一月所要で帰省した際、母校を訪れ、校長先生及び竹村先生（進路指導部長）と同窓会のことにつき種々ご意見を承り、同窓会名簿を頂戴してこの名簿を原点として、

中京地区同窓会結成へのスタートを切った。

労務担当をしている叔父の野瀬、総務担当の鹿島より組織づくりについての意見を参考に、卒業年度別、職域別と抽出し、文書或いは電話にて確認する作業を開始した。特に年代層を重視したのは、発起人となるべき年代の相違であったが僥幸というべきか、昭和二三年卒業で同じクラスにいた春田陽三君に連絡がとれたことであった。卒業以来二三年全く音信不通であった同窓生とめぐりあえたことは夢みる心地であった。勿論私の構想の凡てに全面的に賛成、ここに結成に向って驀進したというのが実情である。同窓会支部設立の趣意書、母校よりの挨拶状等の協力を得て、創立総会を昭和四五年八月九日（日）と定め、炎暑のなかをものともせず進めていった。電話では連絡がとれたのにも不拘、名宛人不明で返送さたる数々の文書、今だからこそ楽しいエピソードのなかに入りますが、当時一喜一憂の日日であった。

晴天の当日、立秋を前日に迎へたものの流るる汗をぬぐいつつ、母校より沢本校長、田辺同窓会長、田村同窓会事務局長を中京の地におむかへし、同窓生二三名相集い中京支部同窓会は誕生した。その後同年一一月八日に第一回の役員会を開き支部活動の具体的な活動方針を定め、越えて本年一月二四日には第二回の支部総会を挙行、二月には今春卒業されるなかから中京地区へ就職される同窓生及び父兄に対し中京支部の案内を申し上げ、卒業式当日には祝電を贈る等、きめこ



第３回支部総会（46. 8. 29）

前列左より　春田副支部長、岡林支部長、田辺同窓会長、沢本校長、竹村先生

まやかな活動をした。

母校創立三十周年記念事業の件につき、沢本校長来名、五月二八日緊急役員会を招集した。校長先生より記念事業推進状況をきき諸般の事情を検討し第三回総会日を八月二九日に定め、春田副支部長、野瀬事務局長の応援を得て、同窓生の職場を巡回訪問して同窓生のご賛同を得、所期の目的の第一段階を無事完遂できたことは望外の慶びである。

卒業生が相互に親睦を深め、融和をはかり日常の諸問題の解決のため援助を行なう等、協力して母校の隆盛をはかり併せて生活の向上に寄与するとの目的達成のため微力ではありますが懸命の努力を傾注する覚悟であります。

三〇年という年輪に刻みこまれた母校の栄光の歴史に、我々同窓生は英知と情熱をかたむけて、今後共、団結のスクラムをくずすことなく、幾多苦難の壁に遭遇しようとも、

自主独立の精神を
いだき責務を怠らず
真理と正義重んじて
前進していこう。

（不二越工業株式会社社長）

造船科四期生

二八・三
造船科卒
岡林幸保

現今なら信じられないことかも知れない。高等学校の増設を要望している教育に熱心な方なら不思議にも思い、またおどろきもするだろう。昭和二八年三月、須崎工業高校造船科を卒業したのは唯の五名である。その五人というのは、西内君、広見君、谷口君、渡辺君と私である。

我々が須崎工業高校に入学した年、即ち昭和二五年は何故かその理由は知らないが、本校にはその当時二科しかなかった、機械科と造船科のクラス分けをしなかった。入学生の数の少なかったことかも知れないが……。

それ故我々は高校一年生としての一年間は普通高校の学習課程にプラスアルファー（専門学科）の学習であったと言っても過言ではなかろう。二年生になる時になって初めて機械科志望者と造船科志望者のクラス分けがなされたのであった。その時、造船科志望者は何んと二人であった。もっともその当時は日本全国津々浦々にわたる造船所が現在の如く鋼船建造の好況はなく、現在でいう大手造船所の活況のみであり、造船科卒業者の就職は当然その方面にしぼられ就職率の低い狭き門としてのイメージが実業高校に学ぶ若人に少なか

れ意識されていたのかも知れない。実業高校に学んだ以上、卒業即就職が生徒として何にもまして誇りである。各種方面に就職出来る機械科の方が造船科に比して就職率が高く、かかることからあえて就職の狭き門の造船科への入科を志す者が少なかったかも知れない。

この志望者の少ない数を知った県教委？は須崎工業高校から造船科の廃止を持出したのであった。時の前田校長先生や造船科担任の諸先生、はたまた当時在任の先生方の深い理解とはげまして、せめて五名までならなんとか造船科を維持するようにしよう。だから君達（造船科志望の二人というのは現在高知市の永宝造船で営業部長としてその敏腕をふるい活躍している西内君と今だにうだつのあがらない私のことである）で一年生の時の級友から勧誘してみないかとのような話から西内君と私は一年生の時の級友にかけ合ってみた。その甲斐あってかどうか判らないが二人の志望者が出て来てくれたのであった。あと一人である。然しもう級友の中では造船科志望者を望めなかった。最早やこれまでかと西内君と二人であきらめかけていたとき須崎高校に学んでいる一生徒が転校して来るようでその者が造船科志望者らしいうわさを耳にし二人は人知れずよろこんだものであった。転校して来た彼は造船科に入り、これでやっと最少数の五名に達したのであった。転校して来た彼とは現在高知市の高知県造船㈱で工作課長として活躍している広見君である。こうして五名は卒業までの二年間をその当時の北校舎の西隅の教室で造船科の課程を学び、その喜び悲しみ、苦しみを共にわかち合ったのであった。思いおこせばなつかしいことであるが教える先生方にとっては張り合いのない教鞭の毎日ではなかったろうか。然し一八年の年月の経った今、須崎工業高校造船科を数多くの後輩が巣立ち日本の造船界にて活躍し、日本造船工業発展に貢献していることを現実にみるとき、あの時、西内君と二人でもし造船科志望をあきらめ、また諸先生方の理解と励ましがなかったならば須崎工業高校の造船科は、あるいは昭和二七年度卒業生をもって終止符を打ち今日に至らなかったかも知れないのではなかろうか。

それは時代の要求により再設されたかもしれないが、一つの転機をつないだということは確かである。このように回想するとき人に知れずともうれしくも思い、また誇りにも感ずるのは私一人ではなく西内君と二人との語り草にもなっているのであり、またあの時我々二人に協力してくれた広見君、谷口君、渡辺君と三名に対しても感謝しているのである。

一学級唯の五名であるその授業は、昔の寺子屋？にも似たものであったかも知れない。

恒例の校内クラスマッチは造船科一年生と合流して行なうという異例のものであり、人数を必要とする競技の時は一年

生の好意でもあったろう五名全員がレギュラーとして出場していたのであった。また一般教養科目は機械科の同僚と一諸にうけたのであった（もっとも一年生の時は全科目を一緒に学んだ）。そしてこの状態は三年を卒業するまで（二年間）続いたのであった。そのせいか我々同年卒業者は強いて機械科とか造船科であるとかいう区別的な感情は誰れもが持っていなかったと思う。そして機械、造船の両科を合せても四二名の人数では当然のことであろう。修学旅行にしても両科を合わせて二七、八名の参加であった。

造船科教室での思い出の一つであるのは我々が三年生になったとき、先輩からゆづってもらった、ものすごくでかい将棋の駒である。何時の頃の先輩が作っていてくれたものかは知らなかったがずいぶんと以前からあったようである。王将が一二糎角位は優にあった。この駒用の盤は製図用机に白墨で線を引いた机の広さ一杯のものであった。休み時間や放課後バン、バンと大きな音をたてながら勝負をしたものである。機械科の者も好きな者はよく勝負をしに遊びに来たものである。この駒も色々な事情から焼却してしまったが、今思うと先輩に申訳ないことをしたと感じている。

造船科実習の思い出としては門田先生に現図から型取りを教わり小さな木製ボートを作ったことである。このようにして我々五名は造船科生としての二年間を送ったのである。そして昭和二八年の暖かい春の日の訪づれんとする三月三日、今新らしく移り変らんとする須崎工高の学び舎を大きな希望？に胸をふくらませて諸先生方の激励と後輩達の拍手におくられて巣立っていったのである。

（今井造船株式会社設計部次長）

栄冠の陰に
―機工クラブ顧問としての思い出―

教諭　広瀬雄助

明治一六年「農学校通則」、一七年に「商業学校通則」が公布せられ、一応わが国産業教育の礎石がすえられて以来七〇周年、その記念式典が昭和二九年一一月一〇日、東京都日比谷公会堂において挙行せられた。当日は両陛下ご臨席のもとに、三五年以上産業教育に勤続された先生方、又産業教育に特に功労のあった方々の表彰、つづいて記念講演があり、わが国、産業教育の夜明けを祝福するにふさわしい式典が盛大に行なわれた。

その記念行事の一環として、全国高等学校の生徒作品展が、一一月九日から一四日まで東京三越本店の七階で開催せられ、本校からも機工クラブ製作による「三馬力舶用石油機

関」を出品、予備審査、会場審査と二回にわたる厳正な審査の結果、機械部門で第一位に選ばれ、通産大臣賞を受賞した。

又この年は本校相撲部も、一一月に行われた選抜高校相撲高知大会において、宿願の全国制覇の偉業をなしとげ、今日の相撲部に確固たる礎を築いた年でもあった。時を同じくして体育と文化、両面で全国的にその知名度をあげ、多くの人々から賞賛をうけたことは、本校三〇年の歩みの中で、忘れることの出来ない足跡を残した年ともいえるではなかろうか。

昭和二二年の学制改革により、新制高校として発足してからは、自主的な生徒会活動の下に、自づから各クラブの活動にも活気が見られるようになり、学年当初に新入生を対象としてのクラブ紹介、入部勧誘等もその当時から盛んに行われるようになった。

機工部もその例外でなく、それぞれの活動目標のもとで自己研鑽につとめ、三年に一度の文化祭の時などは機械科の原動力となって活躍してきた。日頃修得した、実習、実験、その外の専門教科で学び得たことを、現場で応用、再現して創造的能力を養い技能の向上につとめる。これが機工部の活動の目標であるが、同時にグループ活動を通じて「協調と責任」のある巾広い人間像を求めるための努力も欠かしてはなるまい。旋盤を使って丸棒を切削するにしても、如何にすれば、正確に、出来栄えよく、早く出来るか、創意工夫をし日常の練習を積重ねることによって、工作活動が行われるわけであるが、静よりは動、とでもいおうか、発動機のような動きのあるものを製作してみたいというのは人間として本能的な欲望ではないだろうか。

機工部で、石油機関を製作する以前、私たちは人力による小型船の推進機をつくったことがある。それは主として自転車の部品を利用したもので、ペダルを踏みチェインギヤーを廻し、後部の傘歯車に連結して二枚羽根のスクリューを回転、船を推進させる幼稚な方法であった。出来上ると早速、造船科で造られた五メートル余の木船に取付け、学校の西にある糺の池で試運転を行った。着想が奇抜であるものだけに当日は、地域の人たちも見物に来るなど池の周辺は賑わいを呈した。多勢の人が見守る中で、最初にペダルを踏んだ時の気持は、期待と不安でいっぱいであったが回転をあげて加速すると、二挺櫓を使って漕ぐよりも速く、その点ではまづまづの成功であった。と同時に水の抵抗がいかに強いものであるかを改めて痛感した。

はずみ車をさらに大きくして、惰性を増大さすとか、回転部の円滑方法など、まだまだ考慮すべき点もあったが、所詮は人力によるものとその後は改良を中止した。このニュース

を高知日報（当時の地方新聞）が記事としてとり上げ写真入りで報導され人気を呼んだ。それから数ケ月して、これと同型式の機械が名古屋で製作され、長良川で実用化されたことを新聞で知らされた。それは私達のつくったものより数倍も性能的にも優れたものであったと思うが、着想においても、又時期からいっても、あまりの遇然さに唖然とさせられた。余談であるが、この試運転中に、スクリューの波に驚いたものか、池のボラが数十尾進行する舟の中に飛び込んできて、思はぬ収獲にありついた。

こうしたことが契機となって、機工部で舶用石油機関を製作することになった。戦前、高知工業では舶用焼玉機関を製作して、海運に、又漁業の振興に貢献したという話を聞かされていたが、高知工業高校の場合は実習を中心として製作する、すなわち生産実習であったようである。だがこれをクラブ活動として始めた場合は、その製作工程においても多くの困難が予想され、機械科内で相談した結果、試みに他社で製作しているものをつくらしてもらい、その上可能であれば本校独自の型式に改良してゆく方針で出発した。

当時、県下の小型機械船といえば殆んどがガソリン機関か、石油機関を使用しており現在のようにディーゼル機関万能の時代ではなかった。それだけに県内の各鉄工所でも、ガソリン機関や、石油機関を製産していたが、中でも安芸市の笠井鉄工所、高知市の山中鉄工所などの機械が評判も良く、全盛をきわめていたようである。

最初の足がかりとして、私は山中鉄工所を訪づれ事情を話すと、学校でやることであれば協力しようと、心良く承諾していただき木型を借用さしてもらった。当時はまだ本校で鋳鉄の溶解を行っていなかったので高知市の鋳造工場に依頼し、軽合金や砲金鋳物等は、渋谷先生のご指導を得て学校で鋳造することにした。それまでガソリン機関の模型などを製作していた部員も、いよいよ実物の製作となると全員張切り、それぞれの分掌のもとで活躍したものであった。

だがはじめての試みだけに仲々当初の計画通り作業は進行せず、その都度、山中鉄工所に出向いて指導をしていただいた。生産現場でその作業工程を見学すると「ああ、この部分はこうすればよいのか」と納得出来ることも多く「百聞は一見にしかず」の諺どうり得るところがあった。学校での製作過程においては、市販のものを買えば安く購入出来るボールトやナットの類まで部費の節約と、工作練習を積重ねる意味で出来る限り部員達の手でつくるように指導した。旋盤をはじめ諸機械の殆んどが、ベルト掛けで、精度においても現在とくらべると問題にならない状態で、ネヂ一個切るのにもその都度、替歯車を取替えるなど不便さがあった。だが全員、これの完成の日を追いながら汗と油にまみれて頑張ったもの

である。

物事に熱中して、他事にあまりかまはない人のことを世間ではよく『あの男はなになにの虫だ』などと表現するが、部員一同がこの『虫』的存在となって全力を傾注し、二八年に二・五馬力石油機関第一号機の完成を見ることが出来たのである。試運転で最初の爆発音を聞いた時の全員の喜び、と同時に、やれば出来るという自信と、勤労の尊さをこの一瞬にして知らされた。だがこうして製作された機械も、鋳物代やその他の材料費を支払うために売却しなければならなかった。安価で、責任保障という点で地域の漁業関係者から製作を依頼されたが、クラブ活動の範囲では、これ等の要望に応じて量産することも出来ず二・五馬力の製作も三台で中止をし、その後は本校工作機械で出来得る最大限の機関、三馬力石油機関の製作に切替えることとなった。

その間、キャブレター、クラッチ、など改良を行って機工部独自の機関をつくるための努力を続けてきたのである。丁度その頃、本校五代目校長であられた森岡貞篤先生から、産業教育七〇年の生徒作品に製作し出品してみたら、とのお話しがあり機械科の先生方、機工部員とも相談の結果、二九年九月から本格的に製作に取組んだのである。

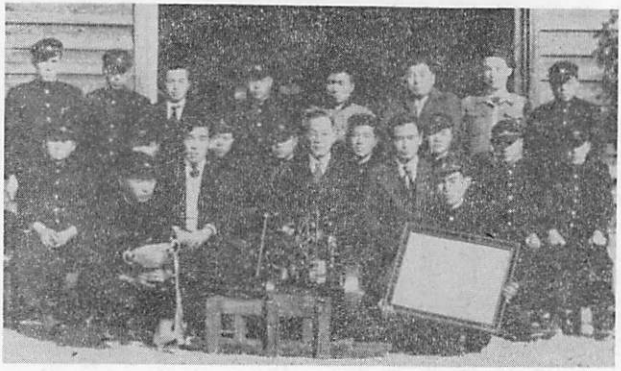
機工部々長、横山英昭君（三年）を中心に三年生、二年生の部員一一名、それに機械科長、田村隆徳先生はじめ機械科の先生方の側面的なご指導を得て、この作品展に臨んだのであるが、従来製作してきた二・五馬力と異り全体の構造が大きいために、機械加工の場合、予想外の難事に直面するなど限られた日程の中での作業は生やさしいものではなかった。その上学校行事の多い二学期とあって、時には日曜、休日も返上しこれまでの経験を活かして頑張った。一〇月末には完成さして一一月五日までに、予備審査会場である都立工芸高校に必着させなければならない。それだけに一〇月下旬の中間テストの発表から試験終了までの約一〇日間の活動中止期間は大きな痛手であった。一〇月末の残された数日間は徹夜をしたこともあったが、それでも塗装に要する日程が無く、鋳肌に直接黒のラッカーで塗装を行ない、速成の機械台に取付けて発送の運びとなった。

だが運の悪いことは重なるもので、季節はずれの台風のため発送までに更に二、三日駅で留められた。その間、校長先生から延着理由について打電してもらうなど、あわただしい毎日であった。

機械の東京に到着する頃を見はからって私も上京、その足で都立工芸高校を訪づれ、延着の事情を説明し期日に遅れたことの不手際を詫びた。そしてすでに到着していた、石油機関を体育館の一隅で見た時はいい知れぬ安堵感と、同時にいよいよ作品展のスタート、ラインに並んだという強い緊迫感

を覚えた。荷造りをとくと早速四、五人の審査員によって審査が始められ、その間製作過程における問題点など色々と質問をされ、最後に運転をするようにいわれた。

一振り一発を心に念じ、始動コックにガソリンを注入しホイルを振れば、バンバンという排気音が屋内にこだまして、低速、高速と機関は順調に運転され、その規則正しい爆発音は機工部員全員の今日までの努力を讃美するかのごとく、私の胸に郷き感無量であった。



（中央森岡校長先生）

展示会場にあてられた、日本橋三越本店は、都内でも中心地にある上に、全国高校生徒の作品展とあって連日、一般の人や学生で賑わい大盛況であった。出品総点数は三百余点、工業高校で出品した学校は六七校、出品点数一二四点、その中で機械科関係は二三点であった。

こびの喜び

受賞

各校の主な出品機械は、都立北豊島工業高校の卓上ボール盤、大阪府立淀川工業高校の農業用発動機、長野県立長野工業高校の卓上旋盤等、いづれも、外見、精度、共にメーカー品に劣らぬ優れた作品ばかりで、生徒作品展というよりはむしろ産業教育博覧会といった感じさえ受けた。それらの作品にまじって、本校機工部作品の舶用三馬力石油機関も展示され厳密な会場審査の末に、機械部門で第一位に選ばれ、黒光りする機体に「金賞」の二文字が貼られた時の感激は筆舌につくし難いものがあった。他校にくらべて、只の一点しか出品しなかった本校の作品が全体でも数少ない金賞の栄誉を獲得したことは、まさに一発必中の悲願が成就したともいえよう。

須崎工に通産大臣賞

船用内燃機関、東京で好評

【東京発】第四回工業高校、産業教育七十周年記念産業会（後援日本機械工業連盟、関機中）に出品した三馬力船用内燃機関は、特別な技術が高く評価され「通産大臣賞」の栄光を担った。会場は連日押すな押すなの関内機関は特に学生工業関係者の間に大人気を呼んでいる。

写真は通産大臣賞に輝く須崎工高製作の三馬力船用内燃機関

当時の朝日新聞記事

では、この金賞は何によって得られたか、関係者の声や、又私達の判断を綜合して考えられたことは、

一、作品全体に生徒の作品らしい素朴さが見られた。

二、比較的安い経費で実用性がある。

三、郷土の特色が活かされていた。

四、出品期日が遅れながらも、最後までやりとげた努力と誠実さが認められた。

以上のような事柄が今回の受賞の要因であったようである。

一一月一〇日、日比谷公会堂、記念式典の場で、機械部門第一位、通産大臣賞、受賞の報に接した時は、長く苦しかった昨日までの努力が大きく報いられた感激に胸も一杯で、ただ一刻も早く帰校して部員一同にこの喜びを分ち合いたい衝動にかたられた。

校長先生にこの旨を打電し、即刻帰校の途についた。当初の予定では到底入賞など予想もしていなかっただけに、作品は展示会場で売却し折返し帰校する予定であったのが、この度の入賞で変更され上京以来、一〇日近くも在京したため懐中は乏しくなったが、何物にも替え難い貴重なものを手にした喜びで胸は一ぱいであった。

ふり返ってみれば辛苦の多かった、数ケ月間であったが、この栄誉へのチャンスと原動力を、機工部に与えてくださった森岡貞篤校長先生の温情ある、ご指導とご鞭撻、又機械科諸先生方のご理解と、側面的ご援助に改めて心から感謝するものである。

以来一七年、産業教育の振興も日進月歩への歩みをつづけて来た。実験、実習等の設備も年と共に充実され今や地域社会との格差は縮少されたが、教育の多様化の問題など、今日の産業教育に大きな課題を投げかけている。

経済成長によって生じたともいわれる「断絶」という現代用語が巷でよく聞かれるが、何事を行うにも、グループの一人一人が結束し、思考し、自信と信念を以って事に望めば、充分といえない機械設備、又不利な条件があろうとも、所期の成果は挙げ得るものと確信するものである。

当時を回想しながら、現在の自分をふり返った時何かと反省させられる今日である。

（四六・九・二）

女生徒と共に

旧職員　宮尾常子

「来春も美しい花を咲かせて下さいね。」台風一九号、二三号の去った後、落葉を掃く手をとめて、須崎工業高校から分株して戴いた、大事な紫木蓮の木に囁いた。毎春古代紫の花が、私の目を喜ばすのみでなく、一昔前の須崎工業高校の

思い出を、種々語りかけてくれるのです。

須崎工業高校は、開校三〇周年を迎え、大発展をとげ、来春は、多ノ郷和佐田の、広大な新校舎へ移転する予定とのこと。おめでとうございます。

光陰矢の如し！　諸行無常！　言いふるされた文句が思い浮かぶ。

現在の学校所在地は、私が子供の頃には、逆華の花束を作り、桑の実で口を紫色に染めたり、麦や稲の中の小路を、草笛を吹き、蜻蛉等を追っかけたり、牛舎へ行ったりした、田畑だったのです。

そこに立派な工業学校ができ、私の家の近隣から、生徒が通学するようになったのは、私が東京に勉学に行っている頃でした。明治時代に、佐川に中学校が移転後、須崎には、半世紀も、中等学校がなかったのです。「ああ、やっと、中等学校が出来たなあ！」と、とても嬉しかったのです。

然し、男子の学校ですから、第二次世界大戦後、私が教師になって、勤務する迄、工業学校へ行ったのは、故橋本清美先生の、ご立派な標本を見せていただきに行った時だけでした。

私が教師として、工業高校へ勤務したのは、昭和二九年の四月から、三七年三月迄の満八年間でした。

昭和二七年に電気通信科ができ、翌年は女生徒が一名入学して、新聞にも報道され、その影響でか、翌二九年には、女生徒が九名も入学し、私も勤務するようになったのです。

その後、年々、女生徒も女先生も増加し、華道・茶道等、女性用のクラブ等もできました。

私は、電気通信科の、一組を半分に分けたH・Rを、木岡先生と共に持ち、毎年行なう陸上大会のすばらしさや、三年に一回の立派な文化祭等に、驚嘆しました。

進学より就職が多い学校だったので、開拓期の電気通信科は、有名な大会社等へ、一名でも多く就職するように、教師も生徒も、一生懸命でした。

その頃の生徒も、今では中年になり、自営や官公庁、会社等の、中堅クラスです。誰々が外国へ派遣されたとか、立派になった消息を聞くたびに、嬉し涙が流れます。小学校の教師であったら、彼等、彼女等の子供を、自分の孫のような気持で、教えていたかも知れないなあ！と思います。

学校内の発展もめざましく、講堂を仮教室に区切って、授業をしているうちに、電気通信科、造船科の新校舎も落成しました。養護の先生がこられて、保健室ができ、教務に女事務員がはいり、購買部、食堂、図書室等もできました。

その上、昭和三五年には、化学工業科ができて、女生徒が、電気通信科と化学工業科の二科に入学しだして、少し複雑になってきました。

然し、最近は、電気通信科は電気科になり、化学工業科と共に、一名の女生徒も在学してないのは、残念な事だと思います。せめて、「家庭工業科」とでもいう科ができて、以前のように、女生徒がいたらいいのに、と思います。

名校長であられた、故森岡先生を始めとして、思い出は際限がなく、書きつくせないので、これぐらいにします。

最後に、壁にかけた、古ぼけた、須工の人文字のはいった、鳥瞰写真を見ながら、須崎の教育界の為に、須崎工業高校が、さらに、大発展をとげられるよう、心からお祈りして、三〇周年のお祝辞と致します。

（須崎高等学校久礼分校教諭）

須崎工業と私

旧職員　中沢恒雄

高知県立須崎工業高校が発足して、ここに三〇周年を迎えるにあたりまして三〇周年記念誌を編集されますことは、誠に喜ごばしいことであり、意義深いこととおよろこび申上げます。

私が須崎工業高校と関係をもったのは、昭和二七年四月であります。当時二四才、教師の経験の全く無い私が、未知の土地須崎、未知の学校須崎工業に、自分のような不勉強な者でも教師が勤まるものかという不安を持ちながら赴任したことです。

思い出は約二〇年以前ですが、私にはこの頃の記憶が生涯忘れ得ないであろう思い出としてよみがえってきます。電気通信科第一期生のホーム主任を山田良幹先生と共に受け持ち、専門科目一〇数時間を担当しました。未知と不安のうちに約一ケ月……教師としての生きがいはどこにあるのか…。山あおく、澄み切った空のもと、この和やかな学園、純真で親しみ深い生徒たち、好意ある諸先輩先生がたの御指導、私はこの先生がたのご期待にこたえ、この生徒達の将来を守り育くまなければならないということを初めて知りました。電気通信科第一期生、秋山君、猪野君、江渕君……横畠君、和田君以上四〇名。この名簿と若々しい顔は未だに私の脳裡の片隅に焼きついて消えません。ほんとうに純真でほんとうに親しみと信頼の持てる皆さん、皆さんとの交わりは深くうちとけた中で学校行事に毎日の授業に共にはげみ、私は色々の面で生徒の皆さんから教えられたことでした。私の教員生活の中で曲折もあり、色々の困難もあったのですが私はいつもこの当時の心境を思い起こし、教師としてのあり方、教育における生徒との信頼関係について反省させられ教師として力づけられることを感じます。

私の在職期間は僅か八年、その後時代の移りと共に若い世代の考え方もだいぶんドライに変化したように感じますが、私は今の時代にも若い人が目的意識を持ち人生を真面目に生きて行って欲しいと思います。人生を真面目に見つめ、自己を知り自己の人生に到達して欲しいと思います。

電通科第一期生卒業当時進路については、業界の不況もありましたが、全く進路指導の経験のない私が、教え子の皆さんの将来性を充分に生かすことのできる職場にすいせんできなかった点は、誠に自責の念に堪えない次第であります。しかしながら、皆さんは夫々の自己啓発と自己経験を積まれ、夫々の立場で活躍せられていることを聞き及ぶにつけ、大へん嬉しく思っております。

卒業生の皆さんはどうか同窓先輩諸氏とのつながりを持ち、伝統三〇年の母校の歴史を誇りとし職場において困難に屈すること無く母校の名声を益々発展されるよう、頑張って下さい。創立三〇年の伝統は卒業生の皆さんの母校に対する愛情によって更に前進するものと信じております。私も陰ながら南国市高知東工業高校から須崎工業高校の更に発展せられん事を祈っております。

（東工業高校教諭）

化学工業科に学んで

三七・三
化学工業科卒　橋田　泰

私が新設された化学工業科の一期生として入学したのは、昭和三四年の四月であったからもう一二年以上も昔のことになる。入学当時に私にどの程度の化学に対する認識があったかどうかは別として、化学のエキスパートであった。当時の小松校長をはじめ、田所、徳弘、矢野、岡林の各先生の指導でプロフェッショナルとしての一段階を三年間すごしたのである。

以下私の短期間であったが、三年間の思い出を断片的にとらえてみたい。私の主観的な見解に陥る点があると思うが……。①親友のこと。②新設の化学工業科のこと。③現在とのかかわりについて述べてみよう。

① 親友のこと（悪友のこと）

私たちのクラスは典チャン（唯一の女生徒）こと、谷岡さんを含めて四五名が入学した。いろんな事情のため共に卒業したのは四〇名であったが、実によくまとまっていたことを強調しておきたい。遊びに行く時も、サボル時も、パチンコ屋に行く時も、そしてタバコをのんで停学になった時も、必ず集団で？あったことをみても……。

私も例にもれず、友人四人と愛媛県境の山に登った時のこと、二～三日サボッタことがあった。たしか三年生の前半の時だったような記憶がある。私達の場合は日頃の行ないがよかったか？　指導部に発見されたのが（不正が）初めてであったせいか、幸いなことに訓戒処分という軽いものであったが……。とにかくよく遊んだ。花札、パチンコ、タバコをのむのもよく流行した。卒業を間近にひかえて、教室の天井うらでタバコをのんでいるのがバレて停学になり、卒業が四日程延期になるなど、なかなか通常の人にはできないマヌケなことをしたのもいた。今ではユーモラスにみちたことだと笑っていることができるがなかなか当時は大変なものだった。

② 新設の化学工業科のこと。

新設当時は化学の実験室も、器具も現在のような建物も機器類もない状態が続いた。しかしこういう中で最初の実験は陽イオンの定性分析であった。硫化水素やアンモニアの臭気に苦しみ、液と液との混合だけで気体が発生したり、色がついたり、時には沈澱したりする化学反応は私に驚きとともに深い未知のものに対する追求心とをうえつけた。たしかにそういう見地からすれば、分析装置や設備が整っていなかったのはより基本的操作に忠実に従うことを教えてくれたり、化学反応式を深く理解するのに大きく役立った。有機合成実験、樹脂の製造、化学工学の単位操作の実験、また化学クラブは須崎湾の海水中の塩素の分析等、いろんなことを経験した。

卒業して、造船所の研究室で、化学工学的な仕事をしたり、塗料の実験をしたりしながら現在の船舶塗装に従事するようになって、この学校時代の実験が大きく役立っている。

③ 現在とのかかわりについて。

卒業後造船所に入社して感じたことだが、自己の持っている能力はいつでも引きだせるようにしておくことが大切であるということである。仕事について人は化学の重要性を認識しなかったが、実際は非常に重要視され、また必要とされていることである。

私の今の本職は船舶塗装である。船の防蝕と防汚を塗料によって施工するのである。船の腐蝕防止は電気化学、物理化学の分野だ。学校時代の基礎教育は実に役立っている。化学反応に忠実であったことが、現在をしていろんなことに応用できる。

私が化学を学んだせいで職場のなかでいろんなことで相談を受ける。適切な回答をするためには、五〇パーセント程度の理解力でも自信を持って答えることである。

企業でも公害追放のために種々の対策を講じる義務があることが政令に定められたことによって、私は公害防止管理者としての仕事にとりくむように指示されている。

私は自分が化学を学んだことに自信を持っている。自分の仕事に関係することに対して、又自己のプロとしての認識を改めるために積極的に物事に対処したい。

以上創立三〇周年に当り、私の現在の生活の基礎となった化学工業科での思い出を述べてみた。これからも現在与えられている仕事の中で私の役割をよく認識し、その道のエキスパートとしての働きができるように誠実に物事に対処してゆきたい。

（川崎重工業株式会社坂出工場）

須工と私

第八代校長　西本澄雄

私が須工にごやっかいになったのは、三九年度と四〇年度の二か年で、日本全国が東京オリンピックにわきかえっていた頃でした。その頃学校全体は着実な充実期に入っていたようでしたが、私は着任後その学校敷地があまりにも狭いのをみて、どこか適地を探し、すくなくとも一万坪の校地を持つ学校として移転したいものだと考え、PTAその他に連絡し実現に向って画策を開始した。以来八か年、来春多ノ郷和佐田の高台に移転できると聞き、喜びに耐えない。そしてここまでことを運んでくださった多くの方々に厚い感謝の気持を捧げたい。

(一) 黄　塵

須工のグランドはさほど広くないが、うまく二百メートルトラックがひかれており、陸上競技にはよく利用されていた。しかし残念なことには校地の北西の隅につくられていたので、冬期季節風の荒れる頃は、秒速一五メートルをこえる北西風が吹きすさび、グランドの表土を巻きあげ猛烈な勢で教室に吹き付ける。硝子戸をいくらかたく閉めておいても、グラウンドに面した室内は黄土でまっ黄になる。化学分析室などとても使える状態ではなかった。須崎市付近の土は、岩が風化した土であるので飛散しやすい。黄塵は校舎を越え、東につらなる住宅街をおそい、天日もために暗くなるほどだった。公害を無遠慮に騒ぎたてる昨今では、校長さんもさぞ肩身のせまいことだろう。港の近くにあった専売公社のおせわで浸水して食用にならなくなった食塩を何万円も払い下げてもらい、グラウンドの表土にすきこみ、湿気による防塵も試みた。しかしなにぶんにも広いグラウンドだ、なかなか成果があがらなかった。結局黄塵と雨水によって、表土は毎年数万円の補充を必要とし、たいへんなことであった。

(二) ダチュラの花

須工正門西わきにヒマラヤシーダの大樹が植わっている。ある日数人の先生方がそこに集まっている。何だろうと思っ

て行ってみた。よく見ると、そのヒマラヤシーダの葉っぱに無数の毛虫がついている。先生方はそれを退治しているのだ。作業服と作業帽に身をかため、長い竹ざおに噴霧器をつけ、殺虫剤を撒布している。私はその毛虫にも驚いたが、こんなどえらい仕事を先生達が進んでやろうとする熱意におどろいてしまった。校長の私が命じたものでも、頼んだものでもない。須工の先生方は仕事分担の中に環境整備という役割を持っていたが、環境整備とはこれほどまで徹底したものだとは考えてもみなかった。自分さえよかったらよい、学校の庭木に毛虫がつこうがつくまいが、見て見ぬふりをする時代になってきた。しかし須工の先生方には教育者としての誠意と使命感が厳然として生きつづけていると思い嬉しくてたまらない。私は多感な若者に安らぎをあたえてくれる緑を学校中に一ぱいにしたかったが、六千坪そこそこの校地へ、校舎群が乱立している現実は、庭木などにとれる余地はなかった。土俵の西にトイレがある。トイレの南側はちょっとした花畠が設けられていて、いろんな草花や花木が植わっていた。それらの中に、葉の広い背丈一メートル半ぐらいの草木が毎年芽えてきていた。一年生草だろう。八月頃学校が夏休みに入った頃、その草は白い大きな花をつける。筒部の長い漏斗状で、花先がわずかに五裂している。ちょうどトランペットのようだ。一五センチもあり、美しいので、大柄なのと優麗なのに誰も一度はふりむくようである。しかしこの花の名を知った人はいなかった。その後鹿児島県に旅した時、ふとこの花を見つけ、名も知ることができた。ダチュラと呼ぶらしい。熱帯アジア原産のナス科植物。日本名は曼陀羅華、ちょうせんあさがおとも言うらしい。果実にはトゲがあり薬用になると。しかしその美しい花のため、世人はエンゼル・トランペットという名で讃えている。新しい高台の校地にも、エンゼル・トランペットの白い姿を見出させてもらいたい。

(三) キュポラの唄

着任した年の初夏の頃、機械科から「今日、須工最初のキュポラをふかすから見に来てほしい」と通知があった。早速とんで行ってみた。私は元来物理屋であるが、理論を追うより、応用面に興味を持っていた。新築の鋳造工場の隅のキュポラに火が入れられている。キュポラとは溶銑炉のことで、ここで銑鉄を溶かし『ゆ』にして型に流しこむ実習をやっている。炉に材料を補うためかほこりがもうもうと立ちこめ、先生も生徒もまっ黒くなっている。しかし皆とても嬉しそうである。生徒に感想を聞いてみると「学校で鉄が溶かせるなんて思ってもみなかった。せいぜいアルミぐらいかと思っていたのに」とその目が輝いていた。

鋳造や鍛造には当然火をつかう。それだけでなく機械科に

は火を使うことが多い。だから機械科の教育として、火を大切にし、火をあがめる一連のしつけ教育をやる。火入れ祭とか、フイゴ祭とか火の神をまつる行事が多く存在するのはこのためだと思う。須工でも、度々催されけいけんな気持で安全を祈りたま串をささげたことだった。いつまでも須工のこの精神がつづいてほしいものだ。

（高知県教育センター所長）

思いつくままに

三一・三
電気通信科卒　矢野雅也

私は、昭和二八年の入学です。そもそも、入学の動機は、地の利もありますが、当時の国語担当教師でありました、坂本先生に由るものが大きいと思います。といいますのは、現在も、各中学に出掛けて行き、須工の紹介をしているかどうか知りませんが、中学三年の時『卒業すれば是非我が須工へ』という説明を先生が身振り手振りの非常な熱演でおやりになったのを見て私の志願が決定したのです。

私は、まだ発足して間もない電気通信科に入学致しました。この科には、母校の創立以来最初の女性、長山恵美子さんが入学されました。そういう意味では、私は非常に記念すべき時期に入学したと思っております。彼女は、三年間私達男性の中に唯一人よくぞ頑張ったと、感心致しました。

私の在学当時は相撲の全盛期で、東北の三本木大会では、個人、団体の優勝等、田原先生の遠征報告が今も目に浮んできます。

私達のクラスの中に随分遠くから自転車通学していた同僚がいます。一度彼の家へ行き驚いたのは、その道程です。山の合間のトロッコ道を何里も奥に入って行くのです。途中トロッコの鉄橋があって、これを雨の日は傘をさしての自転車通学は、もう軽業です。その彼が、賭で生菓子を二〇個食ったのも今は懐しい思い出です。

当時の校長先生は故人となられた森岡貞篤先生です。非常に温厚な、人望の厚い、良い方でした。就職の時期には田村隆徳先生とご一緒に、自ら会社をかけまわり、非常な努力をされました。私は富士通に入社致しましたがこれもひとえに先生のお蔭であると思っております。先生は私達に入社の模疑面接をしてくれました。当時富士通といいましても現在の様に電子計算機で名前の売れているわけでもありません。すっかり富士電機と間違って受け答をし、先生を苦笑させたことを覚えております。入社が決りますと大そう喜こんでくださって、先生のお宅に招待されてこれからの会社生活の心構えなど教えていただき、ただただ、頭の下る思いでした。入

社致しまして、ある機会に、勤労部長にお会い致しましたが、私が須工出身であることを覚えておられて、君の学校の校長先生はご立派な方だと感銘深く話しておりました。

田村隆徳先生は、機械工学の講師として、教えを受けました。先生は、須工創立以来教鞭を取られ、私の従兄矢野亀雄兄（機械科二種一期生）も教えを受けたそうです。後になって、高知東工業高校の教頭をされた時、生徒の断髪実施に対し自ら、率先して丸頭になられたそうで、その教育者態度には感銘を受けました。私は地元ですのでまだ幼児の時のこと、当時の須工生が、グライダーで方向をあやまり、私の家のすぐ前の海に着水し、着服をかわかすための、薪を集めてやったこともあります。又須工火災の時は、新荘川に魚とりに行き、貯水池のある山越しに猛火につつまれた校舎を見たものでした。

眼鏡橋を渡り、しばらく行って左に折れる。だらだらと、ゆるい坂を下り通用門を入ると前に機械実習工場、その横が講堂、そしてその横が本館と、懐しく思い出されますが、この風景も、これから見られなくなると思うとよけい懐かしさが、こみ上げて来ます。須工は、小人数の学校ですが、山椒は小粒でもピリリと辛い、のようにまとまりのある、よい学校だと自負しております。どうかこれからも、母校が発展されますよう祈っております。

（富士通ＫＫ機械設計課）

進路指導の今昔

教諭　竹村義典

昔は職業指導といっており、その殆んどが就職斡旋であり、進学面では岡本昭三先生（昭二二～昭二五、現高知高専助教授）のご指導で京都大、大阪大等に進んだ者があり、現在では理学博士、京都大助教授、大阪教育大助教授、明石高専教授等になられた卒業生が居ます。そして最近になって、進学者が少しづつ増してきていますが、昼間部へ入学するものは数名の状態です。

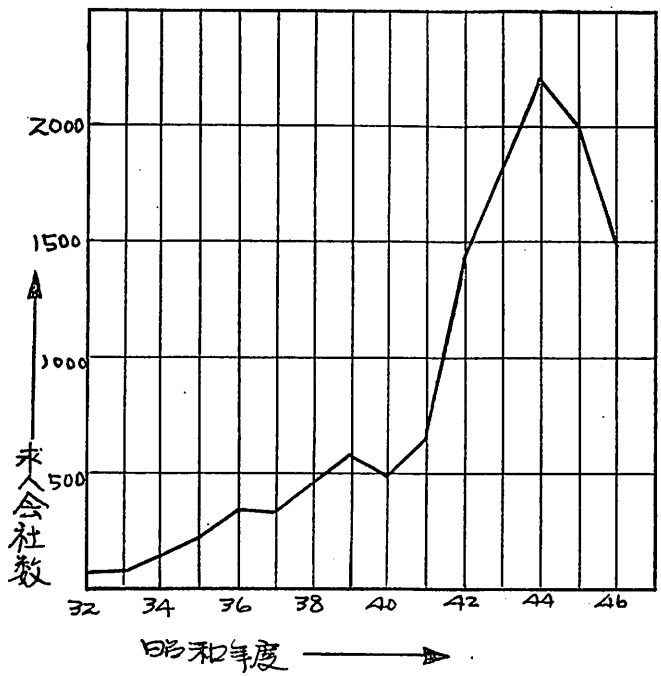
開校当初は、地域の上級学校のようなもので当時の卒業生は種々の職業で成功されており、須崎工業コンツェルンが出来る位ですが、終戦後に須崎高校の誕生と共に段々と工業学校らしく変化してきました。そしてその頃から田村隆徳先生の苦労が始まります。

昭和二七年、故森岡貞篤校長先生が高知工業より赴任され、電気通信科の増設もあり何とか全国レベルの工業高校へと、教職員生徒一丸となっての努力が続けられました。そして電通科一回生を送り出すに当り、本格的な職場開拓が田村先生を中心に進みました。

本校は、職安法三三条の二による無料職業紹介所の一つで

すが、無料とはいかず、予算も計上し、阪神地方へ僅かなコネを頼りに年間数回、求人開拓に廻ったものです。宿は何時も一泊二〇〇円也の県労務連絡事務所二階か、近くの「なかの」旅館でした。この『なかの』旅館は、奥さんが非常に親切な方で、その頃から現在迄ずーっとご厄介になっており、職場探しの作戦本部のようなものでした。夜は情報を交換し、地図を広げて明日の訪問径路を練り、朝六時過には宿を出て、大阪駅売店でパンと牛乳、遠くの会社の始業時に入門出来るようにし、段々と大阪市中央部へ、昼休み時間にまた大きく移動するといった具合。それで当時は訪問先で何人かの推薦割当をもらえば、大喜びですぐ学校へ連絡、というところですがそれがなかなかで、鰹節や珊瑚も入った鞄をぶら下げてテクテク歩く足は重かったと、当時の日記帳にも記されてますが、記憶は忘れられません。ある時鹿児島県の先生が生徒を数名連れて歩かれているのに出会った時は、何ともいいようのない気持でした。

故森岡校長先生も度々、会社訪問に出られ時には二週間に及ぶことさえありました。先生が帰校されてのお話で思い出されるのは、川崎製鉄へ行かれた時、人事課長より『暑い中をわざわざご苦労様です。先般高卒生より社員への登用試験を実施し、一〇名採用したところ須崎工業が三名共合格しました。新しく採用する時は、真先に求人申込み致します』といわれ、非常に嬉しかったと……また東亜特殊KKが高利金融をやっていた保全経済会倒産の為、債権者より差押えされ入社二ケ月たらずで解雇された卒業生を慰めに行かれた時、タバコをすすめたところ『今私達はタバコなど吸える境遇で



はなく、折角上阪してきたからお互に力を合せて頑張るつもりです』との決意を聞き、感心して話されましたが、その時の彼等は夫々自分で開拓した職場で重要なポストにあり、母校の事には種々と心配してくれるグループです。

昭和三三年までは、求人会社数は五〇～八〇社で卒業生の数に足らぬ位で、グラフ用紙の横欄に生徒名、竪欄に会社名を書き、竪横組合せのパズル式処理で事務がすんでいましたが昭和三五年から別表の如く多くなったので、現在のような帳簿式処理法に移行しました。この頃から前田隆一先生（現在高知東工業高校勤務）を中心に、会社別カード及びファイル整理がされ、今では全国的に紹介される位の資料が整っています。

然し就職先の決定は、昭和四〇年を最低（合格率三五％）に、その前後は採用合格率は五〇％前後で苦しい時代でした。目的の会社に採用されるには、先づ求人指定校として推薦割当をもらわなければならず、書類を提出すると審査で篩にかけられ、パスすれば一次学科試験、その次の関門が面接、身体検査、一方で身許調べが行われ、やっと採用内定。入社前の検査にパスして採用が決るという次第です。一人生徒の受験回数の記録には八回というのもあります。

このような状態も昭和四二年から急に好転し、合格率七〇％、翌年からは逆に求人辞退に苦労するようになり、昼間は来訪者の応待で暮れ、求人書類の整理に夜おそくまでかかる日が続き、昭和四五年六月には一日の来訪会社数、三八社を記録しました。このような状態は他の学校でも問題となり、遂に県では就職対策連絡協議会の発足となり、昭和四六年度より事業所の学校訪問禁止、学校の事業所訪問も原則的に禁止等の方策がとられることとなったわけです。

現在の進路指導室

栄枯盛衰の言葉の如く、急成長した日本経済界も、段々と米国の経済攻勢を受け、求人カーブが下降し始め、遂に昭和四六年八月一五日のニクソン声明により

ドルショックの原爆投下。波紋は直ちに求人にも広がり、日立製作所を皮切りに次々と求人取消となり、現在迄に約五〇社に及んでいます。まだまだ数的には微々たるものですが、質的には影響が大きいわけで、私共進指部担当者として、卒業年度の景気により、就職斡旋に何ともならない弱い一面をもっていることは、不況の時に卒業される者達には気の毒でならない思いがします。然し長い人生に於ては、苦しい時代にしっかりした考えのもとに、試練を経て就職先を決定した者の方が幸福が多いようにも思われます。

皆様のご成功とご発展を祈ります。

（進路指導部部長）

創立三〇周年記念に寄せて

三四・三
電気通信科卒　川上忠男

このたび母校が創立三〇年を迎えたことは同窓生の一人といたしましてご同慶の念にたえません。母校の今日在るは一重に関係者各位がその時代におけるそれぞれの立場にたっての努力のたまものと思っています。時が流れ時代が過ぐるとともに、核家族化などと、最も深い絆で結ばれているべきはずの家庭内にさえ疎外感の存ずる今日、職と住の拡散からその結びつきが薄れているきらいがありましたが、これを機に母校を原点として関係者が一層絆を強く結ばれることを願ってやみません。

想えば私が入学した年は、奇しくも創立一五周年の年でした。あれから一五年過ぎたかと思えば感無量です。その頃県下には工業高校としては、高知工高と母校の二校しかなく、進学率の低かったその時代、母校に入学出来たことは大きな誇りでもありました。その頃の列車は全て汽車ポッポで、トンネルではよく泣かされたものでした。今走っているディーゼルとは違って決して快適とは言えないかもしれませんが、デッキに座って外の景色を眺めたり、汽車通学をした人なら誰れもが何んらかの想い出を持っていることと思います。

須崎の街も今とはずい分違っていて、堀川はまだドブ川として存在し川に沿った狭い道を高ゲタをはいて通学したものです。今の電報電話局の所に、須高があった頃で、ここは男女共学であり、しかも本校に男子を多くとられた為か、女子の方が多く我々からみるとうらやましいかぎりで、友人の中には須高の前を通るのを楽しみにしていた者もおりました。

勉強はにがてだったもので、授業に対する想い出はあまりありませんが、手作りのラジオを机の下に置いてスピーカを学帽でかくしながら、高校野球や日本シリーズを授業中にこっそり聞いたことや、その頃は持参した弁当はだいたい一時

限目でなくなるのが普通でしたが、ふたをカランコロンと落し先生を苦笑させたこともありました。

体育は盛んで毎月なにかの競技大会があり、教職員を含めて一年から三年まで各ルーム単位で参加し、その総合点で年間の順位を競っていました。一年の時最下位だった我がルームが三年の時第二位（もっとも一位は教職員でしたから生徒としては一位）を獲得し得たことは、とりわけ優れた者のいなかった田所ルームのチームワークの勝利であったと思っています。

秋の体育祭は特に印象に深く残っています。それは毎月の競技は選手数名の競いであったのにこの体育祭は陸上競技を主としたもので、全員が何かの種目に参加しなければならなく、しかもこの得点がやはり年間の順位に響くものであったわけですが、その開会式が丁度甲子園の高校野球の開会式と同じ方法で、あの日は雲ひとつない秋晴れの日でしたけど、あの時のアナウンサは確か森田先生だったと記憶していますが、先生の名調子に導かれて、国旗、校旗そして我々が整然とグランドを半周し一同横に並んだ後全員が一団となって本部席の方へ行進しはじめた時は胸にジーンとくるものを感じ感動したものです。もう過ぎ去ったあの頃は帰ってはきませんが、母校で過した良き時代の数々の想い出は心の中にいつまでも残ることと思います。

旧校舎で学んだ我々は母校が移転することに対して一抹の寂しさを感じないではありませんが、これを機に更に発展、繁栄されることを願ってこの拙文をおわらせていただきます。

（富士通KK特品技術部設計課）

〈詩〉あいつの想い出

三五・三
造船科卒　増田　浩

一、入学式の時、初めて合ったあいつ
にきびと油汗の額
熊の様にいかつい身体
あいつの鋭い目が俺の目を見た
オイッ!!　仲良く頼むけんのう
そう言ったあいつの目
その時俺には一生の友が出来た。

二、便所のにおいがくさい教室
寒い冬が来ると
大間の峠を吹き抜ける寒風
割れた窓ガラス、傷ついた机
今も尚、俺とあいつのにおいがある

あいつの鼻茨と俺の手あか
俺達はいつもくさい仲なのか。

三、マラソンの時、いつもビリだったあいつ
昼飯の時は一番だったあいつ
数学の時間はドロン
英語の時間は居眠りのあいつ
お馬さんの墓で女学生を横目で見
しょげていたにきび面
お馬さんの墓のイチョウの木も元気な
ことだろう。

四、定期をよくごまかしたあいつ
助平で遊び好きだったあいつ
しかし、あいつと俺が学んだ恩師
俺達よりは上だろうて
あいつがおやじになった
そして恩師はおじいさんになった
須工は大人になった、須崎は栄えた
俺は嬉しいあいつも喜んでいるだろう。

五、きたない手拭、クサイトレパン
一ケ月も風呂に入らないと
いばっていたあいつ
錦浦に向って二人してした立小便
オイッ!!俺達の小便で太平洋が出来たで
よ!!と言ったあいつ
そして、あいつが書いた
便所の落書とにおいが今も俺をよぶ
初心忘るるべからず
初心忘るるべからずと。

（名村造船株式会社設計課）

昭和三七年二月一五日

三八・三
電気通信科卒　沖田信一

私達が在学中に創立二〇周年記念行事を祝ったのだが、今年は三〇周年だという。久しぶりに高校時代が懐しくなって古い日記をパラパラとめくっていると、昭和三七年二月一五日（日）ー雪ーが目に止った。このページを読んで当時を思いつくままに。

『……国語の先生が来てなくて自習、自分は弁当を食べた。西村に1/3を二〇円で売って、うどんを食った……』当時国語の先生は、市川開規先生だった。市川先生には俳句を教

えていただいたことが記憶に残っている。教科書の「奥の細道」のとき、クラスの皆に俳句をよませ、優秀なものをどこかの俳句の先生に見せて、その批評を発表してくれたことがあった。それ以来俳句には興味を覚えて、日記の端などに時々駄作が見える。また森義彰先生も俳句について話してくれたこともあってクラス全体が興味を持っていた。少し話しが脇道にそれるが、当時教科書で習った「奥の細道」はほんの少ししか記憶にないが、最近文庫版を買って読んだ。さすが日本の芸術の最高のひとつであるだけになかなか感動するところが多かった。高校生の国語の教科書は、今読んでみるとおもしろい。古典の良いところを抜粋してしかも先生の解説入りの授業がおもしろくなかったのは、いや読むのが苦痛でさえあったのはなぜだったのだろうか。

西村君はクラスメートだが彼に弁当の⅓を二〇円で売ったのは覚えてないが、当時弁当六〇円くらいが相場だったろうか。現在の会社の給食が七〇円だから⅓が二〇円というのは、相当良い値であることにはちがいない。『うどん』というのは丁度この頃、学校の西の隅に食堂ができて一五円か二〇円くらいでうどんを売っていたように思う。食堂ができたのが何となくうれしかったのを覚えている。合宿のときなど大いに助かった。

『……六時限目も森田先生が来てなくて池ノ内を軽く回ってきて、練習した……』森田鉄亀先生にはこの時体操を教えてもらっていた。（三年の時は担任クラス主任）従って体操の自習のつもりで、池ノ内を走ったものと思う。池ノ内というのは、一周がほぼ三Kmあって現在はどうだか知らないが、当時は毎年恒例の校内駅伝競争などに使っていたし、クラブ活動でランニングするのにもこのコースを走った。駅伝といえば、三七年度のそれでスタート直後、選手の一人が自動車と衝突して大けがして入院した。幸い生命をとりとめ体も元どうりになったそうだが一時は学校全体が大変心配した。私の記憶では、在学三年間の唯一の交通事故であった。最近は後輩達がオートバイで命を落としているのを見ると第一番に悲しくなる。この頃は先生方あるいは父兄の指導が効を奏したのか、事故が起きてないようだが、今後はこのような事故で一人として命を落さないよう望みたい。

練習とあるのはサッカーで、三年間サッカーをやったが、当時は今の様に一般の人には知られてなかった。サッカーは三年間の一番の収獲であった。会社で働きだしてからもつい二年前まではボールを蹴っていた。

『風と共に去りぬ』を読んだのは授業中であった。授業時間中も英語の時間以外は全部といってよいほどこの本を読んで過した。授業中に小説ばかり読んでいたようだったが、さすが苦手の英語には敬意を表している。英語は『WHIC

H』があだ名の岡崎清恵先生であった。高校時代の読書は貧しいものであったが、パール・バック『大地』、石川達三『人間の壁』などを読んだのを覚えている。松本清張の推理小説はたいてい読んだ（主として授業中だったが）。高校時代もっと本を読んでおかなかったのを残念に思う。やはり読書に対して指導してくれる身近い人が居なかったからだと思う。よく本を読みだしたのは卒業して、三～四年たってからで、当時私が興味を持ちだした青年の読むべきオーソドックスな本（たとえば漱石など）は、すでに同年代の友達は読んでしまっていた。

（沖電気工業株式会社）

母校いつまでも健在なれ

四四・三
電気科卒　戸田幹男

工業界の中堅層を目的として三〇年という歴史と伝統をきずきあげ、その理念を堅持した母校を誇に思い、又その三〇年の歴史の一部を我々がきざんだことは非常に名誉なことです。

都会のきびしい生活の中で時々、フッとさみしくなった時、先生方や級友たちを思い出します。

そして級友たちと会った時は必ずといっていいほど学校時代のことが話題になります。

あの古い校舎が私の意識の中でいつも生きているのです。赤点のにがさ、クラブの練習の汗の塩っぱさ、優等生ではなかったがあのころこそ一番楽しかった。

社会というものを知らぬ理想や夢や甘さだけの青春だっただけにすばらしい時代だったと思います。あの廊下の独特のにおいや風雨にさらされたざらざらの校舎にさわれないということが少々さびしい気もしますが、しかしこれからは新しい時代です。人も社会も変りつつあります。母校も生まれ変るべき時代かもしれませんが、しかし、黒潮に洗われた須工魂と旧校舎とともにあった伝統はいつまでもうけついでいってほしいと思います。

はるか東にはなれていて、何もできませんがこれからも郷土のみなさまのお力ぞえを、お願いいたします。

（㈱長田製作所）

僕らと須工

四三・三
造船科卒　笹岡和富

卒業して、早くも三年有余の月日が流れ、ふと高校時代の

思い出にふけることがしばしばである。同窓生というものは、言葉ではいい尽くせないよさがある。この間も会社の出張で広島に行った。全く予期もしない友に、突然出合い、最初は言葉にならず、ただただうなづき合い肩をたたき、懐かしさにかられた。学校時代の色々な思い出話しに花が咲き、時のたつのも忘れ、お互いの健康と将来への大きな希望に満足しあうのであった。

また、お互いに名前、顔は知らずとも、『須工だ』ということで不思議に親近感を感じるし、安心感を覚える。そんな衝動にかられるのも『須工』あってのこと、同窓生あってのことである。『須工』三〇周年の伝統に輝く母校、我々同窓生の扇の要である母校を、いつ迄も誇りとし、未来へ雄飛、発展することを祈願するものである。

（金指造船株式会社）

仕事に生きよう

四四・三
造船科卒　小野昭夫

学校時代の思い出は社会人になった今の私には何物にも比べられない程楽しい。学校時代は何かと人に頼って生きていくことができたからだろう。

然し今の私は再び学校に戻ることはできない。自分ひとりの力で生きていかなければならないのだ。

仕事の上では学校で学んだことは殆ど役立っていないように思う。学歴は通用しない、実力だけが物をいう時だ。

然し仕事は決して楽なものではない……でも船が進水する時はその苦労もふっ飛んでしまう。自分が手掛けた船が雄然と海に浮んだ時の感激は言葉や筆に表わすことはできない程である。

（金指造船株式会社）

スポーツを通じて

須工相撲部のあゆみ

旧職員　田原敏雄

沢本校長先生をはじめ諸先生方の熱意とご努力、同窓諸兄の母校愛とご協力により発展してゆく姿を常に見せていただき陰ながら喜んでおりますが本年は創立三〇周年を迎かえられ心よりお慶び申上げると共に今後一層の飛躍をお願いします。

それと同時に発展の段階として当然のことながら思い出の地、糺をはなれて新校地に新築移転については心よりおよろこびすると同時に一抹の淋しさも禁じえません。

想起すれば昭和二四年九月より三九年三月まで約一五年間にわたり勤務させていただき私なりに色々の想い出がございます。

高体連高吾支部の結成と郡体の創設も須工の宿直室で誕生しました。運動会の廃止と各種校内体育大会の年間実施、食堂の建設、生徒指導部に関する色々の事項、同好者の集いとしての書道研究等とかぎりなく浮かんでまいりますが、とりわけ相撲部についての想い出は強烈であります。

昭和二八年初の県外遠征の金沢大会に準優勝の成績を収めて帰校した日、優勝候補にあげられながら予選落ちして涙した大阪府立体育館の片隅、全国制覇をとげた感激の瞬間等、喜びと悲しみの幾年月でした。

今、創立三〇周年記念誌発行により機会を与えられましたので須工相撲部創立以来離任する三九年までの相撲部のあゆみをふり返ってみたいと思います。紙面の都合上概略にとどまりますがご了承ください。

◎昭和二五年度相撲同好会として発足

指導には水野正治、広瀬雄助先生と私とであたる。

◎昭和二六年度相撲部として正式に発足

初代主将岡林幸保（造船科二年）県下各大会に出場するも他校の伝統の堅陣をくずせず、高知工、高知農、高知商、宿毛高等全国に誇こる強剛が健在の時代であった。

全国選手権県予選に　（先鋒）岡林幸保　（中堅）松本尚介（大将）藤原昌弘で参加、戦績は九戦〇勝二点、最下位におわった。しかし全得点二点のうちの一点が出場校決定のポイントとなったのは愉快であった。

前年度全国選手権二位の高知商の大将が須工の藤原に喫した一敗が高知商の連続出場をはばみ高知農の出場を決定したのである。

◎昭和二七年度

県下大会では依然として下位に低迷し高知県上位校の壁は厚かったが、九月に高知市で行なわれた第四回全国選抜大

会に初出場健斗よく優秀一六校に選出、高知農に二対一で惜敗した。続いて一二月宿毛市で行なわれた全国選抜大会でも優秀一六校に進出し、北海高に敗れたが、ようやく地力がついてきた。今から考えれば創世期の苦しみとともに希望の光が前途にみえはじめた時期である。

高知大会のメンバーは（先鋒）高山三郎（中堅）岡林幸保（大将）藤原昌弘（交代）長山正。

宿毛大会は、三年生の岡林をのぞき（先鋒）高山三郎（中堅）長山正（大将）藤原昌弘（交代）山崎満であった。

◎昭和二八年度遂に宿願の県下選手権大会に優勝す。

（先鋒）高山三郎②（二陣）山崎満②（三陣）中井規三男①（中堅）長山正②（三将）岡崎嘉男①（副将）長信仁②（大将）藤原昌弘③（補欠）浜口一①（○内の数字は学年を示す）

高知新聞の予想記事には過去二年間にだんだん身につけてきた実力を買われて高知工、宿毛工、高知農、高知商の実力校に伍してダークホースとしてとりあげられていたが、相撲巧者の高山を先鋒に若いチームが調子の波に乗り見事優勝旗を手中におさめた。

県下優勝の余勢をかって出場した初の県外遠征の全国大会金沢においても北陸の雄新潟商に二対一で敗れ優勝は逸したものの准優勝旗と最高得点賞杯を須崎に持帰り、須崎駅頭での市民の皆様の温かい熱狂的な歓迎、市内パレード等昨日のように今でも目の前にあざやかに浮びます。

又同年八月青森県三本木町（現十和田市）で行なわれた全国大会でも優勝戦で地元三本木農（金沢大会では予選で対戦し三対○勝）に敗退し再び准優勝、全国制覇えの野望愈々たかまり、毎日の練習にも一段とはげしさを加え学校教職員、生徒、同窓会、後援会の温かい激励を受けて精進したことでした。

愈々大阪で行なわれる全国選手権大会、県予選で圧勝して雄躍大会に臨む、結果は無残にも予選落ち、優秀一六校進出も果せず（予選成績一七位）大阪府立体育館の一隅で敗戦の涙をながし、後援会の有力者より「桧舞台の相撲ではよう勝たんか、田舎の草相撲（金沢大会、三本木大会をさす）しかよう勝たんか」と面罵されたことでした。返す言葉もなく今にみておれと唇をかんだものです。メンバーはいずれも（先）高山（中）長山（大）藤原（補欠）山崎、長。

昭和二九年度。

◎全国選手権大会（大阪）准優勝！昨年の雪辱を期して（先鋒）高山三郎（中堅）長山正（大将）岡崎嘉男（補欠）山崎満の布陣で大会にのぞみ、全国の強剛をなぎ倒して決勝進出、和歌山商と対戦、高山得意の上手投でまず一勝、中

堅長山、和商浜野の猛突ぱりをかわし土俵際まで押込む。やったと応援団一同総だちの中で無念にもあびせたおされる。大将は全国一の強剛中尾、岡崎健斗するも遂に二対一。昨年より全国大会で三たび優勝戦に駒をすすめるも優勝を手中に収め得ず全国制覇のむずかしさを痛感すると同時に本年度残されている最後の機会、第六回全国選抜大会こそ打倒和歌山商を必ず果たしてみせる闘志をもやす。

◎遂に全国優勝を果たし、高山も中尾（和商）をやぶり個人優勝を果たす。

宿毛市で行なわれた第六回全国選抜高知大会の感激を忘れることはできない。個人准決勝で中尾を作戦通り上手投で倒し優勝戦は宿毛高貝崎を軽くさばいて高山個人優勝。団体戦においても准決勝で宿敵和歌山商を二対一で降し秋田の名門金足農を優勝戦で三対〇優勝戦進出四回目にしてはじめてにぎった全国優勝の栄冠感激これにまさるものなし。地元須崎市も市をあげての祝賀提灯行列で歓迎してくれたことでした。

（先鋒）高山三郎　（中堅）長山正　（大将）岡崎嘉男　（補欠）山崎満

この年金沢大会、三本木大会とも第四位（メンバーおなじ）

昭和三〇年度（以下紙面の都合上全国大会の成績とメンバーのみ）

◎十和田大会（三本木大会）団体三位、個人岡崎嘉男優勝

（先）高山東一（中）中井規三男（大）岡崎嘉男（補）中井幸増

◎尚この年東西対抗（札幌）、選抜高知大会に岡崎嘉男個人准優勝。

昭和三一年度

◎十和田大会

団体准優勝

（先）高山東一（中）甲把辰夫

（大）岡崎憲史（補）中井幸増

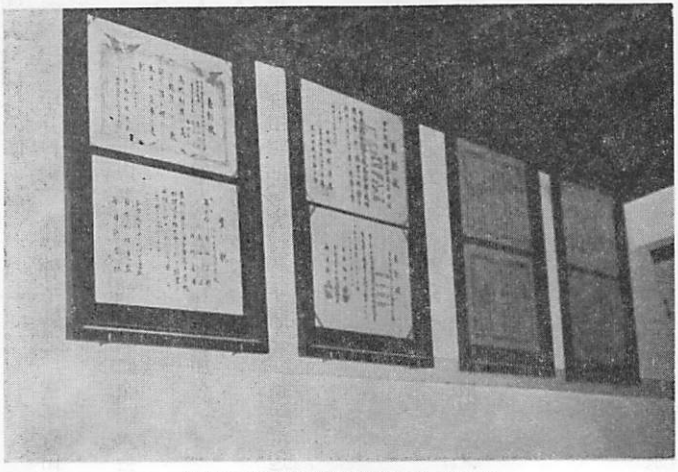
◎全国選手権団体准々決北海高に敗退

（先）高山

（中）中井

（大）岡崎

（補）甲把



学校の玄関を飾る賞状のかずかず

昭和三二年度

全国選手権大会に初優勝。金沢大会も制する。

◎金沢大会団体優勝、最高得点賞、岡崎憲史個人優勝

（先鋒岡崎憲史、中堅中井幸増、大将甲把辰夫、補欠大西速雄、中川浄）

◎全国選手権大会団体優勝、個人中井幸増第三位。

（先鋒岡崎憲史、中堅中井幸増、大将甲把辰夫、補欠中川浄）

昭和三三年度

◎金沢大会　個人中川健三三位、団体准々決で敗退

（先鋒、中川健三、中堅中川浄、大将橋田昌和、補欠大谷尊由）

◎全国選手権大会　団体准々決で北海高に敗退、メンバーは金沢大会におなじ。

◎選抜高知大会　団体准優勝（メンバーおなじ）

昭和三四年度

◎東西対抗（伊勢）で中川健三個人優勝

◎全国選抜高知大会　中川健三優勝

昭和三五年度

◎全国選手権大会　団体第三位、個人中井博重四位先鋒中川健三、二陣中井博重、中堅森田明郎、副将津野昌英、大将竹下勝之、補欠南部裕祐

◎全国選抜高知大会団体優勝

先鋒中川健三、中堅中井博重、大将竹下勝之、選手森田明郎

昭和三六年度（この年二八年以来団体、個人共に全国大会入賞〇の年となる）

◎全国選手権大会、竹下勝之個人代表として参加

◎選抜十和田大会　団体准々決勝て敗退

先鋒中井博重、中堅森田明郎、大将竹下勝之、選手浜辺和俊

昭和三七年度

◎高校相撲金沢大会　団体三位

先鋒森田明郎、中堅浜吉武夫、大将浜辺和俊

◎選抜高知大会　個人森田明郎四位　団体准々決敗退（メンバーおなじ）

昭和三八年度

◎東西対抗（伊勢）浜吉武夫個人優勝

◎金沢大会　団体二位

先鋒浜吉武夫、中堅浜辺和俊、大将木下肇、選手酒井泉

◎高校相撲新人大会（三九年一月須崎市で開催）団体優勝

先鋒浜吉武夫、中堅林和夫、大将木下肇、選手広田正澄

紙面の都合上昭和三〇年度以降の記事が戦績のみを挙げたにすぎず残念です。

須崎工業相撲部の歴史と共にあゆみ幾度か全国制覇の感激にひたり、又敗戦の苦悩の中に呻吟した中で学校関係者及び須崎市の方々の温かいご激励と祝福の数々を今更のごとく思い出します。

大きく飛躍するための校地移転と創立三〇周年を心よりお祝いすると共に須崎工の益々の発展とやや低調気味の相撲部の奮起を心より期待して拙文ですが三〇周年記念誌原稿の責をのがれたいと存じます。

（高知工業高校教諭、高知県高体連理事長）

相撲部の思い出

二八・三 造船科卒　岡林幸保

日本全国高校相撲界に、現在強豪、名門とまで呼ばれる須工相撲部が正式に誕生したのは昭和二六年の新学期である。この相撲部の誕生を早くから念願し、その実現に努力していた人こそ誰あろう、当時須工の体育主任であり、現高知県高体連の理事長で県下高校体育界にその名を知られる田原敏雄先生その人であった。時に私は二年生になったばかりであったが相撲部の主将として推され、二六年、二七年の二年間その重責を負わされていたのであった。この年まで須工には須工相撲部として正式に対外試合に出ていなかった。唯一度私が一年生の時、中村市（当時は町）で行なわれた県下高校相撲大会に須工相撲部として出場したことはあったがそれはこれから県下高校相撲界に進出せんとする前哨戦とでもいうべきものであったであろう。

当時の監督は機械科の広瀬雄助先生であった。校内クラブ活動に相撲部が正式に認められ、我々二年生が主体となり近い将来に期待をかけたのであった。部長として水野正治先生がなられ、コーチとして田原敏雄先生がなられその指導に当ってくださった。その頃の相撲の練習場である土俵には屋根は無く雨天の時は練習は出来ず、雨上がりの時は小さな石ころが赤土の上に浮き出ており練習の度毎に脛や肘は皮がすりむけて生傷の絶え間もないほどであった。そのせいもあろう部の出来た当初は部員の練習にもあまり熱が入らなかったといっても過言ではない。然しそれでも僅か数名の部員ではあったが、水野、田原両先生の激励に一応は頑張っていたことは確かである。また当初、町内の好角者が須工に相撲部が出来たと喜んだかどうか判らないが見物に来ては吾々と練習試合をしたりなどして随分と稽古をつけてくれたものであった。その中でも特に面倒をみてくれたのは中川源一さんであった。中川さんは仕事の関係で町内に居ることは少なかったが町内にいる時は必ずといってよいほど来て胸をかしてくれ

たものであった。当時の須崎町は現在に比較すると遙かに相撲熱が高かったようで、町内にはずいぶんと相撲ファンがいたようである。

相撲部が誕生して間もなく、水野、田原両先生の働きで当時のＰＴＡ会長であった坂本和久氏を会長に、そして副会長に田川兼盛氏と井上繁馬氏、そしてまた理事長に竹下増秀氏といったような町内の有力者から成る須工相撲部後援会が誕生した。そんな次第で我々の練習も遊び半分のものではいけなくなっていったのである。そしてその年（二六年）の夏の合宿練習の時のことである。屋根のない土俵場のことだから、雨の日は機械実習工場を練習場に許可をもらったが如何んせん床がコンクリートであり、足の裏が痛くてどうにもならず同じ実習工場でも床が土面である鋳物工場を借りて練習したことであった。この合宿練習にも中川源一さんは毎日の如く来て稽古台になってくれていたのであった。しかし工場内での練習では本当の意味での相撲の練習にはならないのは当然のことである。どうしても我々は屋根のある土俵が欲しかった。二七年の新春、恒例の須崎町火鎮祭大相撲大会に使用された、四本柱や屋根等を前記の後援会の働きでもらいうけることになった。そして近く移設されんとする現在の土俵の前身である練習場を作ったのである。（その土俵は昭和二九年九月の台風でこわれ同年一〇月に現在のものが出来た）

私が三年生となり新らしく一年生に部員が七名ほど加わり主将としての私の責任もまた大きくなったのであった。この新しく入部して来た中に後年？須崎工相撲部の名を高校相撲界に知らしめた高山三郎君や長山正君等がいたのである。私の在学中には残念ながら県下高校相撲界にすらもその頭角を現わすこともなく終り、後援会諸氏の期待に添い得なかった。然し私が卒業したその年から藤原昌弘君を主将とする後輩達は徐々にその成績を上げていったのである。即ち二八年の五月に行なわれた県下高校相撲選手権大会に初の優勝を成しとげたのである。同じく五月金沢大会に出場し、初出場ながら最高得点校として表彰されると共に准優勝の成績を収めたのであった。続いて三本木大会にも出場し、これまた准優勝の成績をうちたて、いやが上にもその名を全国高校相撲界に知らしめたのである。そして二九年一一月末、宿毛市で行なわれた第六回全国選抜大会において団体及び個人優勝という輝かしい記録を残してくれたのである。時の陣容は先鋒に高山三郎君、中堅に長山正君、大将に岡崎嘉男君であった。個人優勝は高山君である。こうして二八年の金沢大会では新鋭須崎工と呼ばれ、翌二九年には二八年の一年間の成績から強豪と恐れられ、そして明けて三〇年にはすでに名門とうたわれるまでに至ったのである。高山君等に続く後輩の活躍は同窓生はもちろんのこと高校相撲のファンなら誰もが知ると

ころである。

相撲部が誕生した当時に、我々部員の育成にご援助を賜った市役所の橋本さん、営林署の林さん、町内の橋本正三さん、森崎義守さん、吉村平兵衛さん、多ノ郷の横山祐介さん達……紙面の都合でもれなくお名前をあげることのできないのは誠に申訳ないが……に対し、誕生当時の主将として衷心から感謝の意を表するものである。

（今井造船株式会社設計部次長）

須工陸上部の歩み

旧職員　森田鉄亀

私は昭和二八年四月須崎工業高校に着任すると同時に陸上部の顧問を引きうけ、四一年三月現在校に転任するまで一三年間部員達と楽しく汗を流した。二八年当時は、部員も僅か五名で、郡体や県体は参加するだけで、予選を通過することは夢のような淋しい時代であった。しかし高新駅伝にはサッカー部の生徒や、今も在職されている機械科竹内良雄先生、造船科竹村先生、山崎先生達の特別参加を得て出場だけは毎年伝統を守っていた。（或年の二月冷たい雨の降る中での高新駅伝の時、竹内先生はゼッケンを忘れて引継点の佐川より山越しに土佐市甲原の自宅まで走って取りに帰りすぐバトンを受け継いで走られた。先生は三八才まで参加された）こうした熱心な先生方のご協力を得て年毎に部員も増え各大会に入賞するようになり四〇年度には部員三三名というクラブにまで発展した。

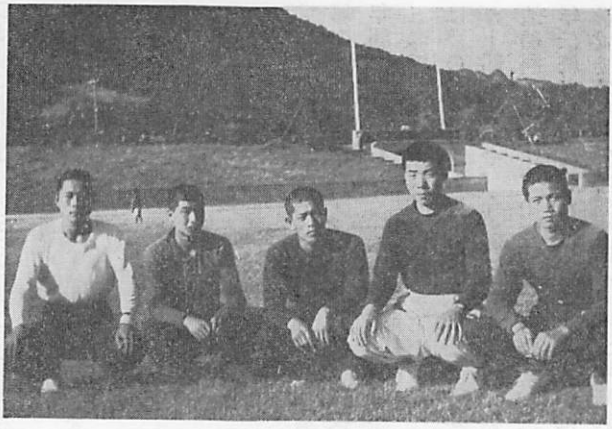
次の二九年度の春の郡体には団体第二位の成績を収め、更に冬季大会の駅伝で西山忠夫が個人優勝でカップを獲得。また佐川町祝賀駅伝で二位、更に高新駅伝に始めて第六位に入賞し賞状を手にした。こうして陸上部活躍の第一歩を歩み出し三〇年度春の郡体には部員も一〇名となり待望の団体初優勝を飾った。続いて開かれたインターハイ県予選に於て八百米リレー（西田、横山、浜川、二宮）、四百米（二宮）、砲丸円盤（山下）の四種目に入賞し、屋島陸上競技場で行なわれた四国大会に五名の選手が初出場した。

三一年度も春の郡体は団体優勝、以後四〇年度まで第二位の約二倍の得点で堂々と優勝を続けた。（四国大会へは八百米リレー、四百米、五千米（二人）、走高跳と出場、徳島へ遠征した）。そして郡体の駅伝も春の大会と同様優勝の王座はずっとゆるがなかった。三二、三、四、五年度も続いて毎年二～六名四国大会へ出場したが全国大会への出場はまだ果せなかった。

三四年度に久礼中学校より今橋、中村、坂本のコンビが入

ってきて以来一段とクラブにも活気ができ三六年には遂に待望の高校駅伝四国大会への出場権を獲得した。

練習はサッカー部やハンドボール部にグラウンドを占有され、陸上部はいつもグラウンドの隅で小さくなって練習しなければならなかったので、部員達は校外に練習場所を探すなど工夫をこらしてやっていた。未完成の道路を使ったり、浜辺へ行ったり、特に駅伝の練習は須崎駅前北の町はづれから吾桑間の国道が毎日の練習場所であった。部員がよくまとまって気持の良い練習が四国大会出場を目指して毎日続けられた。



四国大会初出場（昭和30年）
（右より　西田、山下、二宮、浜川、横山）

そしてこの年は高校駅伝県予選大会の一週間前の日曜日に駅伝コースを試走し、その結果について反省会を持って各区の選手を決定するという慎重な作戦で大会に臨んだ。レースを振りかえってみると、一区の坂本は最初から高農を先頭とするトップグループにくっつき一〇キロコースの半ばを過ぎる頃、高農、須工のトップ争いとなり必死のレースが展開されたが坂本はよく頑張って僅か二秒差で第二区山崎晃次郎にタッチ、山崎すぐ高農と並び再び先頭争いとなった。後免の町へ入ると高農は地元応援に必死に頑張っていたが山崎のピッチは益々上り遂に先頭に出た。県下大会でトップを走るのは勿論この時が始めて。感激の涙をふきながら山崎快調に走り続け第三区浦岡にタッチ。しかし一年生の浦岡には少し責任が重かった。間もなく高農に追い上げられ逃げに逃げたが力の差、遂に先頭をとり返えされた。四区今橋途中で腹痛を起し腹を押えて走る中に安芸にとらえられ抜かれ三位となった。五、六、七区順位変らず結局三位でゴールイン。（坂本、山崎、浦岡、今橋、河添、谷本、中村）しかし四国大会出場の念願が遂に達せられた。徳島での四国大会の成績は一二位であったが自校最高記録を約五分短縮した。更に二月に行なわれた高新駅伝には第四位に入り、高校生としては立派な成績であった。

三七年には県予選大会に山崎晃次郎四百米で初優勝、四国大会（松山）で四位に入賞し宿願の全国大会出場権を獲得。八月大分の全国大会に出場した。

三八年には県予選で山崎四百米優勝、二百米二位、崎山弘太郎三段跳優勝で四国大会に出場した。山崎四百米に堂々の初優勝!! 続いて崎山三段跳に第三位に入賞!! この感激!! 三〇年四国大会に初出場した屋島競技場に於て優勝するとは何かの縁か。須工の名を四国に知らしめた快挙の一ページである。八月には新潟で開かれた全国大会に出場。山崎四百米では予選を二着で見事通過したが準決勝でやぶれた。

三九年にはインターハイ県予選にフィールド総合第三位で四国大会には三段跳（崎山）ヤリ投（長山、阿達）円盤（青木）五千米（氏原）と、五名出場し、崎山は更に大阪の全国大会に出場した。この年の夏休みの合宿練習は九月の県体を目標に熱が入った。そして県体に於て遂にフィールド総合優勝の快挙を達成し常勝の高知農に水をさした。更に一一月行なわれた高校駅伝県予選に第三位となり（三位まで大会新）二回目の四国大会出場権を得、高松－坂出間のコースでのレースに出場する。この大会では一区の横山よく力走し八位で二区へタッチと、レースは抜きつ抜かれつの健斗で十位でゴールに入った。記録は県予選の新記録を更に約二分短縮の二時間二三分〇一秒の立派な記録である。（出場選手は横山、中居、高橋、氏原、植村、戸梶、森）

高新駅伝での力走（氏原）

四〇年のインターハイ予選には長山泰ヤリ投に優勝（国体予選で県高校新記録をつくる）青木（円盤）四森（ハンマー投）四国大会に出場し、大分での全国大会には長山、青木が出場した。

この年の県大会ではフィールド総合第二位、高校駅伝県予選で第三位となり、三回目の四国大会に出場徳島へ遠征した。徳島では再び一二位となったが記録は昨年より更に二分短縮の二時間二一分〇九秒で一〇分台へ後一息の堂々たる記録（横山、田村、中居、北川、山崎(兄)、山崎(弟)、松岡(登)）、続いて二月に行なわれた高新駅伝では第三位の本校最

高の成績を収め高校チームとしては高知農に次いで第二位であった。

以上私の在職一三年間の陸上部の活躍の跡をふりかえってみたが、三九年度の県体で本校は陸上部を含めて四つのクラブが優勝する輝かしい歴史を残している。このように各クラブが活潑な活動をしたのは、充実した校内体育大会の影響と職員のスポーツに対する理解があったことに大きな原因があったと思う。

（佐川高等学校教諭）

サッカー部の思い出

二九・三
造船科卒　高橋　忠幸

サッカー部創設についての明確な点は思い出せないが、須崎工業サッカー部として本格的な部活動が始まったのは二六年八月頃だと思う。新しく着任した合田先生を顧問に押し立て、部員も斗賀野中学、佐川中学出身者を中心に一年生ばかりで唯一人二年生の竹村先輩が居るだけのまったくの新品の部であった。このため部活動予算の獲得も難儀であったようだ。

しかし伝統が無ということは総てが新しく始まることで自分等の手で練習、試合のスケジュールを作って実施したものだった。また当時はボール、ゴールネット、ユニホーム等も、これ以上は修理出来ないまで使用し強烈なキック力を持っていた高橋義孝君（キャプテン）尾崎兼造君（H・C）などのキックでパンクすることもまれではなかった。

尾崎君といえば谷君（R・W）と共に地下タビの愛用者でチームのけん引車であった。二年目頃からチームの実力もあがり郡大会では優勝し練習試合でも無敗を誇りテングになったもので、特に男女共学（当時は我が校は残念ながら女子生徒は一名で箱入りムスメのように皆で大切にしたものだった）の佐川高校、須崎高校などいいカモだ

サッカー部草分け当時の部員

った。いつの試合だったか名キーパーの堀見正君が相手チームのチャージで〇〇をけられてタヌキのそれと同じ位いには れ上がり皆で笑うに笑えず、大弱りしたこともあった。

郡内で無敵の我がチームも県大会に行くとまったく子ネコの様におとなしく敗けてばかり、くやしくてプールに泥だらけのクツをはいたまま飛び込んで大いにりゅう引を下げたものだった。

とにかく自分等が作ったサーカー部で青春のエネルギーを思い切りボールにふっつけることのできたことをいつまでも忘れることが出来ない。

（海上自衛隊教官）

野球部の思い出

二六・三
機械科卒　北川和雄

私達の母校入学は太平洋戦争末期の昭和二〇年の四月でした。学業もまたスポーツもそれどころでないといったような一億総決戦だともいわれていた時でした。やがて敗戦、こんとんとした世情の中から落着きをとりもどすのにも相当な日時を要したものでした。衣食住に不足した時でしたので各家庭においてもその面で大変苦労も大きかったことだろうと思われます。こうした中に学業の方も次第に正常な状態になってくると共にスポーツもとり入れられ昭和二三年の春に少年野球として軟式野球を宮地先生、岡林先生、池上先生のご指導のもとに始めたのがそもそもの野球部としてのおいたちであったと記憶しております。

先輩が造成した運動場を野球の出来るようなグラウンドにするためのモッコ担ぎで汗を流したものでした。整地ローラがけも楽しい思い出の一つです。軟式で始めた野球も放課後に諸先生方のご指導でチーム力も次第にあがり強くなってきた頃、県下の大会に出場する機会を得ました。初の対外試合でもありましたので唯々夢中ですべてが経過したことでした。一生懸命に戦ったのだが、残念なことに勝利の女神は我に味方せず一回戦で敗退しました。この大会の出場を最初として、和田、山崎、織田の先輩と共に硬式での野球部を創立して練習を初めたのだが、何分硬式になるとグラウンドが良くなくては充分な練習も出来なく、またボールの消耗も激しくよく練習用のボールの縫目の修理をしたものでした。グラウンドの整地とボールの修理も練習の一部であったようです。こうして練習を重ね宮地先生の良きご指導で着々と地力をつけてきたもののまだまだ県下の他校との力の差は大きいようであったが、その頃県下各校のあいだで野球のリーグ戦が行なわれることになり、これに出場することとなりまし

た。

当時は甲子園球場での全国中等学校野球大会も復活されて野球熱が全国的に高まって来ていた時期でもありましたし、県下では城東中学（現追手前高）の前田投手が甲子園球場で大活躍した頃で、ラジオを聞きながら熱狂したことでした。当時は全国的に野球のレベルが高かったようです。

教えを乞うつもりで出場したのだがあいついで惨敗しました。然しこれに挫けることなく、むしろ今に見ておれという気持で、かえって練習のはげみとなったことでした。

ある時投手が故障で急遽横山先輩がマウンドに立って投げたのだが、これまた球逸つたなくダブルスコアーで大敗しました。翌朝の新聞のスポーツ欄での戦評に『須工横山の凡球云々……』とあったこともなつかしく思いだされます。

六・三・三・四制の学校教育の改革で工業高校として出発、野球部も高校野球として継続されていたもので、甲子園球場での全国高等学校野球大会の出場を目ざして連日暗くなるまで汗と砂にまみれて白球に向っていったものです。またお隣りの須崎高校にも野球部が創立されてよく練習試合をしたことでした。この時期だと思われるのは工業高校への希望者の減少で一時は普通校への統合といったような危惧もあったようでしたが、西内、塚本、岡田の諸君と共に部員一五、六名はお互いにはげまし合ってよきチームワークと学生野球としてのマナーに努め着々として野球部の基礎を築いていったのであります。他の運動部との関係もあり限られた予算の内で用具の調達にもなにかとご配慮下さった宮地先生には唯々敬意を表するばかりです。

こうして野球部はようやく基礎も固まってきたしチーム力も向上したので、あまり他校との力の開きもなくなり郡下体育大会や全国高等学校野球大会高知県予選でも母校の名誉にかけて力一杯無欲で戦い上位に進出するまでになりました。勝敗だけにこだわることなく勝っても負けてもすがすがしい気持、これが本当の高校野球だと思われます。

学校生活最後の夏の大会県予選での入場式はやはり終生忘れられない感激であります。厳粛ななかにいきいきとした勇壮な雰囲気、高校球児のあこがれの甲子園球場での雰囲気とは相当のひらきがあるが、ダイヤモンドを一周する入場行進など感動がひしひし胸をしめつける思いがしました。苦しい練習のことも忘れ本当に野球をやっていて良かったとつくづく思ったことでした。この時は一回戦で追手前高と対戦し、投手戦の末1A〜0で惜敗するも、試合終了後、スタンドからの拍手、勝者にまさる敗者への暖かい拍手、『敗けはしたが良くやった。来年は頑張れよ』という声援を背に受けてグランドより退場していったことなど今日でもはっきり思い出されます。

野球というスポーツがいかに健全な身体と精神の鍛練に適しているかは衆知の通りである。他のスポーツにしてもそうであろうが、忍耐、協調、和合の三つのことがらと豊かな人間性も野球を通じて養われていくことを今になってはっきりと感じられます。

我が母校の野球部も私達在学六年間のあいだに創立し基礎をかため幾多の試練をのりこえて着々と内容充実に努めて来たのでずが、私達の卒業後、二、三年で廃部となったようであります。野球部が後輩諸君に受け継がれなくなったその原因が何であったかにせよまことに痛恨の極みであります。

この度母校創立三〇周年にあたり、また、新校舎移転に際して母校の発展を祈り、且母校に野球部の復活されんことを心待ちしている次第であります。

（大阪セメント株式会社高知工場）

卓球部の活躍

旧職員　森　寛

創立三〇周年記念事業として記念誌発刊に際し寄稿の依頼を受けこのうえもない光栄と存じております。昭和三三年四月より昭和三九年三月迄の在職中の卓球部の戦歴など記憶をたどりながら記載したいと思います。

昭和三三年

四国大会（高松市）シングルスに宮本（電気34年卒）出場

昭和三四年

県予選にて団体第三位

四国大会（徳島市）に団体シングルス出場

主な選手　山崎、高橋（機械35年卒）、高橋、岡林、浅岡

昭和三五年

県予選にて団体第三位。

四国大会（高知市）に団体シングルス出場。

主な選手　高橋（機械36年卒）、岡林、浅岡、片岡、堅田。

昭和三六年

県予選にて団体準優勝、シングルスに岡林初優勝。

全国大会（東京都）シングルスに岡林出場。

須崎工に初栄冠
土佐女子は九連勝飾る

四国大会（松山市）に団体、シングルス、ダブルス出場。
県下高校体育大会に団体、個人の完全優勝。
国民体育大会（秋田県本庄市）に本県高校男子チームが四国代表として出場。
監督　森（須工）、選手　鍵本（須工）他二名。
主な選手　岡林（機械37年卒）、浅岡（電気37年卒）、片岡、堅田、鍵本、竹林。

昭和三七年
県予選にて団体初優勝、シングルスに鍵本優勝、ダブルスに堅田、鍵本組準優勝。
全国大会（鹿児島市）に団体、シングルス、ダブルス出場。
四国大会（高松市）に団体、シングルス、ダブルス出場、鍵本シングルスに優勝。
県下高校体育大会に団体、個人の完全優勝。
主な選手　片岡、堅田（電気38年卒）、鍵本、竹林、浜口、勝賀瀬。

全国大会に入場する須工選手団
（鹿児島市 昭和37年）
（後より 堅田、片岡、鍵本、竹林、浜口の各選手）

昭和三八年
県予選にて団体、シングルス（鍵本）、ダブルス（鍵本、浜口組）の全種目優勝。
全国大会（京都市）に団体、シングルス、ダブルス出場、鍵本優秀32選手に入る。
四国大会に全種目出場、鍵本二年連続四国チャンピオンとなる。
国民体育大会（山口県柳井市）に本県高校男子チームが四国代表として出場。
監督　森（須工）、選手　鍵本、高橋（須工）、他一名。
県下高校体育大会に団体、個人の三年連続完全優勝。
主な選手　鍵本（機械39年卒、早稲田卒、大学シングルス選手権、世界代表選手にえらばる）、

竹林（化学39年卒）浜口（造船40年卒）勝賀瀬（機械40年卒）高橋電気41年卒）北川（化学41年卒）

以上在職中の戦歴ですが、尚翌年の高知での四国大会を色々困難もありましたが、須崎市、須崎市教育委員会、須崎市体育会のご援助により須崎市にて開くことが出来ました。そして高知県の卓球は須崎市が中心となって参りました。近年卓球部の衰退が見られますが、在校生の諸君、先輩のこの輝かしい成果に負けないよう頑張って下さい。

末筆ながら須崎工業高校の益々のご発展をお祈り致します。

（東工業高校教諭）

ソフトボール部の歩み

教諭　小松元邦

わが国をはじめ、世界各国でポピュラーなスポーツとして発展途上にあるソフトボール。本校も同窓会、PTAその他関係各方面の援助に支えられ、着実にその成果をあげ、連続三年間全国大会に出場できるチームまでに成長してまいりました。

昭和三五年にソフトボール部が発足し、三九年に顧問を引受け四二年頃までは、県内大会で二回戦と進んだことがなく、すべての面で見劣りするチームであったものが四三年度高吾支部春季大会において初めて優勝を体験し、この優勝を足掛りにして部員一同技術の向上と、精神練磨にはげみ、和を重んじ、気力あふれるチーム作りに全力投球をしてきました。こうした努力の結果、昭和四四年、四五年、四六年と連続三回全国大会へ県代表として出場しましたのでその模様の大要を述べてみたいと思います。

昭和四四年度。全国大会をかけた県予選で四位となり出場権を獲得、初の全国大会出場とあって元気一杯、八月五日、天下の名峰として知られる駒ケ岳と、民謡で歴史の古い伊那節の街、伊那市に向って、選手一五名を引率して出発、八月一六日に第一歩を踏みいれる。午後監督主将会議、落着いた雰囲気の中にも闘志がうかがわれ、ファイトが燃える。

八月一七日　この年優勝の群馬代表の新島学園高と第一回戦を交える。再三チャンスをつかみながらも、ウインドミル投法による速球を打ちあぐみ、また相手も我が浜田投手におさえられ、得点に結びつかず延長一二回の末一対〇で涙をのむ。

八月一八日　敗者復活戦で、大阪代表布施工高に三対二

で勝ち淮々決勝で、窪川高に二対一で惜敗、しかし敗れたとはいえ力一杯戦にいどみ、なにも悔いるものはなかった。盛大で厳粛な開会式に臨み、全国の強豪と相まみえたその感激と、各校の練習を見、試合に臨んで決して我々が引け目を感しることはないが、相手が鍛えられたチームだけに見事な守備、打撃、そしてスピードとコントロールのよい投手の特徴にふれ、選手一人一人にとって非常に意義あるものとなった。

昭和四五年度。県下春季大会では二回戦で敗退したが、全国大会出場をかけた六月の県体では、高知商高と決勝戦を行ない淮優勝し、四国大会、全国大会の出場権を獲得、四国大会では高松商高に一回戦で破れる。

今までは全日本高校男子ソフトボール選手権大会と呼ばれていたがこの第五回大会より、全国高校総合体育大会の一環として新たに仲間入りした。球場は須磨海岸を前方に、優美を誇る明石城を背景とした、蝉時雨降りしきる公園の自然の中であった。試合は八月四日から七日迄行なわれた。公正、闘志、友情を大会のモットーとし、郷土と、学校の代表として、正々堂々とプレーを展開し三位に入賞。

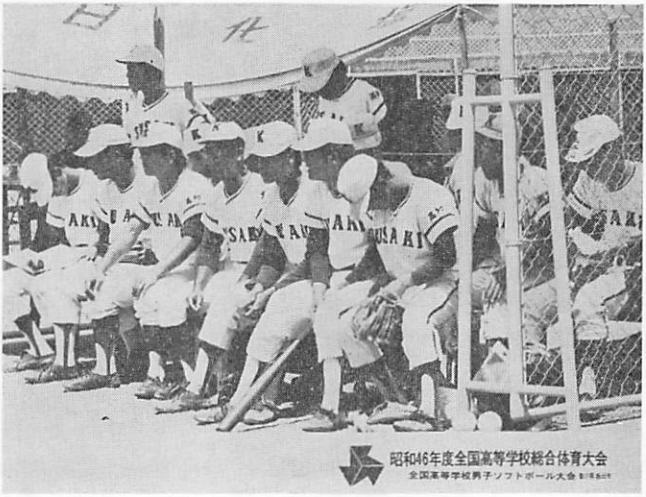
一回戦大阪代表岸和田産業高と対戦、尾崎投手の好投と、五番野村の左中間を破る大本塁打などで二対一で初戦を飾る。二回戦神奈川代表相洋高と対戦し、先ず初回、二番中川の左翼越本塁打で火ぶたを切り、回ごとに得点を重ね五対三で勝利をものにする。三回戦徳島代表徳島工高と対戦、相手高を完封、気力で淮決勝戦に駒を進める。

淮決勝戦は、この大会の優勝校高松商高と対戦、四国大会で破れている相手だけに、何としても借りを返さねばとナイン全員、一丸となり戦にいどむ。接戦を続けたが尾崎投手に連投の疲れがでたものか三回暴投で一点を与えてしまう。しかし四回に相手投手の豪速球を一番田村が安打し口火を切り、二番西岡が送り一死二塁、三番山崎は凡フライにおわったが、四番村田が中前安打を放ち、同点とする。その後投手戦となり延長八回、連投と延長のつかれでコントロールを乱し、ヒットを打たれて三対一で敗れ、決勝進出の夢は破ぶれた。

戦評では、須崎工業高は、主将村田を中心によくまとまり、安定した守備力は天下一品、マナーも良く、関係者や観衆にも評判の良い好感の持てるチームであると賞讃された。敗れて残念だが、ここまでくれば、ベストを尽した、満足である、という感激と共にまた来年への新たな決意が、選手一人一人の顔にうかがわれ改めて選手達の頼もしさを感じた。

昭和四六年度。今まで県内の大会であまり敗れていなかっ

た。その心の緩みからか、春の県大会では一回戦で完敗、これを機会に精神面と練習強化を図り、全国大会の予戦を賭けた五月の県体では、高知商高と優勝を分け合い、三度全国大会と、四国大会の出場権を獲得。徳島で行なわれた四国大会では、一回戦松山工高を一四対六、準決勝戦では徳島工高を一一対二と完勝し、決勝戦に駒を進めたが高知商高と対戦、三対四で惜敗し優勝ならず。



続く全国大会は、坂出市で八月七日から九日迄行なわれ、昨年相対した相洋高と一回戦で対戦、昨年の借りを返そうと激しく喰下がって来る相手を戸田投手の好投と、一番田村、四番大野のタイムリーで二対一で初戦をものにする。二回戦大阪代表初芝高と対戦、投手のくずれと補手田村のインターヘヤなどもあり二回に三点を失う。打撃も左投手の速球にあわずヒット性のあたりは守備の真正面をつく不運もあって七対三で完敗する。

以上ソフトボール部の活躍ぶりを述べてまいりましたが、こうした多くの大会に出場できたのも、平素のきびしい練習や、強化合宿にたえ、またある時は石や砂運びのアルバイトなどを部員と共にし、部費を積立てたりしたことなどの地味な一つ一つの積重ねの結果だと思います。今までと同様、今後も可愛いい部員達と共に汗を流すつもりです。

選手達にも、礼儀、忍耐、努力、根性、チームワーク、責任の意味を実感として受けとめ深い感銘をあたえることができたと思います。生徒達は多くの大会で得た体験を忘れることなく、自らを戒め、謙虚な態度で行動すると共に、学業とスポーツを両立させるように指導したいと思っています。

選手達にこうした尊い体験を味わすことが出来たのも学校、父兄、同窓の方々の物心両面からのご協力と、ご援助に支えられたおかげでありまして、改めて感謝の誠を捧げるものであります。

（電気科・進路指導部）

各科紹介

生れ変る機械科

――実験実習設備の充実――

教諭　坂東長太郎

本校の創立は機械科をもって始まった。いうなれば機械科は本校の元祖である。創立当時の模様については当時の先生や卒業生の方によって詳しく述べられることと思うから省略するが、物資の極度に窮乏した戦時中のことであり大変なご苦労があったことと思う。その諸先輩の苦心の結晶であった機械科も戦時中に行なった機械器具の疎開やそれに伴なう損傷のため戦後数年間は尾羽打ち枯らした見る影もない有様であった。

この状態は本校に限ったことではなく高知工業はもとより全国の工業学校が大なり小なり同じ状態であった。これに起死回生の息吹きを与えたものが昭和二七年に制定された『産業教育振興法』である。この法に基ずく国庫補助金によって全国の職業高校、特に工業高校は生き返った。本校も大きくその恩恵をうけたのである。

先づ三四年には木造ながら原動機実験室が、四〇年には鋳造、木型、鍛造、材料試験、計測の各実習室が鉄筋コンクリート建で新築された。

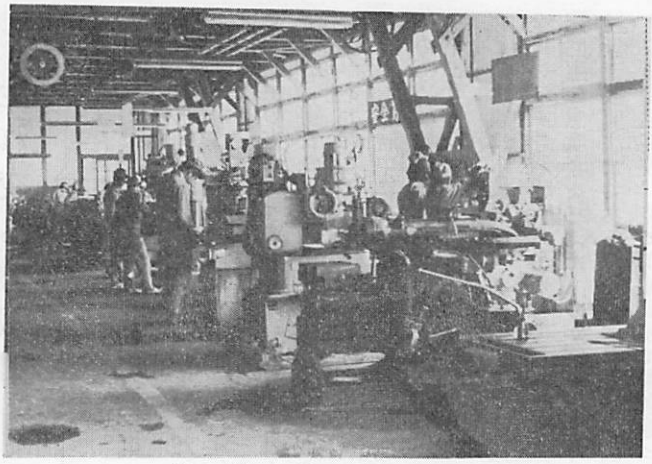
実習用機械設備も逐次充実されて現在では文部省の基準の六二%までに達している。今これを各実習室別に見てみれば、機械科として最も馴染深い機械工場では一般設備充実や更新の措置によって創立当時の工作機械は逐次その姿を消して面目を一新した。

先づ昔なつかしいベルト掛けの旋盤は四一年度で全部姿を消し現在ではモーター直結型となった。心間五五〇粍程度のもの

旋盤実習　(46. 10)

が一三台、大型のものが三台、戦前のものでは八尺旋盤が一台残っているだけである。

諸機械の部では旧式のフライス盤、ボール盤等はすべて更新され旧式のもので残っているのはプレーナーとホブ盤のみであるが、これも四六年度限りで廃棄更新される予定である。



諸機械実習　(46. 10)

現在はフライス盤二、各種研削盤三、シェーパー一、ボール盤三、歯切盤二、切断機三が設備されている。いづれも最新の新鋭機である。

板金溶接の部では古い機械は全部更新され、シャー一、折曲げ機一、管曲げ機一、動力プレス二、手動プレス一、ガス溶接機一、スポット溶接機一、電気溶接機二、等が設備されている。

鋳造実習室では基本的なものに加えて型込機、砂ふるい機等による能率化、各種の検査装置、炭酸ガス法、シェルモールド法等の特殊鋳造装置が設備された。

鍛造実習室では古い「スプリングハンマー」や「エヤハンマー」や大型の重油炉に代って小型で使い易い重油炉やエヤハンマーが設備された。

材料実験室では万能試験機、衝撃試験機、各種の硬度計、熱処理のための電気炉が購入され、更に非破壊試験用のX線装置も設備された。

水力実験室では従来のものに加えて新しく油圧実験装置が加えられた。

原動機実験室ではガソリン、ヂーゼル両機関とも新製品にかえ、水動力計や電気動力計やオッシログラフを備えた指圧計が設備された。また実験用として一、五〇〇CCのマツダの貨物自動車も購入されている。

工業計測室では精密測定として従来実習していたものの外に空気マイクロメーター、電気マイクロメーター、オートコリメーター、工具顕微鏡や動釣合い試験機等が新しく設備された。

以上の様に実験実習機器は殆ど更新充実されたが、建物のうち機械科職員室や機械実習室は依然として創立当時のままの面影を残しているが、これも本年度を最後として新校舎に移転することになっている。

尚現在機械科の生徒は六学級で一学年定員八〇名計二四〇名、機械科専門教員は一三名である。

（機械科長）

造船科の生立から今日まで

教諭　合田正寛

本校は昭和一六年機械科単科で発足しましたが、造船科は昭和一九年に地域の要望と、戦時下における社会状勢で船舶技術者の必要性により設置され現在に至っております。

昭和二四年三月に第一回卒業生二八名（うち一九名は新制度の工業高校に入学）を送り出して現在まで約五〇〇名が卒業し、県内は勿論全国各地の造船所等で活躍しております。

私が本校に赴任したのは昭和二六年ですが、校舎の大半が火災で焼失した後で建物といえば本館と講堂、機械科実習工場、造船現図場位のもので、コンクリー土台の焼跡が一面に残っている様な状態で授業する教室も無くて講堂を仕切ったり、現図場の片隅で授業をしたことでした。

当時は生徒数も少なく、一年次は機械科、造船科の区別なく入学し二年生への進級時に希望により機械科、造船科と分れる形式でしたので二年生五名、三年生一一名という小世帯の頃もありました。

造船科担当の職員も竹村義典先生と私の二名でしたが、当時の生徒諸君の授業や実習態度は実に熱心でかつ和やかであって、今から想えばいい知れぬ良き雰囲気であったように思います。

昭和二八年度より定員を二〇名として募集し発足当時の姿に還った訳です。

それから校舎も復旧拡張されるに従い造船科の実習の施設設備も次第に充実され定員も二〇名から三〇名となり現在では四〇名の定員です。又造船科担任の教職員も教諭五名、実習助手一名の構成となり実に今昔の感が致します。

造船実習室も各部門の施設設備が充実されました。建造実習では今流行のＦＲＰ漁船も建造され須崎湾に特異な存在で浮んで居ります。

実習実験室の中でも昭和三八年に建設された船体性能実験室は全国工業高校では二番目に造られたものです。この実験水槽は重錘式のものでアメリカでは発達して居りますが日本では建造された例が少なく、建造に当っては参考資料も乏し

く非常に苦労しました。

造船科の私達にとっては心血を注いで誕生した実験室ともいえます。

水槽の長さは三〇メートルの重錘式小型水槽ですが船体の定性的な実験には信頼出来る値が得られ学校での実験指導、或は地域の造船所にも大いに利用してもらって居ります。

今では本校造船科のシンボルともいうべきものだと思います。

昭和四七年度からは須崎湾を一望出来る多の郷の丘に新築されている立派な校舎に移転します。新校舎の実習実験施設

船体性能実験　(46. 9)

設備は更に充実される筈ですが、造船技術の進歩が驚異的な現在、まだまだ満足出来るものではありません。然し学校教育では基礎的な自信を身につけさせること、これが一番重要なことと考えられます。

目ざましい工業技術発展の現在、私達は工業技術教育の重要性を認識し更に努力し造船日本の中堅技術者養成に努めたいと思います。

造船科の現況報告と共に今後一層の御支援を賜りますようお願い致します。

(造船科長)

化学工業科の新設から現状まで

教諭　田所靖通

昭和三二、三年頃全員入学、高校入学定員増の声が高くなり、当時の森岡校長先生の時に一科増設の計画が検討されました。

さて従来の機械科、造船科、電通科の他に何科を新設するかについて討議されましたが、化学科新設に落付いたのであります。

早速全国の主な工業高校にアンケートを求め、工業化学科

の教育課程、施設設備、教員数などについて調査計画がなされ、県教委の田口指導主事(現高知県教育センター理科部長)の指導をうけました。

先輩校である高知工業高校はもとより、大阪の都島工高には特にご指導をいただいたことでした。

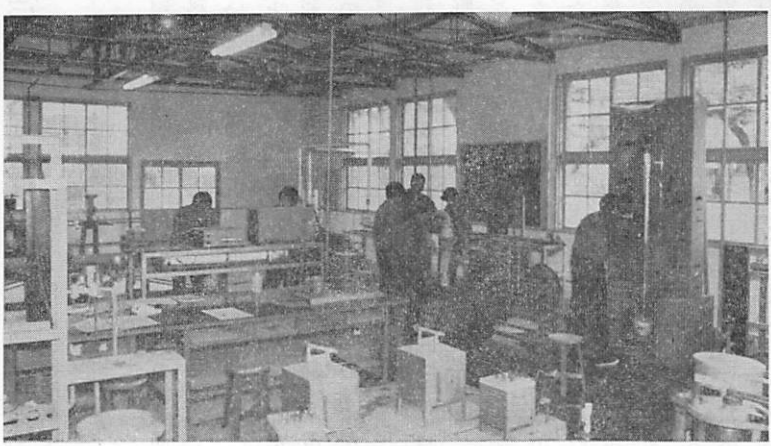
『高知県のような地場産業、特に化学工業の少ない所に化学科をつくっても卒業生は殆んど県外へ出てゆくだろう。貧乏な高知県が無理して化学科をつくることはないじゃないか』といった歯に衣をきせない意見も聞かされました。(都島工高校長・村上正巳氏)

そうしている中に昭和三四年二月県議会で最終的に設置が決定されましたが、施設設備面での何の準備もなく、四月には第一回生が入学してきましたが、収容する教室もなく図書室を改造してどうにか間に合せたものの実験室もない状態でした。その後ぼつぼつ施設設備も出来て一回生が卒業する頃になって漸く一通りの施設設備が出来た様な有様でした。現在や更に目下建築中の新らしい施設をみるにつけ誠に感慨にたえないものがあります。こうした悪条件の中でも一期生、二期生は創設期の先達としてよく勉学に励んだものでした。

昭和三六年四月高知工より小松一夫校長を迎えたことは新設の化学科にとって百万の味方を得たような心強いものでした。

小松先生は新設の化学科の育成について非常に尽力され、特に今日と異なり就職のむつかしかった当時、新設の化学科卒業生の就職については随分骨を折られました。

不十分な設備の中で勉強し、新設学科という不利な条件にも負けず一期生は化学工業界は勿論、鉄鋼界、電器産業界、造船界その他広い範囲にわたり一流企業に就職し、現在ではすでにその中堅となって大いに活躍し



化学工学実習 (46. 9)

ております。

その後、時代の要請に応えて順調な発展を遂げ、現在教員六名、生徒定員百二〇名となっております。今春第一〇回の卒業を送り出し卒業生の総数は三七二名に達しました。

尚、本校では「化学工業科」と称しておりますが、本校に化学工業科を新設した当時は工業の化学科は工業化学科というのが普通でした。昔の所謂応用化学科であります。

従来の工業化学科は分析化学、理論化学、合成化学が主な学科でしたが、当時既に化学工学、工業経営、工業計測が取り入れられ、次第に体質が変りつつありました。そこで、前述した田口主事の指導もあり、新設の化学科にふさわしい内容と将来化学工業界で活躍する人材を育成する化学科を表わす意味で「化学工業科」という看板にしたわけであります。

その後、従来の工業化学科も次第に体質改善が行なわれ、昔の応用化学科、工業化学科とは大分体質が変っておりますが、多くの工業高校では従来通り工業化学科と称しております。

従って実質的には殆んど変りありませんが、新設の本校ではその体質を表わす意味で「化学工業科」と命名した次第であります。

（化学工業科長）

電気通信科より電気科へ

教諭　森　義彰

開校三〇周年記念誌を発刊するに当たり、もとの電気通信科より現、電気科への変遷経過及び電気科の現状について概況を報告させていただける機会に恵まれました。

開校三〇周年と一口に申しても、電気科については、その前身である電気通信科の設置から勘定して凡そ二〇年、電気科と完全に科名の改称があってからは、僅か五年の星霜を経るに過ぎません。

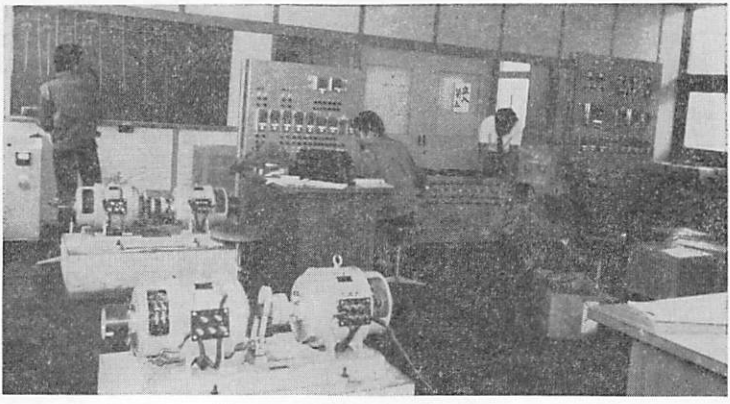
扨て電気通信科設置の経緯につきましては、既に、当時、渦中にあられた野中先生より東奔西走のご体験に基いた、誠に詳細で貴重なご記録を寄稿していただきました。ご一読、充分納得していただけたと思いますので、発足以前の事情は省略させていただくこととし、兎も角、紆余曲折、種々の困難を伴いつつも諸先輩のご尽力の結果は、いよいよ電気通信科第一回生の入学という記念すべき日を迎えるに至ります。昭和二七年四月のこと。電気通信科は斯様にして新生いたしたわけですが、実業科に必須の施設、設備等は誠にお粗末の一語に尽きる有様、文字通り無よりの出発というに等しく、とても満足な教育の成果を期待し得る状態ではありませんで

した。然し世状未だ必ずしも整っていなかった。発足当初の社会状勢下にあっては無理からぬ現象でしたろうか。当然ながら、翌昭和二八年一〇月には、文部省産業教育研究指定校の指定を受け、同振興法に基ずく、設備補助を向う二ケ年間に亘って受けることが出来ました。そこで関係者一同、ひたすら実習設備の充実に努力したのですが、何分当時は、地元負担金等、スムースには遂行し得ない困難な問題も付随して居り、労多くして尠い収穫に心労のあった時期でありました。兎も角、何んとか実験実習等も真似事が出来る運びとなり、教育活動も追々軌道に乗り入れた時点で、昭和三〇年一一月には「工業高校電気通信科課程における生産実習の好ましい運営について。」と題する研究発表会を全国規模において実施いたすまでになりました。

その後は、遅々たる歩みながらも、新設当時の不如意からは徐々に脱却、漸次、本校電気通信科も、安泰期を迎えたかの感がありましたが、ここに至って社会的な客観状勢の変化がもたらした変革は、電気通信科の歴史にも例外なく影響を及ぼし、この時期以後、電気通信科より電気科への移行問題が大きくクローズアップされて参ることになります。

即ち、昭和三八年当時、戦後の所謂ベビーブームなるものに起因する全国的な「生徒急増対策」。それに並行して、高度成長経済下における「産業教育振興対策」という二つの時代的要求が打ち出されるに至ったのがこれでありました。本県においても、その一環を担うべく新設校を設置すると共に、一方本校においては、電気科が新設されることに決定し、昭和三八年四月早くも第一期の入学生を迎えました。尚この年の五月には、関係二五市町村と県教育委員会との間に新設所要経費の一〇分の一の額（約五五〇万円）の地元負担の覚書調印の運びとなった次第でした。

この度は電気通信科発足の当時とは異なり、施設、設備等の拡張充実



電気機器実験　(46. 9)

振りは瞠目に価し、翌三九年三月には、第一期工事として、高圧実験室、電気機器実験室、電気計測実験室が完成し、真新しい機器による、実験実習が開始されたのですが、時代の要請もさることながら通信科黎明時代と比較して、隔世の感に堪えないものがありました。他方、電気通信科については、昭和四〇年度より文部省産振補助対象より除外される破目に陥りました。為止むなく、電気通信科としての生徒募集を中止、移行的措置として電気科において弱電コース、強電コース各一クラス宛計二クラスのコース制を採用することに決まりました。猶、同年四月には、電気科第二期工事として自動制御実験室、並びに別棟として電気工事実習棟が完成を見ましたので、一応の実験実習面での学習活動にも事欠かない状態に至りました。

昭和四一年三月には、従来の電気通信科の卒業生と共に、新設電気科の第一回卒業生を送り出し、程なく四月の新年度より電気科八〇名の入学生を迎えることを機としコース制も自然廃止。翌四二年三月にはとうとう電気通信科最後の卒業生が巣立ったわけで、ここに完全に電気通信科時代は終りを告げて名実共に電気科時代に移行、現在に至っております。

一学科の変遷を述べてきまして、はからずも現在、須崎工業高校糺町時代もやがて終りを告げようとし、学校史そのものの上に一時期を画さんとしつつあるに思い至ります時、感慨一入なるものがあります。

以上、簡明にと心がけ事実の羅列にとどまりましたが、拙文を以って電気通信科を経て電気科生い立ちの記とかえさせていただきます。

新校舎に一際そびえる電気科の象徴、アンテナの如く、電気科の今後共一層発展あらんことを祈って擱筆します。

（電気科長）

PTAの活動と移転新築

須崎工業高校ＰＴＡ略史

第五代会長　中　田　稔

初代会長は阪本和久氏である。何れの会でも創立には苦労が伴う。特に氏は就職を本命とする実業校、然も敗戦後未曽有の不況というより生きるが精一杯、大工場や事業場の求人も極めて稀、加えて不慮の災による校舎二棟焼失。復旧が長びき仮設教室での勉強が相当続いた。かくて志願者は漸減、前途誠に憂うべき時代だった。氏は須工の振わない理由は前記事情もさることながら、父兄、校下民の学校に対する熱意援助の低下もその因なり。創立時長い悲願達成の喜びに思いを致し如何にしても興隆へ、この情熱を以てあらゆる努力を傾注した。田原先生を部長に相撲部創設、先生不休の結果は全国優勝、須工の名声を天下にとどろかせ向上に大きく前進。須工を救った人ともいえる輝かしい事績を残された。

二代黒岩晋六氏は性磊落、先代の志をつぎ向上に精進した。三代は田中保馬氏である。氏は事業でも立派に成功。人格、手腕共に卓抜の人。名校長と讃えられた森岡貞篤先生や諸先生と共に随分御尽力下さった。特に隣接田購入や焼失校舎の完全復旧などの業績を残された。

四代は又川清水氏だ。資性極めて温厚、副会長上川氏と共に学校と父兄の調和、生徒の学力、品性向上に尽力した。五代は西内国次郎氏である。氏は県会議員だったので会合その他、副会長の私が代行することが多かった。須工の農耕地拡張隣接田購入については随分関係者に御配慮を煩わした。前の購入分と合わせ二千余坪の拡張。これで計六千余坪となったが、更に引続き拡張しておれば移転せずに済んだ筈だが、当時県財政では須工には之が精一杯だった。

ＰＴＡの歴史をひもとく時、忘れ得ないのは勤評の問題だろう。当時県下どこの学校でもこれに関係した人は殆んど例外なく心身共に随分苦労せられただろうが、須工に関しては父兄の冷静と学校側の良識で切り抜け得たことは、当時責任者の一人として今以て肝銘している。かくて私は西内氏よりバトンをついだ。私の時代に懸案の化学工業科が増設された。これで機械、造船、電通、化学工業と一応科は整った。

七代は又川潤氏である。氏は須小三年、須中三年連続会長、市議といふ超ベテラン。之に配する副会長はこれまた須小、須中、須高会長歴任、市教委二期の川村為三郎氏。この両氏でＰＴＡ活動も更に活発に須工発展に貢献した。

翌年川村氏八代会長となったが、氏は長いＰＴＡ活動の最後で有終の美をかざるべく精進せられた。氏の去った後又川氏再度会長となった。氏も同様之が最後だ。須工の為に献身、かくて須小、中、工業三校に大きな足跡を残して去られ

た。

一〇代は古谷義計氏だ。氏は市議三期連当、社交、政治力豊かな人だ。この時須工は敷地狭く拡張するには隣地に住宅が建ち地価も高い。この際思い切って他に校地を求め、移転してはとの議が起り西本澄雄校長、古谷会長が主となり既成同盟会を組織し目的達成にまい進すべきとなし、上田市長、梅原市会議長や前記又川、川村両氏を含む有力メンバーを招集し之を決定した。四一年四月、校長が西本先生より沢本豊先生に、市長は上田氏より天野剛利氏に変り本格化。敷地も五、六転して決った。敷地物色、購入、整地、建築等、沢本校長不朽の功績はさることながら又川、川村両常任理事の蔭の力も見逃してはならない。この間古谷会長より一一代笹岡正猪氏となる。氏は市議の経歴者、既成同盟のメンバーとして協力した。一二代は松下好一氏だ。氏は市議当選、更に須工に献身しようとしたが間もなく病気で亡くなった。副会長として活躍した藤原登氏一三代会長に就任。氏は関西土木須崎出張所長で古谷氏と共に敷地物色には大変骨を折られた。整地は関西土木に依頼したので物心両面で一方ならないお世話になった。かくて氏は校地移転に蔭の大役功績を残して第一四代横山昇二氏にバトンを渡した。横山氏は須工創立当時の先生で、当時の生徒を勤労奉仕に引卒の大役を果した若い機械科教官だった。今や思い出の須工に今度はＰＴＡ会長として奉仕する身となった。資性温厚の内にも流れる熱血で更に輝かしい須工の歴史創造に精進された。氏は本年三月ご子息の卒業と同時に辞任され、第一五代（現）会長は押岡の橋田忠幸氏。氏は当市議会にその人ありと知られる名議員で、地域の信望も極めて厚く、一口にいって大変世話できる方と聞く。新築工事、移転など大きな問題に直面しておる学校として氏に期待するところは誠に大きい。二〇余年の歳月、一四人の会長が奉仕した。任期の長短はあれ、私を除いては何れも立派な事績を挙げておられるが紙面の都合で詳述出来ないのをおわびします。加えてＰＴＡは会長だけでは何も出来ない。他の役員や諸先生の協力あってこそその目的が達成出来る。然るにこの稿には主に会長名の連記で苦労を共にした役員諸兄の中に「一将功成りて群将埋もる」のご批判もあろうが之も同様故御海容を願います。

更に先輩をさしおき投稿の非礼もまたお許しを願います。初代阪本、二代黒岩、四代又川、五代西内、一二代松下の諸先輩既に亡く、謹んでご冥福をお祈りします。右の内黒岩氏を除いて何れも五〇台の若さで亡くなっている。残る諸先輩よ、希くばご健勝に長生きせられ社会の為は勿論、思い出の須工の為に今後共ご援助をお願いします。

糺町より環境絶佳の大間に、近代建築の粋を集めての殿堂に移る日も近く、限りない未来に向って限りない文化の進歩

を追求する須工の弥栄を皆様と共に祈念いたします。

移転新築への胎動

移転新築期成同盟会
副会長　古谷義計

県立須崎工業高等学校創立三〇周年に際し記念誌を発刊せられますことは誠に意義深いことと存じ衷心より賛意を表する次第でございます。

私は昭和三九年五月より昭和四二年五月までの三ケ年間PTA会長として、また現在工事が進められて居ります学校移転新築期成同盟会の初代会長として用地買収や県当局との交渉等にあたって参りましたのでこの機会に当時の記憶をたどりまして移転新築に関する経過の一端をご報告を申し上げたいと存じます。

昭和三九年一〇月のPTA役員会で当時の西本校長先生より学校の実状についてご報告あり、同時に将来の我国の工業界に役立てる技術教育のためにはどうしても学校の整備拡充が必要である旨力説せられました。以来何度か会合して研究を重ねた次第でございます。その結果第一案として現在の校地を西側へ三千坪程度拡張して鉄筋四階建の校舎と各科の実習設備を充実する方法について検討致したのでございます。丁度その少し以前、西側の隣接地を国道（五十六号線）が開通したため地価の値上りが甚だしく拡張用地の買収が困難となり第一案は実現不可能となりました。そこで抜本的に計画を変更することとなり市当局及び議会のご協力を得て移転新築について運動をおこそうということになりました。これが実現のために市長、議会、教育関係者及び各層の有志の方々のご参集をいただきまして移転新築期成同盟会を結成致したのでございます。会長にはPTAとの関連もあり、私が兼ることになった次第であります。

当工業高校は参議院議員寺尾豊先生のご寄付によって創立せられたものでございますので、移転新築について寺尾先生のご了解を得、更にご援助をいただくため昭和四〇年一〇月末、西本校長先生と共に上京しまして、寺尾先生に事情ご説明申上げご了解をいただきました。

以上の手順を経たうえで県及び教委に対し陳情を重ねた次第でございます。そうして漸く期成会の手で運動場用地を買収することを許可いただきました。昭和四一年二月頃のことでございます。早速候補地（角谷）について地主との交渉を始めたのでございますが何分にも広大な用地を必要と致しますので関係者は数十人に及び用地買収の交渉は困難を極めました。その間、西本校長先生は小津高校にご転任になり後任として現校長沢本先生をお迎え致しまして気分を一新して交

渉にのぞんだのでございますが、結局角谷地区は不成功に終りました。続いて須崎市内至るところ候補地を物色し検討致しました結果、幾多の困難と紆余曲折を経て大間西方地区の用地買収交渉が成立致したのでございます。

これが昭和四二年四月で、これを機会に私は会長をひいて副会長となり、新会長には須崎市長天野剛利氏が就任され現在に至っております。高台の新校地、あの風光明美の地に立派な校舎の新築を見るに至りまして誠に感無量でございます長い間この問題と取組んでこられた沢本校長先生を始め関係の方々に敬意を表し、学校の益々の発展をお祈り申しあげる次第でございます。

新校地への陣痛

学校長　沢本　豊

昭和三九年四月八代目の校長として着任した西本澄雄氏は本校の校地があまりにも狭く、これでは工業教育の現代化に即応する施設や設備をととのえることは到底不可能であるという見解のもとに少なくとも一万五千坪（約五万㎡）程度の校地を求めて移転しようと決意された。

翌年一〇月寺尾豊氏を名誉会長、当時の須崎市長上田辻益氏をはじめ周辺の町村長を顧問、古谷義計氏を会長、又川瀞氏、矢野亀雄氏（本校第一回卒業生で同窓会副会長）と学校長を副会長、須崎市在住の識者、有志で本校にご厚意をよせていただいておる方々を理事とする『高知県立須崎工業高等学校移転新築期成同盟会』（以下期成会と略称する）を結成した。

この事業は教育に理解があり、本校にご厚意をよせていただいておる多くの人々の善意と援助とによって成就したものであり、これらの方々に限りない感謝の念を捧げるものである。特に本文中にお名前のでる方々には東奔西走わがことのようにご尽力いただいたので皆様の理解を深めるために前もって簡単にご紹介しておくことにする。

上田辻益氏
初代須崎市長、期成発足当時推進役としてご尽力いただいた。

天野剛利氏
二代目及び現須崎市長、四二年四月より本会の会長として大変ご尽力いただき、特に対県交渉において独特の政治力を発揮され、困難な諸問題を次ぎ次ぎ有利に解決していただいた。

古谷義計氏
元本校ＰＴＡ会長、発足当時の期成会会長としてその基礎

を確立され、とくに用地さがしには東奔西走多大のご尽力をいただいた。

平田　寛氏
元須崎町長、須崎高校振興会長、対県交渉において力強いご指導やご援助をいただいた。

川村　為三郎氏
元PTA会長、対県交渉や地主との困難な折衝、更に土地造成工事の会計として重要な役割をお願いした。

中田　稔氏
元PTA会長、対地主交渉に独特の説得力でご尽力いただいた。

井上　繁馬氏
用地探しや対地主交渉にご尽力いただいた。

梅原　里吉氏
最終的に決定した大間地区地主との交渉に絶大なご支援をいただいた。

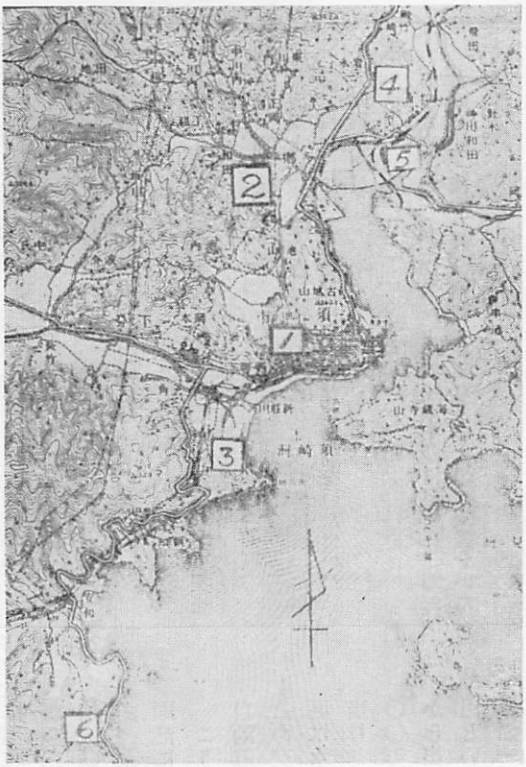
明神　高志氏
梅原氏と同様、最終決定地の地主及び不成功には終ったが多ノ郷地区の地主との交渉に絶大なご援助をいただいた。
元県議会議員

藤原　登氏
PTA支部長、のち同会長、関西土木須崎営業所長、地主との交渉、校地造成の設計、施工など多大のご支援をいただいた。

広瀬　一喜氏
土地売買仲介業、新校地の用地買収に当り地主との交渉に奔走され、短期間に妥結に導いた。

結成後直ちに対県交渉に入ったのであるが、先づ本校は運動場が狭いので少なくても一万五千坪位の運動場を造成するということを正面に押しだして交渉した。これは賢明な作戦であった。というのは当時県の教育委員会では須崎工業高校は現在地で改築するという方針をたてており現に昭和三八年から三年間の継続事業で機械科、造船科、電気科の実験実習棟（鉄筋コンクリート二階建、延一、一六〇㎡）を建築中であったので移転だとか、新築だとかの話をもっていっては一顧だにされなかったことであろう。

こうして対県交渉をすすめる傍ら角谷地区（写真の③須崎自動車学校の西北側、国鉄線路の東側）を候補地として地主との交渉に入った。計画の大要は用地代一、〇〇〇万円（同地区は水田としての価値が乏しいので反当り＝約一、〇〇〇㎡当り＝二〇万円、五町歩で一、〇〇〇万円）埋立工事一、〇〇〇万円（当時建設中であった国道五六号線のトンネル工事から出る廃土を利用して格安に仕上げるとして）合計二千万円ということであった。二千万円で一万五千坪が出来れば坪単価一、四〇〇円足らず、当時としても格安であった。



①は現校地　②は新校地　③・④・⑤・⑥は検討を加えた移転候補地

席上古谷会長より角谷地区の地主のうちに反対意見の強いものがあり前途楽観を許さない旨の発言があったが話し合の結果、角谷地区には関係の深い古谷会長になお粘り強く交渉していただくことにし、角谷地区不調の場合の代替地として写真の②④⑤⑥などを逐次検討しておこうということにして散会した。このうち②が最終的に移転地となり現在校舎が建築されつつあるが、当時は一応検討してみようという位の軽い気持であった。

以後、六月から翌年三月までの間、ある時は灼けつくような炎天下に、またある時は冷たい秋時雨の中を山に登り、谷間を抜渉して黙々として現地を調査していただいたり、寒夜おそくまで地主との交渉にご尽力いただいた古谷会長をはじめ又川氏、川村氏、平田氏、中田氏、井上氏、明神氏達のご厚意に対しては、ただただ感謝と感激があるのみである。

こうするうちにも古谷会長の対角谷交渉はつづけられたが地主との話し合は進展せず、七月上旬に至って遂に角谷地区は断念して候補地から外すことになった。もっとも角谷地区については運動場専用としてなら問題ないが移転を考えた場合、あまりにも海に近く潮風の関係もあって工業高校の敷地

これが昭和四一年頭初のことである。この話が県、地元ともに十分実らないうちに西本校長は同年四月の異動で小津高等学校長に転補され、後任として私が着任しこの仕事を引継ぐことになった。

五月上旬期成会の役員会（出席者、古谷会長、上田市長、橋田須崎助役、武内教育委員長、又川氏、井上氏、川村氏、中田氏、田川氏、私、河内教頭、斉藤事務長、浜田教諭）を開き既定方針＝運動場造成↓移転＝を再確認した。

としては好ましくないという意見も少なくはなかった。

そこで②、④について成造可能面積、土地代金と工事費を含めた総事業費などを試算することになり藤原氏に依頼した。その結果②は一万坪、五千万円、④は一万二千坪六千万円という結果がでた。これはもとよりあら算用であり若干の動きの生ずることは考えられるが角谷地区の一万五千坪、二千万円に比べると可成りの高値となる。然し当時の事情からみておおよそ妥当な線であったと思われる。

こうした土地調査を行なう傍ら対県交渉は中断することなく行なわれた。

土地調査のため度々開かれた役員会において運動場作りを移転新築の隠蔽にする作戦をすてて移転新築を正面に押し出すべきだという意見が次第に強くなり、七月以降そのように改めて、交渉することにした。その理由としては、

一、会の名称が『高知県立須崎工業高等学校移転新築期成……』であり県当局も当方の肚は見抜いていること。

二、県は現在地で改築するというが、現在地で改築するとすると産業教育振興法に基づく基準の六割に押えるとしても校舎の多くは鉄筋コンクリート四階～五階建にしないとおさまらないが、それが可能な建築用地は二、〇〇〇坪そこそこである。そのうえ機械科、造船科、化学工業科の実験実習場の中には平屋建でなければならないものがあり、その建築用地は一、〇〇〇坪に近い。更に屋内体育館やプールの用地を考えると運動場は今よりも狭いものになってしまう。

三、移転すれば現在の校地を売却することができる。坪二万五千円（当時）としても一億五千万円の財源となり新らしく校地を作っても一億円の余裕がでる。

などであった。このような方針のもとに古谷会長、平田氏、又川氏、川村氏達にご同行を願い、時には河内教頭と二人で、何度となく委員会を訪れ、またある時は知事を公邸や知事室に訪れて直訴に及んだことも一再ではなかった。

こうした努力を重ねておるうちに県の教育委員会においても地元の熱意と移転の必要性や可能性を認識し、期成会が現在地を坪三万円以上、総額一億八千万円以上で責任をもって売却するならば移転も考えられるという意向を示すようになった。然し経費の総額については明確な線を打ちださず、時には四、八〇〇万円、またある時は四、〇〇〇万円という具合であった。これには随分悩まされたが委員会としては無理のない点もあったようで、本校の移転が年度初めから決定していたわけではなく、許される起債の枠内で他の県立高校からも要求されておる用地の取得を考える場合、須崎工業高校にいくらあてることができるかということは容易に決定できなかったことと思われる。

ともあれ現在地を売却することによって財源ができるから一万二千坪位の用地を作って移転することにしよう。ただし校地造成の総額は四、八〇〇万を越えることはできないぞ。という大きな方針が決定した。これが昭和四一年一一月末頃のことである。

他方移転候補地については②は東西にある小山とそれに挟まれた深い谷間からできていて、七月頃考えた方法は東側の小山の谷側の大部分と西側の山の谷側の一部を削りとって谷を埋め九、〇〇〇坪位の土地を作るという案で用地に一千万円、工事費四千万円というあら見積りであった。

この案に対し県では造成面積の割合に経費の多いこと、東西に山が残って盆地の形になること、などの理由で難色を示した。もっともその当時委員会は移転という線は決定しておらず、むしろ反対の意向だったので何かと口実を設けたのはむしろ当然であったかも知れない。

②と殆ど平行して検討を加えてきた④（岩永地区）は②と似かよった地形であるが、ただ異なる点は谷が②とは反対に南に開口しており、谷は遙に浅くて広い。従って土地代は高くなるが工事費は少くてすむ。

造成面積一万二千坪、買収用地一万三千坪として用地代金三千五百万円（水田反当八〇万円、畑同三〇万円、山林同二〇万円）造成費二千五百万円合計六千万円というあら見積りである。経費の点で問題はあるが、いよいよとなれば面積を減らしてもよい、とにかく調べてみようということになり人を介して地主と交渉に入った。四〇名余の地主のうち三〇名近くは同意を示したが残りの一部は態度保留、一部の地主の中で密柑の木一本につき二万円の補償を要求する人、水田については予定価格より遙に高い価格を希望する人などあり、これらの要求をすべて呑むとなると総額で七千万円近くなる。そのうえ予定区域内に墓地が多く墓石が二百柱程あってこの移転先、及びその経費をすべて引受けるとなると経費は更に嵩むことになる。このような事情のためにこの地区もまた断念せざるを得なくなった。

②、④と殆ど同時期に⑥（安和地区）も候補の対象となったが須崎市の中心からあまり離れすぎること、台風時に通学路が波に洗われること、角谷地区と同様潮風の影響が心配なこと、などのため一応候補地から外すことにした。

このようにして候補にのぼった土地がつぎつぎに不調に終り役員の間にも漸く失望と焦りの色がみえはじめた一〇月末頃、関西土木ＫＫの笹岡氏（当時専務・現副社長、曽て本校で学ばれた）から、国鉄多ノ郷駅南方の水田地帯⑤を検討してみてはどうか、反り当四〇万円、高くても六〇万円位で買える筈だが……との提案あり、早速調べてみたところ水田としての価値は低く反当り五～六〇万円位で買える見込みであ

る。②に比べるともとより地価は高いが山地と異なり造成費が格安となる。そのうえ山地での造成地は形が不整形となって土地の利用率が低くなるが平地ではこれを整形にすることができるので殆ど全面積を利用できるなど利点が多い。とりあえず地質を調査することになり藤原氏のご厚意で専門の業者に依頼した。これが一二月中旬のことである。明けて昭和四二年一月上旬、『地質良好』との結果がでたのでここを候補地として申請した。

前述したように教育委員会の肚は決定していたが知事部局との事務的処理に時日を要し最終的に知事の決裁が下ったのは三月に入ってからであった。

委員会は三月一五日までに土地購入の契約をし年度内に着工して遅くとも五月中には工事の目鼻をつけて欲しいという要望である。ことは急を要す、県から最終的な認可が下るまで、期成会としてはあまり具体的な話しもできず、それとなく地主の意向を探る程度であったが、今やそんな悠長なことはしておれない。三月七日役員会（出席者、古谷会長、平田氏、中田氏、又川氏、井上氏）を開き協議の結果三月一〇日土崎の公民館で地主との話し合を行なうことになり直ちにその手筈をととのえた。三月八日には楠瀬技監、吉村事務官の二人が現地視察に来訪し月末までの細い計画表を示したうえ天野市長や竹林助役に面談して援助を懇請して辞去するなど委員会の動きも俄に活潑になった。

私はその夜、明神氏に電話で事情を話して援助をお願いし快諾を得た。

三月一〇日の地主との会合の模様

一、日時場所　三月一〇日午後一時～同五時土崎公民館

一、出　席　者

（県教委）落合課長補佐、谷内、吉村両事務官。

（期成会及び学校）古谷会長、平田氏、又川氏、井上氏、沢本、河内、浜田。

世話人　明神氏、松浦氏（地元市会議員）外二人。

地　主　一一名（三〇余名中）

一、経過の概要

落合氏及び沢本より工業高校移転の必要性を詳しく説明、更に平田氏より長期的視野における地元にもたらす利益などを説き協力を懇請し、買い取り条件として若干の格差を設け、反当五〇万～六〇万円、登記面積でなく実測面積によるなど提示した。地主側より代替地の斡旋をして欲しいとか税金の肩替りをして欲しいとか二、三の条件が出されたが出席者の大半は協力的であった。然しこの話しは一人の反対者があっても成り立たないことであり地主の出席者があまりにも少ないことなどより前途多難を思わせた。

地元出身市会議員四人が手分けして各地区の地主を説得して廻ることにして当日はさしたる成果もなく散会した。

中一日おいて三月一二日、日曜日であるが、明一三日からは入学者選抜の学力検査が始まり、三、四日の間は動くことができないので曜日のことなどはいっておられない。もう一度地主との話し合を行なうことにした。出席者、県教委より前回と同じ三氏、期成会より古谷会長、中田氏、沢本、斉藤、浜田、地主側は前回より更に少ない七名にすぎなかった。もっとも中には数人の地主の委任を受けてきた人もあったので実質はもっと多人数ということになる。

地主側は単価の引き上げ（反当六〇万円を八〇～九〇万円に）と税金の肩替りを要求してゆづらず。県教委の三氏は協議の結果六六万円の線を出したが地主は納得しない。中田氏の長時間に亘る熱心な説得も遂に奏功せず。暗澹とした思いで夜一〇時すぎ散会した。

明神氏の要請で三月一四日夕刻世話人との会合をもつことになった。出席者（期成会及び学校）古谷会長、又川氏、沢本、河内、斉藤。（世話人）明神氏、武田、橋田両市議外一人。

明神氏より今夜もう一度地主を集める予定にしていたがどうも見込がないので中止した旨が述べられ、今回の交渉が不調に終ったことに対する遺憾の意を表わす発言あり、更に今一度岩永地区を当ってみてはどうか、地主達の態度も大分変っておるようだ……との提案がなされた。

これに対し私は今回のご厚意に深く謝意を述べると共に県教委との約束の期日も明日に迫っておることではあり、岩永地区については明年度のことにしたいと答え、一同言葉少なのうちに散会した。

三月一七日、今日は午後学校では学年末成績会議の開かれる予定であるが、私はあとを河内教頭に託し、古谷会長、又川氏、川村氏にご同行願って、用地購入が不調に終った経緯の説明と今後の対策打合せのため渡辺総務課長を委員会に訪れた。

渡辺課長（現・企業局次長）はこの問題に対する教育委員会の立役者で私共は過去一年近い間課長に無理を頼みつづけてきた。課長も期成会の考え方を理解され、知事部局の反対を押し切って移転新築の方針を固めてくださったのである。そうして予算の獲得や、造成工事中続出した困難な問題、あるいは竣工した校地の買い上げなどに好意的な尽力をしてくださった方である。

私達三人は用地の購入が不成功に終った経過を詳しく説明した。一部始終を聞き終った課長は大いに困惑の体で、

大間（②）でもよい、安和（⑥）でもよい、今一度当って検討してくれ、これ程さがしあぐねたことだから外に適地

があるとも思われない。折角獲得した予算だ。第一この機会をのがしては須工の移転は当分見込はない。是非今一度当ってみて欲しいと声を励ませた。

私達は相談のうえ一度は候補地から外した土地だがほかにない以上安和を当る外はない。とにかく地主に会おうということになり地主の家へ向った。この人は高知市内で商業を営んでおるが古谷会長とは旧知の間柄である。古谷氏から事情を割って頼めば応じていただけるであろう。万一不調の場合は今一度大間について検討し直おそう。私達は途中こんな会話を交しながら地主の家に着いた。然し、面談の結果は我々の考への余りにも甘かった不手際に終った。反当二百万円でなくては手離せないという答である。私共は非礼を詫びて直ちに帰校することにしたが、残るは愈々大間を検討し直おすという極めて可能性に乏しい希望のみである。大間となればその地に詳しく前回にも検討していただいた藤原氏を加えなければならない。同氏に来校して待機しておっていただくよう学校へ連絡しておいて直ちに車を走らせた。

四時すぎ帰校、学校てはまだ職員会議中である。誠に申訳ないが出席できない。事情を河内教頭まで伝えておいて待っていてくださった藤原氏を中心に構想を新にして検討を加えた。前回は経費を押えるため東側の山の一部を残すことにしたため校地全体が盆地の形になったが、思いきってこの山を高さ四〇mの等高線で全部切り取って谷を埋めるようにすれば土量も谷の部分とちょうど釣合って概算一万二千坪の土地ができる。経費は委員会から示された四千五百万円（一一月頃示された四千八百万円はこの話しが煮詰った三月段階で四千五百万円に減額の意向が示されていた）では到底足りないがその時はその時で対策を考えよう。今までは『総額』にあまりにも拘わりすぎて萎縮していたきらいがあるが、今やその段階ではない。

直ちに地主にあたらなければならない。ことは急を要す。この際は有力な仲介業者の力を藉るべきだということになり、大間の土地仲介業者広瀬一喜氏に土地購入の斡旋を依頼すること、二〇日夜八時から大間の高橋食堂で地主との会合を行なうことなどをとり決めた。

こうして五人が追い詰められた気持のうちにもようやく愁眉を開いた頃は街はずでに早春の夜の帳にすっぽりと包まれていた。

翌一八日明神氏が他の用件で来校されたので昨日の経過を説明し再度のご援助をお願いしたところ大いに賛意を示され力強く快諾してくださった。

最終的にこの土地に決定するまでの概要を当時の日記で追ってみることにする。

三月一九日（日）

六〇余日振りに立田に帰宅す。正月以来二度目の帰宅なり。久し振りに幾分か心の安らぎを覚える。夜一〇時すぎ公舎帰着。明日の会合につき細部の打合せをしようと古谷会長に電話したところ急用のため上京され帰宅は二七日頃とのこと……残念至極なり。

三月二〇日（月）

一〇時より小津高校において高校入学志願者の第二定員選考会議あり。高岡高校の山本明夫校長、小生の顔を見るなり歩みより『須崎工業の校地が中止になったから高岡高校の土地を買うことにしたい。すぐ地主との交渉をしてもらいたい』と総務課から連絡があったが、須工はそれでよいのか……との話なり。

私は大いに驚きただちに総務課の引地係長に事情を訊したところ、『総務課としては万一を慮かってふた道を掛けておる。須工が買えればもとより須工にする。ただしこの場合、期日の限界を二二日にしたい。二二日中に成否いずれかの確実な返事をして欲しい』とのことでやっと一安心する。

夜八時すぎより大間高橋食堂で地主との初会合を行なう。

出席者　（期成会及び学校側）梅原氏、沢本、河内、斉藤、浜田。（世話人）明神氏、広瀬氏。（地主側）一六名中一三名。明神氏が司会兼進行の役をつとめてくださる。同氏より須崎工業高校移転の必要性など説き協力を要請、つづいて小生より今日までの経過を説明し、最後の望みはこの土地だけである。価格は山林と畑は反当り三〇万円、田は同じく六〇万円、決して十分とは思わないが是非これで協力していただきたい旨を懇願した。

大半の地主は協力的であったが三、四名の地主は応ずる気配なし。明神氏、梅原氏こもごも、事業の公共性、学校完成後の地元の繁栄などを述べて説得に努めた結果、二名の態度保留を除き他の出席者は協力を約した。ただ用地の三割近くを所有しておる大地主の参加がなく、この地主一人の向背でこの計画の成否が決まることになるので不安が残らないではないが、先づ大丈夫という見通しで一〇時三〇分頃散会す。

散会後直ちに渡辺課長宅に電話連絡、今夜の会合の模様を報告し極力努力するから二二日まで待って欲しい旨を懇請す。課長より地主の確約をとっておくこと、用地の外に進入路も同時に確保しておくことなど助言あり。

三月二一日（火）

天野市長訪問。天野市長は昨年一〇月以降上田市長に代って須崎市長に就任しておられる。当然上田前市長のあとをうけて期成会の顧問をお願いしておるが従来からの経緯

もあってこの問題についてはあまり市長を煩わしていなかったが、事態がここまで煮詰った以上、事情を話して今後の援助を願わなくてはならない。市長と親しい合田教諭を煩らわし、又川氏と三人で九時前私宅にお邪魔す。

多ノ郷⑤の用地購入不調以来、昨夜までの経過を説明して了解を得、更に今回の用地が成功した場合の進入路造成などにつき市の援助をお願いして快諾を得る。

市長は『自分も明日は上京する。東京で知事に会う予定にしておるので用地変更の経緯など知事に話して了解を得ておこう』とのこと。……有難し。

正午すぎ又川氏に同道願って藤原氏宅に赴く。昨夜の会に参加しなかった最も有力な地主との交渉の結果を広瀬氏にきくためである。待つこと暫時、広瀬氏来訪す。同氏の報告によれば『仲々困難なり、朝から昼まで説得したが甲斐なし、ただし売らぬとはいわない』……とて先方の条件を話す。非常に重大で又川氏と私の二人のみで決断を下し得る程度の内容ではない。（その内容については触れないことにする）井上氏、中田氏、川村氏の三人に連絡したが前二氏は不在、川村氏ただ一人急ぎ来訪してくださる。感謝の外なし。（平田氏はご病床にあり、古谷会長は上京中で誠に残念なり）

四人鳩首協議するも容易に結論を得ず、今日は三時に渡辺課長に会って見通しを報告することになっているがすでに二時に近い。訪問の時刻を四時に変更したい旨連絡しておいて協議をつづける。……三時前、誰いうとなく『呑みましょう……今となっては仕方ありますまい』といって顔を見合せた。三人、三様いい表し得ない複雑な気持ちである。残るは態度保留の二人の地主の説得である。然し今日はその暇はない。後日どんなことがあっても説得しようと話し合いながら又川、川村、藤原の三氏と共に車を走らせ県に向う。県では河内教頭、斉藤事務長の二人が待機しておることになっておる。四時かっきりに県に到着、渡辺課長に経過を報告する。

（沢本）地主一六名中一四名までは確約を得た。残る二人は目下説得中であるが九分九厘まで間違いないと思う。

（課長）価格は？

（沢本）山と畑は一律三十万円、田は六十万円なり、ただし田は極く少なく殆どが山と畑である。

（課長）それは高い。山なら一〇万円が相場だ。

（又川、川村）須崎は違う、山でも街に近いところは坪一万円で売買されておる。高知より高い位である。須崎の特殊事情を理解して欲しい。

（課長）一万二千坪可能か。

（沢本、藤原）可能である。やりようによってはなお余裕が

でる見込もある。
（課長）確実に買えるなら可なり。明日上京して東京で知事に会うから話しておこう。二四日には帰るから二時頃概略の設計と見積をもって来て欲しい。
これで一応の方向はきまった。然し心中甚だ複雑である。

三月二二日（水）
広瀬氏を通じ態度保留の二人の説得をつづける。
事務長が委員会で調べたところによると土地の購入、校地の造成までの経費及び作業はすべて期成会の手で行ない完成後要した経費の額で県が買いあげる。ただし設計、工事請負業者決定のための入札、工事の監督、検査などは委員会が行なう。……ことになるとのこと。

三月二三日（木）
夜八時より再度地主との会合を行なう。
出席者＝（期成会及び学校側）川村氏、梅原氏、沢本、斉藤。（世話人）明神氏。（地主側）一三名。（仲介者）広瀬氏。
経過＝土地の売渡しについては、態度保留の二人を除き全員承諾す。ただ税金については地主の負担とならないよう処置してほしいと強く要求された。明神、梅原両氏からも厚意的な口添があったので、川村氏と相談のうえ、極力税金のかからないよう努力する、若しかった場合は期成会にて処理する旨を約す。出席した地主全員より用意した承諾書に署名押印をうけ一〇時すぎ散会す。

三月二四日（金）
昨夜の打合せにより明神氏、梅原氏にご同行を願って態度保留の二人の地主の説得に赴く。家には不在、ビニールハウスをあちらこちら尋ねてようやく面談、三人してこもごも地主全体の大勢、使用目的の公共性、完成後の地元に及ぼす利益など述べて説得すること一時間余、ようやく承諾書に署名をもらう。個々の地主については別に細い条件を伴なうものもあるが一応結着したことになる。お世話いただいた方々にただ感謝するのみ。
今日は課長に設計の概要と概算見積を提出する日である。午後一時すぎ川村氏、藤原氏、沢本、河内の四人にて渡辺課長を訪ね約束の資料を示す。造成面積一万二千坪、工事費五千万円、用地代金一千万円、合計六千万円。県から示された額四千五百万円に対し一千五百万円の超過であるがこれについては期成会において処置し、県には負担は掛けないことを約す。これは無謀にも近い約束であるが、㈠工事費を切り詰める。㈡土地代金にも若干の余裕がみられる。㈢最悪の場合は造成面積で加減する。などの措置によって切り抜けるようにしよう。今更後へは引けない。こ

こであやふやな態度をとるとまた話しがこわれてしまう。

渡辺課長も我々の肚を読んでいるらしく一千五百万円については深く追求せず一応了解…『。…明日午後一時知事が帰庁する市長にも来てもらって知事に会い承認を得るようにしてほしい』……とのこと。

帰校後平田氏を病床にお見舞し、かたがた経過を報告す『自重してすすめるように…』との励ましの言葉なり。恐らく不足額一千五百万円に対するご配慮であろう。

『ＰＴＡであろうと期成会であろうと失敗した時は校長がその責を負わなければならない。万事自重するように……』私がこの問題で最初にお願いにいった時いわれた藤本教育長の言葉がまた頭をかすめた。この言葉は今までにも何度となく思い出された言葉である。これからさきざきも忘れないようにしよう。

三月二五日（土）

九時より新入生の指導、一〇時井上氏を訪問し経過を報告す。『金のことは心配するな……』という励ましの言葉なり。一一時より校内移転新築委員会を開き多ノ郷以降の経過を説明し賛同を得る。一部委員より校長らの苦労に感謝する意味の発言あり、思わず胸の熱くなるのを覚えた。

昨日の渡辺課長の要請に基づき知事の承認を得るため午後二時学校発県に赴く、同行者、竹林助役（市長所用のため代理）、川村、又川、梅原の三氏に小生と矢野象一教諭を加えた六名。三時すぎ県庁着、渡辺課長と共に知事室に赴く。昨日電話で秘書へ連絡した筈だが通じていないとのこと。今日は知事予定が詰っていて会えないという。知事が室から出て来る機会を待っ外なし。一同待合室に待機す。四時半ようやく知事と面談が叶う。知事笑いながら『東京で天野市長が多ノ郷をよう買わなかったと、いい難くそうにいうとったぞ…マア委員会が

造成工事を視察する期成同盟会役員（42.7.31）
左より　又川氏、古谷氏、松下氏、井上氏
（須崎工業高校ＰＴＡ略史（中田稔氏）参照）

よいというところならエエ、然し総枠は変らんぜよ…』といいながら両手で大きく輪を描いてみせた。知事のいう総枠が四千八百万円の意味か、四千五百万円を意味するものかは明かでないが、今はそれを問い訊す時ではない。とにかく最後の断は下ったのだ。これからはつぎつぎともち上ってくることであろう所謂『土地の問題』につきものの困難で煩瑣な交渉や手続を根気づよく処理して『校地完成』ただひたすらに校地完成を目指し、及ばずながら最善の努力を尽そう。

……

以上が新校地の位置決定までの経過の概要である。以後七月一五日、関西土木株式会社の手で造成工事着工、翌年四月中旬完工、同月末県に売渡すまでに期成会対地主間、期成会対県教委の間に幾多の困難な問題がもちあがり紆余曲折を繰り返えしたが、それらには触れないことにする。

最後に祖先伝来の土地を学校用地として売渡していただいた地主の方々の氏名を掲げて謝意を表わすとともに校地造成に関する主要な数字を記してペンを擱くことにする。

……

一、地　主　芳　名（アイウエオ順、敬称略）

市川植太郎、岡田武富、岡田美恵子、川上清喜、北岡芳久、坂本常一、谷政一、谷花枝、谷脇秀樹、谷脇幸男、高橋泉、谷盛男、谷泉夫、能見鹿馬、能見和雄、明神栄。

二、校地及び校地造成に関する主な数値

(一) 校地面積　三、五〇〇㎡（実測面積）

(二) 購入した用地（進入路を含む）

(イ) 山林　一九、八一〇㎡
(ロ) 畑　四、六七〇㎡
(ハ) 田　四、二四〇㎡
合計二八、七二〇㎡（登記面積）

(三) 同右購入代金　合計　九、一四〇、〇〇〇円

(四) 造成工事費　三九、二三〇、〇〇〇円

(五) その他の経費

(イ) 借入金金利　一、九六〇、〇〇〇円
(ロ) 諸経費　二四〇、〇〇〇円
(ハ) 総経費　五〇、五八〇、〇〇〇円

移転新築について

高知県立須崎工業高等学校
移転新築期成同盟会

1・趣　旨

本校の敷地は約二万㎡（六千坪）で、学校設置基準による基準面積一〇万㎡（三万坪）の五分の一にすぎない。これで

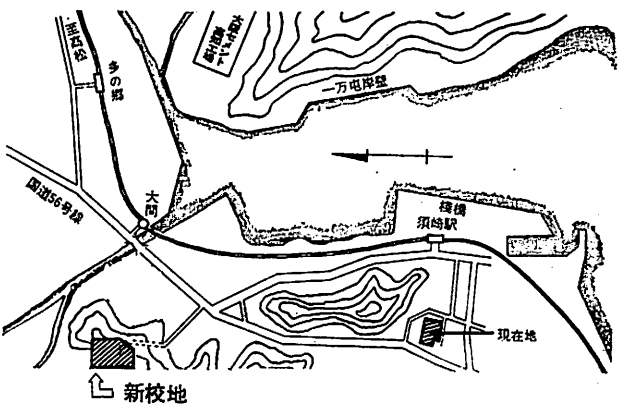
は工業教育の現代化に応えることはもとより高校の基本的な教育さえ満足に行なうことは困難である。このような実状に鑑み最低四万㎡（約一万二千坪）（高知東工業高校と同程度）の校地を求め移転して充実した工業高校教育を可能ならしめるため。

2・経過の概要

前述の趣旨のもとに、昭和四〇年秋、学校及び須崎市当局、新旧ＰＴＡ役員、その他識者有志をもって「高知県立須崎工業高等学校移転新築期成同盟会」を結成し（現会長・須崎市長　天野剛利、副会長・学校長　沢本豊、同元ＰＴＡ会長・古谷義計）関係各方面の啓蒙に努めると共に、県当局に対し度々陳情や要請をつづけた結果、昭和四二年三月に至り漸く県当局においてもその必要を認め、現校地を坪単価三万円以上で売却し、その代金収入一億八千万円を建築費の一部に充当するという条件のもとに移転を決定するに至った。

3・校地の造成

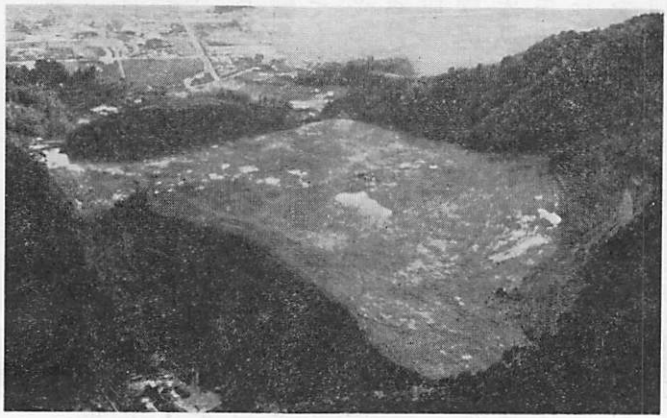
昭和四二年度予算四千八百万円をもって約四万㎡の校地を造成するという基本方針が決定され、その方法として、期成同盟会長天野剛利氏（須崎市長）個人債務と役員八名の保証のもとに、四国銀行須崎支店より必要資金を借入れ、用地の購入と校地の造成を行なったうえ県が一括買い上げるということに決定した。四月～七月、用地購入、七月中旬着工、一月竣工の予定で工事を急いだが、二度にわたる設計変更や、追加工事などのため、工期は大巾に延びて翌年四月中旬漸く竣工した。総経費は土地購入代金、工事費その他金利等諸経費を合わせ、約五千六〇万円を要した。こうして一応敷地は造成されたが、その実面積は三万五千㎡程度にすぎず、決して十分ではないので将来何等かの方法で拡張を考えなくてはならない。また校地としても未だ完成しておらず、進入路の整備、法面（のり）の補強工事あるいは校地北側通学路の整備や、御手洗川への架橋工事など完成までには更に二千万円程度は必要であると思われる。



4・校舎の新築

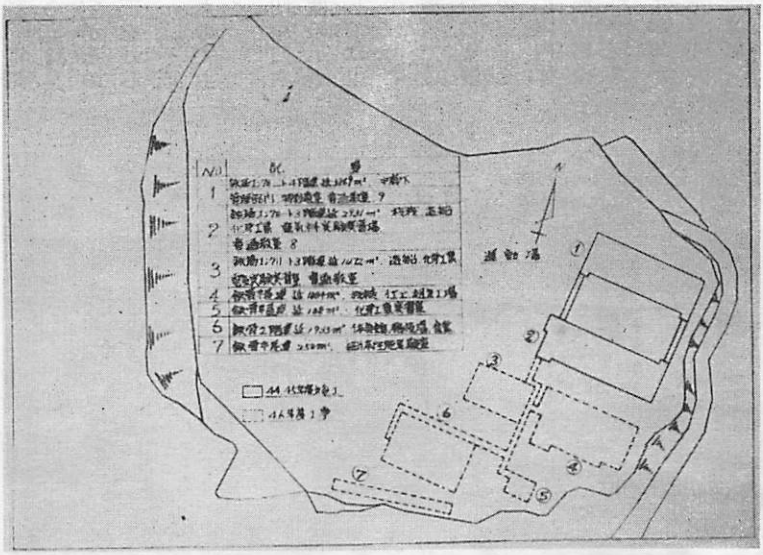
校地の一応の竣工に引き続きなるべく早く校舎の建築を行なうよう度々県に要請したが、県としては本校の新築も『高知県高等学校整備五ケ年計画』の一部として計画しておるため、校地完成、即、校舎の建築と直線的には進展せず、昭和四三年度には建築の予算を獲得することができなかった。

然し期成同盟会の役員や地元選出の県議会議員の強力な対県交渉によって同年度末に至って昭和四四年度建築予算として五千万円余を（建築延面積として約千六百㎡）を獲得することができた。校舎の平面設計については教育委員会、土木部建築課、学校の三者連絡協議の上四四年度秋、最終案を決



工事半ば成った新校地　(42.9中旬)

竣工した新校地を視察する溝渕知事　(43.5)
左より　又川氏、溝渕知事、松下ＰＴＡ副会長(後会長)
天野市長、沢本校長



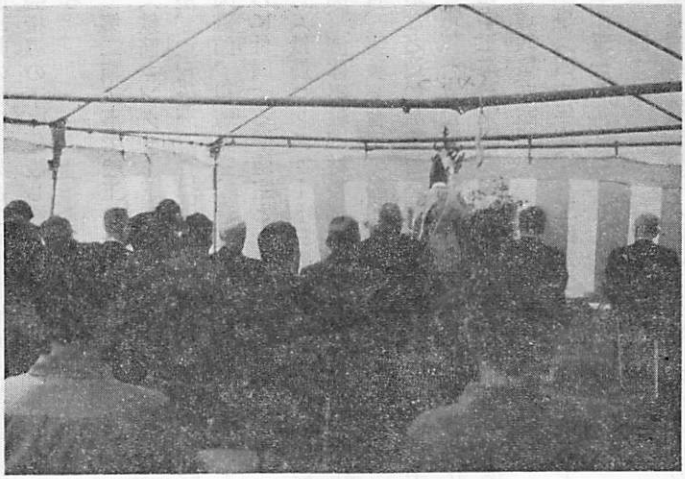
新校地及び校舎配置図

定した。

昭和四四年度工事（第一期工事）は種々の事情で着工が大巾におくれ、四五年三月に至って漸く起工し同年一〇月完工した。

四五年度工事（第二期工事）は工費一億九千三百万円（三千四〇㎡）で昭和四五年七月着工本年四月完工した。

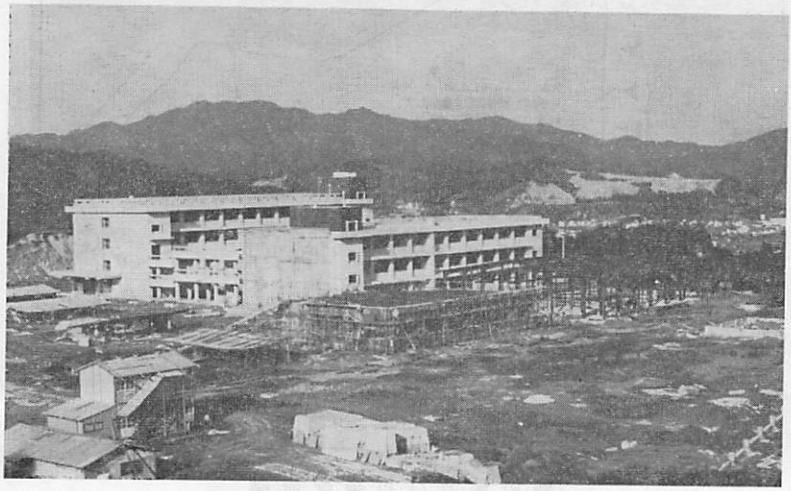
以上で、総工事量の六割程度が終ったことになる。すなわち、管理部門、特



新校舎建築起工式　(45. 3. 6)

別教室、各科製図室のすべてが完了、普通教室一室と化学工業科、電気科の実験実習室がその一部を残し殆ど完成したのである。

昭和四六年度の工事としては上記の残部と機械科、造船科の実験実習室、それに屋内体育館、格技場が予定されておるが水泳プールは含まれていない。



第3期工事下の新校舎　(46. 10. 3)

ただ体育館は県の直営事業として行なわず、期成同盟会の手で県委員会指導の下に建設し竣工の後県が買いあげることになっておる。

5. 第一期、第二期工事で竣工した施設の大要

一、本館（鉄筋コンクリート四階建、のべ三、八一一㎡）

校長室、事務室、職員室等の管理室、物理、化学教室、図書館、視聴覚室、音楽室、各科製図室、およびこれらに付属する準備室と普通教室九室。

二、南校舎（鉄筋コンクリート三階建のべ二、九〇〇㎡）

熱機関、流体実験、材料試験、工業計測、精密工作等機械科、実験実習室、船舶材料、電気、板金溶接、船舶建造など造船科実習室、電気工事、同計測、電子工学など電気科実習室、機器分析、化学分析、製造化学など化学工業科実験実習室及びそれらに付属する準備室と普通教室九室。

6. 第三期工事（四六年度、着工四六・七・一〇　竣工予定四七・三・三一）

一、一　般　施　設

体育館兼講堂、格技場等（鉄骨二階建、のべ二、〇〇〇㎡、二階体育館兼講堂、一階格技場、生徒食堂など）

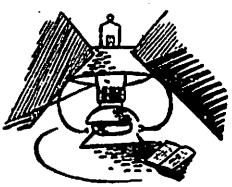
二、実験、実習施設

㈠ 『機械科』（鉄骨平屋建、九一五㎡、機械、鋳鍛造、仕上組立、板金溶接）

㈡ 『造船科、化学工業科、電気科』（鉄筋コンクリート三階建のべ一、四三〇㎡（造船科）木工、現図、（化学工業科）物理化学、化学工業、（電気科）電気機器、電気応用、自動制御、電気工事）

㈢ 『造船科』（鉄骨平屋建、三〇〇㎡、実験水槽）

㈣ 『化学工業科』（鉄骨平屋建、九五㎡、製造プラント）



編輯後記

創立三〇年にして本校は住みなれた糺町をあとにして明春大間の高台に移転していくことになりました。

この機会に創立三〇周年記念誌を発刊して本校の辿った成長のあとを収め広くまた永く世に残こそうという議がまとまったのは今年の四月のことでした。直ちに学校、同窓会、PTAで協力体制をつくり私共がその編集をお引受けすることになりました。

原稿は本校に縁りの深かった方々や、旧職員、同窓生、元PTAの役員の方などに広くお願いしましたが、本校の創立が『須崎に中等学校が欲しい…』という地元の人人の悲願の結実であっただけに、当時の心暖まる思い出や、開校当時の苦労や楽しみを綴った原稿を数多くいただくことができました。

往時を偲ぶ写真は主として学校に保存されておるものを載せましたが、中には原稿と共にお届けいただいたものも一〇点ほど含まれております。原稿をお寄せいただいた方々に心からお礼を申しあげます。

とくに本校創立の最大の功労者である寺尾豊先生から玉稿をいただくことのできたことはこのうえもない光栄であり、よろこびであります。

表紙のデザインは曽て本校で教鞭をとられた金澤弥三平氏（金沢薬局店主）の力作であります。

こうした多くの人人のご厚意とご援助にもかかわらず私共の非力のため、願みて不備な点が多く本校三〇年の歴史を十分に語り得なかったことをお詫して、後記といたします。

昭和四六年一〇月一五日

澤本豊
田辺博造
久田正一
田村隆徳
広瀬雄助
田所靖通
竹村義典
合田正寛
森義彰
麻田正博
田村泰雄

創立三〇周年記念誌

昭和四六年一二月一日印刷
昭和四六年一二月一〇日発行

編集者　高知県立須崎工業高等学校
三〇周年記念誌編集委員会

発行者　高知県立須崎工業高等学校
同窓会長　田辺博造

印刷所　高知県須崎市浜町二丁目八―三
中央印刷株式会社

発行所　高知県須崎市西糺町四―二一
高知県立須崎工業高等学校